

# 死なない少女の英雄志願【if・敵ルート】

緑茶わいん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『死なない少女の英雄志願』（nid||213138）の番外編、ifルートです。

タルタロスから脱獄したオール・フォー・ワンを倒し、平和を守った永遠。

しかし、彼女に待っていたのは罪人としての罰だった。

過酷な仕打ちの果てにヒーローであることを諦めた彼女は、AFOにより世界から個性を消し去ることを決意する。

※タグを確認、了承の上でお読みください

※鬱展開、バッドエンド等がお嫌いな方の閲覧は推奨しません

※本作を読まなくても本編を読む上での支障はありません

目次

1.	正義の在り処	1
2.	『孵化』	10
3.	始動	19
4.	奪われたもの	27
5.	悪の組織の女子会	36
6.	お茶子の決意	45
7.	インタビュ―・ウイズ・イモータル	54
8.	暗躍	62
9.	波乱	70
10.	狂気	79
11.	死闘	88
12.	略奪者と落第継承者	97
13.	転換	107
14.	宣言	116
15.	級友	125
16.	予兆	134
17.	開戦	143
18.	出撃	152
19.	善戦	161
20.	決戦	170
21.	勝敗	179
22.	変革	188
23.	変わっていく世界	196
24.	永遠の島観光ツアー	204

2 7.	2 6.	2 5.
始まりの終わり	終わりの始まり	反抗
230	221	212

## 1. 正義の在り処

八百万ヒーロー事務所は荒れ果てていた。

窓ガラスは割られ、門は破壊され、外壁には無数の落書き。

投げ込まれたと思われる危険物から生物までが散乱し、手書き印刷問わず、罵詈雑言の書かれた紙が大量に散乱している。

現場だけを見れば、とても日本とは思えない。

ヒーロー映画に出てくる荒廃した街そのものだ。

「たった、一週間ですよ……?」

やおよろずしも  
八百万百はがっくりと膝をついて呆然と呟いた。

抱えてきた数々の品を取り落としたことさえ反応できないまま、義妹——否、妹と自分がアイデアを出し、両親が建ててくれた事務所の今を見つめる。

「なんで、たったの一週間で、こんなことができるんですの……っ!」

絶叫は周囲の建物、更には通行人まで響いた。

しんとした静寂の後、返ってくるのは冷たい視線。

百の着ている英雄の制服を見れば、おおよその事情は呑み込めるだろう。なのに、いや、だからこそ、人々が心に浮かべるのは『悪意』だった。

「誰だあいつら」

「友達でしょ。ほら、英雄の」

「ああ、国立のヒーロー校」

「あそこももう終わりだろ。何せ飛び級させた生徒が世紀の大犯罪者だもんな」

「っ!」

頭に血が上る感覚。

冷静沈着だと周囲から評され、自分でもそう思っている。故に、百にとってそれは滅多に陥らない異常な状態だったが、彼女は敢えて衝動に身を任せた。

立ち上がり、振り返って叫ぶ。

「あの子が、何をしたっていうんですの!」

瞳からは涙を流しながら全力で訴える。

「お願いします、これ以上、妹を悪く言わないでくださいませ！ 悪いのはあの子ではない、理屈で考えればそのくらいのこと、わかるはずでしょう？」

だが、反応は鈍く、冷淡だった。

「妹？」

「姉だろ。ほら、八百万百」

「ああ、あれが」

「人殺しの姉」

瞬間、百は生まれて初めて、殺したいほどに人を憎んだ。

実際に殺そうとは思わない。

だが、スタングレネードでも放つて全員纏めて黙らせるくらいはしてもいいのではないか。半ば本気で思い、己の「個性」を起動しかけて、

「ヤオモモー」

一緒に来た友人——切島の一喝で我に返った。

否、踏みとどまった、と言った方がいいか。

見上げれば、切島もまた怒りに身を震わせていた。震えながら、歯を食いしばりながら、絞り出すようにして訴えてくる。

「止めろ。八つ当たりしたって何にもならねえだろ。……俺達は、そんなことするために来たわけじゃねえ」

「切島さん……」

「……ああ、そうだな」

ぼん、と、百の肩を優しく叩いたのは轟だ。

不器用な癖に精いっぱい笑顔を浮かべて言ってくれる。

「八百万。今はあいつが喜びそうなことをしようぜ。ここを綺麗にして、で、キッチン借りて飯でも作ろう」

「……そう、ですわね」

ようやく、百の顔にも笑顔が戻った。

まだ身体には力が入らなかったが、それでもしつかりと立って頷く。

「ありがとうございます、切島さん。焦凍さん。わたくし、柄にもなく興奮してしまいましたわ」

「いいさ。百にはいつも世話になっている。たまには恩を返さないとやってられない」

「おいこら、そこ。二人の世界作ってんじゃねえよ。俺が場違いみたいじゃねえか」

苦笑しながら文句を言ってくる切島に「ごめんなさいね」と答えて、百は地面に落とした掃除道具を拾い上げた。

三人だけで来て正解だった。

麗日や芦戸といった女子はもちろん、切島と轟以外の男子も同行を希望してくれたのだが、せっかくの休日——それぞれのインター予定をキャンセルさせるのは心苦しい、と、少数での訪問を決めていた。実際に行ってみて掃除しきれないようなら次回はお願いする、と約束して。

(もし最初から大勢で来ていたら、さっきの醜態を見られてしまいましたわ)

涙をそつと指で拭う。

妹に笑われないためにも、今は頑張らなければならぬ。

「さあ！ 掃除を始めますわよ！」

拳を突き上げて宣言すれば、応、と、男子二人の声が続いて上がった。

だが、運命は残酷だった。



大犯罪者オール・フォー・ワンの脱獄から一か月と少し。

『平和の象徴』オールマイト不在の中、かの凶悪敵<sup>サイラン</sup>を倒したのはビルボードチャートTOP10入りを果たしたプロヒーロー達だった。

中でも戦局を決定づけたのは最年少、イモータルヒーローのトワ。

彼女はオール・フォー・ワンと同一の個性を駆使し、彼を封じ込めると、エンデヴァーやミルコらと共に巨悪を打ち取った。

とどめになったのも、トワが右腕を変形させて放った強烈な一撃だった。

だが、オール・フォー・ワンを殺しても戦いは終わらなかった。かの男の死をトリガーとする「個性」「寄生」が発動し、国内外問わず多くの人間がオール・フォー・ワンに乗っ取られる事件が発生。一か月をかけて事件は収束したものの、直接間接含め、発生した死者数は万を軽く超えた。

——世論はこの事態を重く受け止め、原因の追究を求めた。

当然、犯人であるオール・フォー・ワンは悪い。

だが、寄生体を含めて死滅した者を今更責めても仕方ない。これ以上の罰を与えようがないからだ。よって、矛先が向かったのは別の者。

『寄生』のトリガーを引いた者。

オール・フォー・ワンを殺したヒーロー、トワに責任があるという風潮が急速に出来上がっていった。

『そもそもヒーローが人殺しをするなんて』

『殺さなければ寄生事件は防げた。危機管理がなっていない』

『そもそも本当に知らなかったのか？』

『いや、それ以前に彼女は本当に平和を守っていたのか？』

『個性も隠し持ってたんだろ？』

悪人と同じ個性を行使したという事実が疑心暗鬼を煽り、人々の心を負の方向へと誘導した。

トワがオール・フォー・ワン以外にもう一人殺していた、という事実もこの流れに拍車をかけた。しかも殺害されたのは大病院の院長。

どうしても『寄生』を止められなかったのが原因だと言うが、「個性」研究の第一人者をこのタイミングで殺した事に作為を感じる者は後を絶たなかった。

『人殺し』

『平和を守るためなら一般人でも殺す危険人物』

『寄生事件の死傷者は全部こいつのせいだ』

イモータルヒーロー・トワを糾弾する流れはあつという間に抑えよ



うのないレベルにまで高まり、そして、まるでその流れを肯定するかのよう  
に政府・ヒーロー公安委員会・警察が共同で決定を下した。『イモータル  
ヒーロー・トワこと八百万永遠のヒーロー資格剥奪』  
『八百万ヒーロー事務所は閉鎖』  
『加えて、ヒーロー特権の過剰行使、個性の不正所有等々複数の罪状に  
より九十九回の死刑を執行する』  
『なお、この死刑執行については公開するものとし、希望者は抽選で観  
覧の権利を得るものとする』

死刑執行の観覧希望者は募集開始から一時間を待たずに定員を突  
破、最終的には百倍を超える倍率を記録し伝説になった。



永遠の死刑は決定から一か月後という異例の速さで執行された。

「――」  
ヒーロー代表として見届人選ばれたプロヒーロー・ホークスは常  
通りのポーカーフェイスを崩さないまま、会場となる某地下競技場へ  
と現れた。

会場内には大掛かりなセットが取り付けられている。

大型モニターを備えたすり鉢状のステージ、その中央には過剰とも  
思えるほどの拘束具を備えた礫台――十字架が用意されている。

客席は会場の外周に設置され、数百人規模の警察官によって守られ  
る。

会場内外全体の警備を全て合わせると数千規模、大きなイベント  
並の人数が動員されていることになる。それを見たホークスは一言、  
「少ないっスね」

「へ？ ……ああ、いや、大丈夫ですよ」

警備体制の責任者は一瞬「何を言われたのかわからない」という表  
情を浮かべた後、手を振って笑った。

「警察官の他にも手練れのヒーローが数多く配置されますからね。も  
ちろん、ホークスさんは見届人として最後まで『見ているだけ』で構

いません」

「なら、いいんすけどね」

準備は粛々と執り行われた。

ホークスはセットの端に立ったまま、執行の時間が近づくのをただ待っていた。

観客が入つてくるとホークスに向けて歓声が上がったが、それにも一切応えない。とてもではないがそんな気分にはなれなかった。

警備側のプロヒーローも続々と到着。

エンデヴァー、ミルコ、リユーキュウ、サー・ナイトアイ、イレイザー・ヘッド、ミッドナイト、チーム・ラーカースの三人、ベストジーニスト etc……。

錚々たる顔ぶれ。

イレイザーやナイトアイが含まれていることを考えれば、ビルボードチャート表彰式の時よりもずっと強大な戦力といえる。たとえオール・フォー・ワンが乗り込んできて個性消去からのプロミネンスバーンで成す術なく撃退できるだろう。

そして、全ての準備が整ったところで、八百万永遠が入場してくる。少女はガチガチに拘束されていた。

両腕を複数の拘束具で完全に固められ、足には片足ごとに5kg以上の重りが複数取り付けられている。二重の目隠しがされ、口枷を嵌められ、更に全頭マスクを被せられた状態。凶器を隠すことができないよう服は最低限のインナーだけだ。

(トワさん)

彼女とはしばらく話をしていない。

最後に言葉を交わしたのは確定した刑を告げに行つた時だ。暴れるかもしれない、とホークスが同行したのだが、永遠は諦めたように笑って「わかりました」と言った。

今だって、重りを引きずりながら自分の足で歩いている。

昨日はほぼ一日中「最後の晚餐」を行っていたらしい。体制側からのせめてもの慈悲だ。まあ、本当のところは「完全に殺しきるつもり

はない」というポーズだろうが。永遠の身体はエネルギーさえ残っていれば死んでも復活する。それ故、自己保全の一環として、並の人間とは別次元でエネルギーを保存可能なようにできている。

しかるべき量の食事さえ取れば、百八回生き返ることも不可能ではない。

(トワさん！)

少女がすり鉢の真ん中に磔にされる。

厳めしい声が罪状を読み上げる中、ホークスは「早く終わってくれ」とそれだけを考えていた。  
が。

「ふざけんなよ……！」

残念ながら、彼の出番が来てしまった。

近くにいた警官を軒並み気絶させて褐色美女が飛び出してくる。時を同じくし、会場内にワープしてくる幾つかの影。前髪で目を隠した美女に雲のような頭をした少年、更にブドウ頭の小柄な少年。妙に可愛い顔立ちをした成人男性。

「恩着せがましいことを言うつもりはねえ！　だがな、てめえら、本当にわかんねえのか!?　てめえらを命がけで守った奴に『死ぬ』って言うのが、てめえらの正義なのかよ!?!」

予想はしていた。

だが、できるなら現実にならないで欲しかったのだが、

「……………」

無言のままに放った羽根が褐色のプロヒーロー——ミルコを襲い、その全身をズタズタにする。

ミルコは「へっ」と不敵に笑うと、ホークスをきつと睨みつけた。お前はそれでいいのか。いつまで犬の真似事をしていやがる。そんな風に聞こえたが、無視した。

他の乱入者達も程なく捕らえられて連行されていく。公務執行妨害。プロヒーローは資格を剥奪され、ヒーロー学校在学中の生徒は退学か。

ざわつく中、乱入に対して一步も動かなかったNo.1ヒーローに

抗議の声が上がるが、

「俺は敵の介入を阻止するためにここに居る」

静かな、しかし会場全体に響く声がざわめきをかき消した。

「やるなら早くしろ。敵に付け込まれたいのか」

エンデヴアーの威圧に圧されるように死刑執行が再開される。

ホークスは、渦中にある少女が僅かに唇を歪めるのを見た。

数十人の警察官がすり鉢の半ばで銃を構え、

——凄惨としか言いようのない光景が大型モニターに映し出された。

頑張っても中学生にしか見えない少女が銃殺される光景。

轟音が響き鮮血が飛び散る。

無抵抗で複数発の銃弾を受ければ、人はまず間違いなく死ぬ。しかも一発は心臓を貫通していた。望んで来たはずの観客からも悲鳴が上がる。

そして、少女は再生する。

傷口が塞がりきる前に再び銃声が響き、再生が起こり、再び銃声。

繰り返される惨劇は、もはや、一般人はおろかヒーローにさえ見せるべきではないのではないかと、思えてならなかった。



そして、九十九回。

たくさんを意味する数字分だけ殺された少女は、身体を綺麗に再生された後、気を失っているかのように首をだらんと垂れ下げた。

(……トワさん)

端から血が流れているのを承知で、ホークスは更に唇を噛みしめ、「どうせなら百回殺せよ——」

観客の誰かが心無い、もはや正気を疑いたくなるような罵声を浴びせた瞬間。

——礫台と拘束具が纏めて砕けた。

誰もが呆然とする中、少女はそのまま崩れ落ち、倒れ伏した。



## 2. 『孵化』

九十九回死ぬくらいなんでもないと思っていた。

——痛かった。

別に生き返るわけだし。

刑が終われば許してくれるらしいし。

まあ、死刑になった人間がまだ生きていた場合の法律が無いだけなんだけど。

——苦しかった。

実際、痛み自体は耐えられた。

最初の二、三十回でもう感覚は麻痺しちゃってたし、変な声上がるのも口枷が抑えてくれてた。視界が隠れてるお陰で余計なもの見なくて済んだ。

でも、

——辛くて辛くて仕方なかった。

敵でもなんでもない相手に殺されることが。

敵扱いされることが。

——私は、悪いことしたつもりなんてないのに。

だから私は心を殺した。

ただ耐えればいいんだから。

上が、みんなが求める理想のヒーローは「完璧なヒーロー」。

休まず戦えて、決して敵に負けなくて、街にも被害を出さなくて、辛いななんて口が裂けても言わなくて、いつも笑顔で対応してくれる、そんなヒーロー。

私心なんて必要ない。

機械のように何も考えず、ヒーローという機能だけが在ればいい。

悲しみも怒りも全部殺して、みんなの求める私になればいい。

殺して。

殺して。

殺されて。

……資格剥奪された人間でも、もう一回試験って受けられるのかな

？

受けられなかったらどうすればいいんだろう。

別にいいのか。

受けちゃ駄目だっって言われるなら、私は必要ないってことだ。普通にひっそり暮らせればいい。近くで敵が出てても、ヒーローの邪魔になるから何もしない。目障りだから出て行って言われたら「わかりました」って従って、田舎に、山奥に引っ込んでいく。

別に食べなくても完全消滅するわけじゃないんだし。

餓死して死んだら数十年かけて生き返って、また自殺するのを繰り返せばいい。

いいよね。

オール・フォー・ワンはもういなくなつた。

原作に描かれていた脅威は全部どうにかした。

後は私の仕事じゃない。

修業期間をたっぷり取ったデク君がオールマイトの代わりになつてくれるはず。

だから、私はもういらない。

あの男の望み通りにだけはならない。

私は人を恨まない。

世界が私を必要としないというなら、私は何もしないことを選ぶ。九十九回。

脳内でカウントが終わると同時に銃声が止まる。

その頃にはもう、私の心はほぼ死んでいた。やっと終わった。

これで終われると、思った時。

「どうせなら百回殺せよー！」

声が聞こえた。

——まだ、苦しまなくちゃいけないの？

生まれた疑問を私は殺した。

殺すと、気持ちが悪くなった。

楽になった直後、新たな疑問が生まれた。

——あれ、私ってなんでヒーローやりたかったんだっけ？  
私は忘れていた。

私の『不老不死』は私という存在を保全するようにできている。  
だから、潰れた脳を復元する際に不要な記憶を消したりもするし、  
壊れた身体を再生する際により丈夫に作り替えたりもする。  
つまり。

八百万永遠が緩やかな死を選ぶというのなら、『不老不死』は死んだ  
感情を侵食して私の人格そのものを作り替えるのだ。

意識せずに発動した身体強化の“個性”が拘束具の全てを砕いた。

「あははは」

倒れたまま、私は小さく笑った。

——そうだ、平和のためだ。

人に恭順するためじゃない。

なんだ、簡単じゃないか。

ヒーローに拘る必要なんかない。世界を平和にすればいい。その  
ためなら手段は選ばない。選ぶ必要も、意味もない。

必要な力は私の中にある。

皮肉なことに、与えてくれたのはみんな敵だった。

「あはははは、あはははははははははっ!!!」

私は『槍骨』を暴走させると、拘束具ごと自分の身体を破壊した。



「……うん、良い感じ」

一分足らずで再生した身体で立つ。

ううん。

新生って言った方がいいのかも。

成長した私は十七、八歳くらいだろうか。

身長はA組のみんなに負けなくらい伸び、胸も百ちゃんやお茶子  
ちゃんには及ばないものの自慢できるサイズに成長。むしろ全体的  
なスタイルで言ったら今の私の方が勝ってる気がする。腰くらいま



で伸びた髪と合わせて「美女」と言っても差し支えない。

都合のいいように身体を改変できる『不老不死』さまざまである。ふう、と、息を吐いた私は顔を上げてホークスを見た。

「——イレイザー！」

彼は顔を顰め、一瞬だけ私に何かを言おうとしてから、相澤先生を呼んだ。

判断が早い。

さすがとしか言いようがないけど、無駄だ。

私が持つ『サーチ』は彼女達の存在を察知している。

ホークスに呼ばれるまでもなく動いていた相澤先生が私を睨み、異形型以外の「個性」使用を全て封じる。でも、その一瞬後には、見えない誰かの蹴りが先生の首を直撃、身体ごと頭を地面に叩きつけていた。

かと思えば、その先生の首が持ち上げられて、

「がぶり」

全裸の美少女が姿を現したかと思うと、直接歯を突き立てた。

「トガヒミコ！ 葉隠透！」

「もう遅いんじゃないかなあ」

相澤先生に『変身』したトガちゃんが鋭く視線を走らせ、並居るヒーロー達を牽制しながら跳躍。彼女の派手な動きのせいで『透明』なままのもう一人——透ちゃんの気配を探るのは困難になった。

どうして二人がここにいるのか。

当然、さっきの白雲君のワープに同乗してきて、そのまま息を潜めていたからだ。

と。

私もぼーっと見てたわけじゃない。

相澤先生の『抹消』が無くなった直後には腕を振るって『空気を押し出す』個性を起動、近くにいた者達に吹き飛ばした。

刹那、無数の羽根が飛来。

空中に逃れたホークスの攻撃だ。私は少し楽しくなりながら『転送』を起動、吸血が終わって用の無くなった相澤先生を呼び寄せて盾

にする。ホークスは大きな羽根を戻したものの、小さな羽根はそのまま先生に突き刺さる。私は首根っこを掴んだまま先生をホークスに向けて投げ飛ばして、跳躍。

空中でトガちゃん和視線を交わして交錯。

ジェット噴射の勢いで飛んできたNo. 1ヒーローを振り返って睨んだ。

「!?」

瞬時に消失する『ヘルフレイム』。

推進力を失ったエンデヴァーに対し、私は『エアウオーク』で空気を足場に更なる跳躍。

「レイザーを触ったんだから、当然奪ったに決まってるじゃない!」

「貴様——敵に堕ちるか!」

慣性のまま移動するしかないエンデヴァーが手を伸ばしてくるも、私はそれを片手で掴み、音を立てて捻り上げた。

「があああああああつ!」

「うん。そのつもりだけど、それが何?」

用の無くなったエンデヴァーを捨てて、残っているヒーローへ適当にプロミネンスバースを放つ。ぶっつけ本番だから出力が微妙。私自身が焦げた上に火力が足りてない。

ああもう、いいや面倒くさい。

「透ちゃん、トガちゃん、一緒に来てくれる?」

「聞かないでくださいよそんなこと」

「私達が永遠ちゃんから離れるわけないじゃん」

「良かった。ありがとう」

『転送』で呼び寄せた二人を両腕に抱いて『二倍』を起動。

『エアウオーク』で滞空した無数の私にオール・フォー・ワン得意のあのコンボを起動させつつ、私は自分達を別の場所へと『転送』させた。

「き、貴様らどこからぐわあーつ!」

護送車の中かあ。

狭い上に移動中の車内だけど、元ヒーローと元敵だけあって、視界

が変わった瞬間に思考より先に身体が動くんだよね。

十秒もかからず、車内にいた警官が全員気絶していた。

私と透ちゃん、トガちゃんは拘束されていたミルコやセンスライさん達を解放。

「一緒に来てくれる人は？」

尋ねた後、賛同してくれた人だけを連れて更に移動した。



緑谷出久は『その報道』を屋外でのトレーニング中に聞いた。

気が散らないよう、一定以上の『重要な』ニュース以外通知されない設定をスマホには施していた。そのうえで入ってきた知らせは、想像以上の大事だった。

「永遠さんが逃走、エンデヴァーほかヒーローが複数人負傷、競技場が崩壊、一般人にも負傷者——!？」

事件から二、三分しか経っていない状態での「第一報」であるため詳細は不明だが、ただならない事態であることは十分すぎるほどに伝わってくる。

(どうする？ 僕は、どうすればいい？)

居ても立つても居られなくなるのを感じながら焦る。

そもそも、永遠の死刑執行があるのは知っていたのでトレーニングにも身は入っていなかった。だが、これは予想外だ。

これでは、オール・フォー・ワン脱獄の二の舞になる。

だったら、立ち上がるべきはOワン・フォー・オール F Aを持つ緑谷出久以外にいないのではないのか——。

「っ!？」

ぺた、と。

『何か』が首に触れてくる感触に、愕然とした。

「こんにちは、デクくん」

驚愕から硬直した一秒未満の間に手を離れた『彼女』はあっさりと姿を現した。

見事なスタイルをしたロングヘアの美女。

薄く笑みを浮かべる妖艶な姿、しかも何故か全裸であることに男としての本能が浮かび上がりかけるも、直後には脳が状況を理解した。

「永遠、さん!?!」

「そ。とりあえず、真っ先に挨拶が必要かと思つて」

どうやって姿を隠していたのか、などと聞くまでもない。

葉隠の『透明』を奪つたのだ。

ヒーロー資格を剥奪された彼女に「個性」使用の資格はない。にもかかわらずこうして動いているということは――。

「このっ!?!」

敵。

経緯がどうの、理由がどうのをすつ飛ばして身体が動いた。

拳を固め、現在コントロール可能な最大出力でOFAを振るおうとして、

「っ!?!」

力が入らない。

否。無個性での、出久本来の出力であれば問題なく出せる。だが、OFAの反応がない。

まるで、まるで、無くなつてしまつたかのように。

「探し物はこれかな」

永遠が無造作に拳を突き出す。

直後、拳圧だけで圧縮された空気が唸り、出久の身体を叩いて吹き飛ばした。

地面に叩きつけられた出久は必死に顔を上げて永遠を見る。

彼女はボロボロになつた右手を再生させながら「身体強化なしの肉体じゃ100%には耐えられないかあ」などと呟いていた。

正確には100%の威力も乗り切らず肉体を傷つけたのだろうか――。

(使つて、る)

何か月もかけて準備しなければ受け取ることさえできなかったOFAを。



呆然とする出久の耳を穏やかな囁きが打つ。

「大丈夫。デクくんだけじゃない、世界中のみんなから『個性』を奪うから」

くるりと踵を返した永遠はどこかへ歩いていく。

「世界から『個性』がなくなれば、ヒーローも敵もいなくなるでしょう？」

「永遠、さん……君は」

それ以上何も言えないまま、平和の象徴の後継になるはずだった少年は、絶対悪の後継になってしまった少女を見送った。

少女の背中が見えなくなった後、辺り一帯に大きな声が響き渡った。

「私は永遠！ オール・フォー・ワンの力とオールマイトの力を持つ者！ 私は世界への敵対を宣言する！ 世界から一つ残らず『個性』が消えるまで、私はどんな手を使ってでも戦い続ける！ それが嫌なら、ヒーローでも敵でも、私を殺してみろ！」

翌日には同様の声明が各マスコミに届けられ——世界の終わりが幕を開けた。

「もし、私に協力してくれる者がいれば歓迎する！ 世界を『本当の意味で』平和にするために一緒に戦おう！」

永遠の声明が世界公開された十二時間後、『平和の象徴』オールマイトが声明を出した。

「私は八百万永遠を許さない。私はヒーローへ復帰し、彼女を追う」

二週間後、オールマイトは死体で発見された。

### 3. 始動

【反乱から数時間後】

「やつと落ち着いたかな」

廃ビル風施設の壁に背中を私は小さく息を吐いた。

いや、うん、さすがにちよつと疲れた。

昨日は詰め込めるだけご飯を詰め込みまくって、今日は九十九回死んで、そこからOFA奪取だもんね。いい加減に体力も限界だ。

でも、まだまだこれから。

やらないといけないことはたくさんある。

「あらためて、協力してくれてありがとう、みんな」

ここは雄英の敷地内にある演習場の一つ、その一角。

木を隠すなら森の中じゃないけど、整いすぎている雄英の設備は逆に死角になる。広大な演習場に乱立する建物内全てにカメラやセンサーを仕掛ける、なんていうのはいくらなんでも無理。「外」には無数に仕掛けられているだろうけど、建物内に直接転移する相手までは想定してない。

なので、とりあえずは安心。

一緒に来てくれたみんなも思い思いに身体を休めている。

「特に——お姉ちゃん」

名前を呼ぶと、制服姿の百ちゃん——八百万百は微笑んで首を振った。

「礼には及びませんわ。わたくしが、自分で考えた上で決めたことです」

だとしても、突然だったはずだ。

考える時間もなく「世界を敵に回すかどうか」の決断を迫られ、動く方を選んだ。

どれだけの重い決断だったか、私にも想像しきれない。

「本当にいいの？ 私がしてるのは間違ったことだよ」

「そうですわね。でも、正しい行いですわ」

それは、矛盾だ。

私は壁から背中を離して百ちゃんを見る。

百ちゃんがゆっくり近づいてきてくれるのに合わせて、こっちもゆっくりと歩み寄って、

「間違ってるのに、正しいの?」

「ええ。ルールから逸脱するのは間違っています。……ですが、平和を望む気持ちに従うのは、自然で正しい行いです」

「……自然」

「考える時間ならありました。オール・フォー・ワンの事件からずっと考えていました。何が正しいのか。ヒーローを続けていくだけで世界は平和になるのか。ヒーローの存在意義とはなんなのか」

そして、百ちゃんなりに結論を出した。

「敵を倒し、民衆のアイドルになるだけの正義? そんなもの、もう沢山ですわ。だって、それでは……妹が苦しんでいる時に手を差し伸べてやることさえ、できないではありませんか」

「お姉ちゃん」

伸ばされた両腕が私の身体を抱きしめる。

成長した私の視線は百ちゃんとそう変わらない。私も腕を回して百ちゃんを抱きしめた。重なり合った身体から温かいものが流れ込んでくる。

「あのね、お姉ちゃん。私ね、今の今まで、心の中ではお姉ちゃんのこと『百ちゃん』って呼んでた」

「……奇遇ですわね。わたくしも、心のどこかであなたのことを『義理の妹』と考えていましたわ」

抱き合ったまま見つめあう私達。

いつの間にかお互いに涙を流しながら、笑顔を浮かべていた。

「今度こそ、お姉ちゃんって呼んでいい?」

「ええ。もちろんですわ。……永遠」

私もお姉ちゃんも八百万家からは勘当されるだろう。

だから、私達はこの瞬間、二人きりの姉妹になった。

血の繋がりはなく誓いによって結ばれた絆は、きつと切れない。しばらくの間、私達は抱き合ったまま見つめあっていた。



こほん。

と、わざとらしい咳払いが響かなければずっとそのままだったかもしれない。

我に返って身を離れた私とお姉ちゃんは誤魔化し笑いを浮かべて、

「焦凍さんも、来てくれてありがとうございます」

「……別に、百のためじゃねえ」

咳払いの張本人である轟君は頬を染めながらそっぽを向いた。照れてる。

名前呼びになってるし、結構お互いに意識してる感じ？ さっきの咳払いも、私とお姉ちゃんがキスでもすると思っただらうか。

などと思っていると、だんだん精悍な顔つきになりつつある少年はシリアスな表情を浮かべて、

「俺が来たのは、あいつとは違う道を行きたかったからだ」

「エンデヴァー？」

「ああ。あいつは、ヒーローだっただろ？」

「うん。躊躇わず、私を敵として捕まえようとした」  
サイラン

結果的に『ヘルフレイム』を奪われることにはなったけど、エンデヴァーの行動は一貫していた。

ヒーローらしいヒーロー。

ぶれない。迷わない。自分にできることを全力でやり通す。それがエンデヴァーだ。

轟君はお姉ちゃんの肩に手を置きながら笑って、

「だったら、俺はヒーローには拘らねえ。俺がなりたいヒーローは、敵退治のために大事なものを切り捨てる奴じゃねえ。強くなつて戦うだけじゃ何も変わらねえなら、俺はヒーローには拘らねえ」

「敵と呼ばれても、ですの？」

「お前らが殺して壊して贅沢するために戦うとは思わねえ。それに協力したからって敵扱いされるなら、勝手にすりゃあいい」

そこまで言うのと、言ってるクサイと思っただのか、彼はそっぽを向いて私達から数歩離れた。

ははは、と、そこまで黙っていた宮下さんが笑って、

「いや、なんか私、場違いですよね？」

「そんなことないです。ありがとうございます、宮下さん。でも良かったんですか？ 今ならまだギリギリ間に合いますよ。」

「いいんですよ。どうせ結婚もしてませんしね」

彼は苦笑して頬を掻き、

「乗り掛かった舟です。それに、轟君の言った通りです。所長のやりたいことは平和の実現でしょう？ だったら、望むべき最終形は悪の組織じゃありません。体制側をひっくり返して夢の世界を実現するまで、マネジメントさせてください」

「……ありがとうございます」

私はさりげなく俯いて表情を隠した。

ああもう、なんでこう、みんな馬鹿で優しいんだろう。

そこへ。

「あーっ！ なんかいい雰囲気作ってます！ 永遠ちゃん永遠ちゃん、仲間に入れてください！」

「トガちゃんばかりずるいよ！ 永遠ちゃん私も！」

「あー、なんか疲れるなこいつら。ねえ、姐さん？」

「まあ、慣れれば大丈夫よ。それに賑やかな方がいいじゃない？」

髪型変えて伊達眼鏡したトガちゃんと、全裸（透明）の透ちゃん、制服ではなく私服姿の白雲君、それと前髪で顔を隠した女子高生くらいの美少女が転移して帰ってきた。

最後のは誰かって？ 白雲君が姐さんって呼んでる通り、センスライさんだ。『巻き戻し』で若い頃の姿にまで戻ってるので、今の写真と見比べたらぱつと見別人。

宮下さんにも提案したんだけど、顔が特徴的すぎてあんまり意味ないからって拒否された。

「ほら、永遠ちゃん。みんな。とりあえず食べるもの買ってきたから作戦会議をしましょう？ 腹が減っては戦はできないでしょう？」

「ありがとうございます、扇先輩。ですが、買いすぎでは？ ぱつと

見、二、三十人分は——」

ぐうぐう。

「お腹空いた」

「……そういえば、永遠がいましたわね」

良いタイミングで鳴った私のお腹に、みんなが笑った。



【反乱から三日後】

「……気は変わらないかい、オールマイト」

雄英校長・根津は机の上に『辞表』を置いたまま、溜息まじりに尋ねた。

正面に立った痩身の男——元『平和の象徴』オールマイトは背筋を伸ばしたまま「はい」と答えた。

「立たねばならぬ時だと判断しました。再び野に出て、敵と対峙し、想いはむしろ強くなりました」

決意表明から数日の間が空いたのはお互いバタバタしていたからだ。

根津としてはこの間に頭が冷えてくれれば、と思っていたのだが、どうやら無駄だったらしい。

彼の頭が固いのは良く知っている。

後継者問題が起こった際、ミリオではなく緑谷出久に継がせたこと、重傷を負ってなお戦い続けナイトアイと袂を分けたことから明らかだ。

だが、言えることは言おうと口を開く。

「君でなくてもいいだろう。今のヒーローはそんなに頼りないかい？」

「ヒーローが頼りないのではなく、敵が強大すぎるのです。あれは、ヒーローが束になっても敵わないものだ。……いや、ヒーローでは倒せない『モノ』なのかもしれません」

「……そうだね」

この三日間で出た被害は甚大だ。

公開処刑の一件だけでエンデヴァー、イレイザーが“個性”喪失。

彼らを含めたヒーロー複数名に負傷者が出た。永遠のコピーが放った空気塊は一般人、及びその周囲を狙うことはなく、威力も相応に削減したものではあったが、競技場の崩壊と発生した混乱によって人々にも負傷者が出た。

更に、国内の全刑務所にて「収容中の全敵」が「個性を喪失」した上に「小学校低学年程度まで肉体年齢を退行」させられるという事件が発生。

一般人からの「個性」喪失報告も数百件に上っている。

八百万永遠、あるいはその一派と見られる者を発見、交戦したヒーローからも負傷者、および個性喪失者が新たに出た。

あれは、未曾有の凶悪敵だ。

少なくともそれだけは間違いない。

「勝てる見込みはあるのかい？」

「勝てるかどうかではありません。勝たねばならない。討たねばならない。世界の全てがかかっているのです。……それに、元々あれは我々が打倒するべき力だ」

オール・フオー・ワン  
A F O。

敵名と同一であったその「個性」は元の持ち主の手を離れ、八百万永遠の下にある。だが、持ち主が誰であるかに関係なく、かの「個性」が悪用されるならそれを阻止するのがO F A継承者の務めである。

緑谷出久に継承した今でも、オールマイトは使命を忘れていない。

だが。

「敢えて言おう。オールマイト。止めるんだ。君では勝てない。君は、永遠君に一矢報いることもできずに無駄死にする」

「予言ですか？」

「予知ではないけどね。ネズミが考えてもわかる理屈さ」

オール・フオー・ワンはオールマイトが死力を尽くしてようやく勝てる相手だった。否、死後に『寄生』という奥の手を残していたことを考えれば実質オールマイトの負けだったかもしれない。

神野事件の際、オールマイトに本物のO F Aがあつたとしても、あ

の悪を征することは困難だった。

そして、八百万永遠はそのオール・フォー・ワンを殺した。

『寄生』事件を解決した時点で、彼女は前任者を超えている。そのうえ、今も強くなり続けている。

それどころか、彼女の手にはOFAさえ存在している。

今のオールマイトにもOFAの30%程度のパワーはある。

緑谷少年が同程度のパワーで敵と渡り合っていたことを考えれば、無個性でも並のヒーローよりも強いことになるが——だからどうした。

「断言する。今の君じゃトガヒミコにも勝てない。だから止めろ」

「嫌だと言ったら?」

「どうもしないさ。ああ、どうもしない。……こうなってしまった時点で我々は詰んでいるのさ。だから、極端な話をすればどうでもいい」

「……………」

オールマイトはしばし沈黙した後、低い声で尋ねてきた。

「校長。あなたはまるで、ヒーローが負けてもいい、と思っているようだ」

「思っているよ?」

根津は悪びれもせずに答えた。

「愚かでどうしようもない人類なんか滅びればいいのさ。私は何度進言したかわからない。忠告したかわからない。それでも、彼らは何も学ばなかった! 考えを改めなかった! その結果がこれじゃないか!」

根津は人間ではない。ネズミだ。

本質的に孤独であり、人外の間を今でも有している。『天才』であるので猶更だ。

冷静で冷淡な先見性から彼は政府、警察、公安の不備・不足・不手際を何度も指摘してきた。永遠の処分を思い留まるように何度も訴えたし、締め付けるぐらいなら甘く飼い殺すべきだ、とまで言った。それでも変わらなかった!

裏にオール・フォー・ワン信者がいることはわかっている。だが、彼らはまだいい。信念を持って世の中を「悪くしよう」としているのだ。筋が通っているからこそ悪人でも理解できる。むしろ理解できないのは安易な考えしか持っていない、自分が賢いと勘違いしている「善人のつもり」の権力者達」だ。

「世界中のヒーローが協力すれば、あるいは科学の力を総動員すれば永遠君は滅ぼせるかもしれない。だが、いずれにせよこの世界は終わりさ。明るい未来なんて来やしない。人は、怒らせてはいけない神を激怒させたんだから」

「……彼女は、神などではありません」

「神が自分達に似せて作ったのが人なら、神性に近い不死性を得た彼女は、もはや神も同じじゃないかな？」

オールマイトは首を振った。

平行線。意見は交わらないことを確認したのだろう。

根津も「話しても無駄だ」と悟った。

「今までお世話になりました。私は、最後まで私の志を全うします」  
「そうか。今までありがとう。せめて少しでも長生きしてくれよ」

頭を下げるオールマイトに、根津もまた友人として頭を下げた。

約十日後。

オールマイトは死体で発見された。

永遠達ではない。平和の象徴を恨む敵に殺されたのが原因だった。

#### 4. 奪われたもの

【反乱から一週間後】

普段と違う格好だと意外に見咎められないものだ。益体もないことを考えつつ、タクシーの運転手に金を払って車を降りる。空を見上げると生憎、月には雲がかかっていた。

入口からホテルへ入り、特に不審がられることもなくエレベーターに乗る。

普段の格好なら見咎められていたかもしれないが……。

高くもなく低くもない微妙な階で降りて、あらかじめ指定された部屋のドアをノックする。

数秒の間を置いて、ロックの解除される音がした。

中に入ってロックをかける。

エンデヴァーはラフな和服を着て椅子に腰かけ、湯飲みを傾けていた。

「酒ですか？」

「馬鹿を言うな。茶だ」

見れば急須と茶筒がテーブルの上に置かれている。

茶請けは煎餅と羊羹。

(わざわざ持ってきたのか……?)

この人も良くわからないと思いつつ対面に腰掛け、土産を取り出す。

「なら、別の品の方が良かったですかね」

「酒か」

瓶に貼られたラベルには『月兎』とある。

「人類が初めて月に行ったのに感動して作り始めた酒だそうです。洒落てるでしょう？ あとつまみもあります」

「スルメか。良い酒に合わせるには少々安っぽいが……」

「噛むだけ味が出ますから。合理的じゃないですか」

「お前の判断基準は良くわからないな、イレイザー」

言って溜息をつきつつ、立ち上がった『元・No. 1ヒーロー』は

部屋に据え付けのグラスを二つ取り出した。

「折角だ。貰おう。酔い過ぎない程度に、だが」

「それは良かった」

イレイザー・ヘッド——相澤は笑って、スルメのパッケージを開けた。

「どうだ、身体は」

「ようやく本調子つてところですね。……まあ、俺はもともと身体強化はしてませんし」

相澤も初めて飲んだが、酒の味はなかなか良かった。

エンデヴァーも一口飲んで頷いて「女や若者にも好まれそうな味だな」と呟いていた。

「ご家族は？」

「冷——妻は実家に帰した。子供達にはマンションとアパートを与えた。俺があの家を使っている限り、そちらまで騒がせられることはなかろう」

「……非合理的ですね」

「……人の心は合理性だけで量れるものではない」  
マスコミ。

「個性」を失い、実質的にヒーローではなくなったエンデヴァーは連日テレビや雑誌から追いかけられている。毅然とした態度を貫いてはいるが、巻き込まれた家族は堪ったものではないだろう。そういう意味で、迅速に手を打ったエンデヴァーは賢いといえる。

自分だけは元の家に住み続ける決意も含め、見上げたものだ。

そのエンデヴァーがぐいっとグラスを傾けてから、言ってくる。

「<sup>そちら</sup>雄英こそ大変だろう」

「言うほどではないです。ヒーロー科はもちろん、他の科の生徒だってヒーローに関わりたくて入った奴らだ。事情は理解しているし、気持ちも汲んでくれる」

「教師は続けられそうか」



「ええ」

校長である根津からはこう言われた。

『ヒーロー学校の教師が全員「個性」持ちである必要はないさ。むしろ、ヒーローである必要さえないと思っっている。一般科目も教えるわけだし、相澤君の経験と技術が失われたわけじゃないだろう?』

有難い話だ。

「離反した生徒は?」

「……そちらにも連絡が行っているでしょうが、退学扱いです。八百万姉妹については『家』からも勘当された、と」

「妥当な判断だな」

確かに妥当ではある。

だが、だからといって、家族や関係者が納得しているとは限らない。ヒーローではなく父親としてのエンデヴァーにしたところで、轟焦凍の失踪をどう考えているか。

——少なくとも、世論は厳しい。

処刑場で大暴れをした八百万永遠。

永遠を助けようとした者達。

世論は彼らに「裏切り者」というレッテルを貼っている。一度体制側に在ったからこそ攻撃は苛烈であり、単なる敵<sup>ライバル</sup>、犯罪者という扱いから一歩進んで「国民ではない」「人ではない」レベルの扱われ方さえ散見される。

攻撃は「処刑に異を唱えながら」「永遠の反逆に賛同しなかった」者にも向けられている。

筆頭はミルコ。

ヒーローの身でありながら永遠の処刑を止めようとした彼女は資格剥奪の上、事実上の軟禁状態にある。それでも世間は「スパイではないか」との声を止めない。

彼女が永遠から貸与されていた二つの個性も再度奪われており、ミルコ自身はもう「身体能力が高いだけの一般人」に落ちているのだが。そして、バッシングはヒーローにも向けられている。

論調としては「敵に屈した」「無能」「役立たず」「怪我してる場合か」

「負けるだけならまだしも『個性』奪われるとか馬鹿なの？」といった具合である。

当然、槍玉に挙げられているのは相澤とエンデヴァーだ。

反逆者達に深く関わる立場だったこともあり、適当にネット検索するだけで見るに堪えない罵詈雑言を確認できる。合理的でないので一々網羅したりはしていないし、まともに気に病む気など毛頭ないが、

「……やるせないですよね」

「……お前が弱音を吐くとは珍しいな」

「俺は元々、弱い人間ですよ」

「白雲臍か」

そう。

学生時代の相澤は白雲に引つ張られていた。

彼の明るさと正義感にどれだけ助けられたかわからない。その白雲が、せっかくもう一度ヒーローを目指せる立場になったというのに、あろうことか自主的に敵へと堕ちてしまった。

——俺は間違っているのか、白雲？

自問してしまっても仕方ない。

もちろん、相澤の立場では自由に動けない。自由な学生の頃とは違う。彼とただ体制側に在るつもりはないが、衝動的な行動で生徒達を危険に晒すことはできない。

彼は、教師なのだから。

「俺は戦うぞ、イレイザー」

「……エンデヴァーさん」

「俺のヒーロー資格は剥奪されていない。お前やミッドナイトを含め、個性の効かない敵を技術と肉体だけで打ち破ってきたヒーローは幾らでもいる。俺とて、肉体の鍛錬を怠ってきたつもりはない」

相澤はしばらく沈黙した後で「死にますよ」と言った。

ヒーローコスチュームを脱いでなお威厳溢れる堅物は、口元に小さな笑みを浮かべて答えた。

「死なんさ。ヒーローとは希望だからな」

「そう、ですね」

相澤は『月兎』をなみなみとグラスに注ぐと、それをぐいっと飲み干した。

「俺は教師を続けます。教師は指導者です。個性が無くとも教えられることはある」

「その意気だ」

無骨な手がスルメを大きく引きちぎる。

「オールナイトが復活した程度でN.O.1の座を返上するつもりはない。俺はまだまだ——」

「や、スルメ取りすぎですよエンデヴァーさん」

「……………」

その晩、二人は盛大に飲みすぎた。



【反乱から二週間後】

『本日未明 ○○区××町の路地裏にてオールナイトこと八木俊典さんが遺体で発見されました。遺体は損傷が激しく、警察では彼に恨みを持つ敵の犯行とみて捜査を——』

寮の食堂。

共用のテレビがそのニュースを流した瞬間、出久は手にしていたコップを取り落とした。

乱暴な生徒対策で落としても割れない素材が使用されていたため、大きな音を立てることはなかったが——床に落ちて中身をこぼしたコップは一つではなかった。

複数。

喧騒に包まれていた食堂が一瞬にして静寂に包まれたことから、衝撃の大きさがわかる。

最初は半信半疑。

何かの間違い、あるいは聞き違いだろうと誰もがテレビに注目し、間違いでなくてもないと分かった途端、

「つぎけんなっ!!」

爆発がテーブルごと、上に載っていた食器や料理を薙ぎ倒した。

「オールマイトが死んだ!?　ンなことあるわけねえだろうが!?　オールマイトは、オールマイトは最強なんだ!　あんなクソガキごときに負けるわけねえだろうがっ!?」

「落ち着け爆豪!」

「そうだ!　軽拳妄動は慎むべき——」

「うるせえ!　てめえら何落ち着いてやがんだ、オールマイトが、死んだんだぞ?!」

爆豪の暴走ももつともだ、と、出久は思った。

『超カッコイイなああ!!』

『僕も“個性”出たらこんな風になりたいなああ!!』

彼らが子供の頃にはもう、オールマイトはヒーローだった。

誰もが彼に憧れた。

『もう大丈夫だ少年!!　私が来た!』

『君はヒーローになれる』

誰にとつてもオールマイトは特別だった。

出久だけじゃない。

爆豪だつてオールマイトを目指していたし、兄を目指す飯田や紅クリムゾン、頼雄斗ライオット推しの切島だつて二番目三番目にはオールマイトを挙げるだろう。

特に、今の雄英生達は直接彼の指導を受けているのだ。

だから。

オールマイトの死は、世界の終わりも同然だった。

——ヒーローも死ぬ。

理解していたつもりだった事実を厳然と突き付けられる。

身体から力が抜ける。

椅子からずり落ちるようにして倒れこむ出久の耳に、お茶子の悲鳴がかろうじて届いた。

天涯孤独であるオールマイトの葬儀は英雄主導で執り行われた。黒い服を着た人々の群れ。

形式的な喪主を任されたサー・ナイトアイは挨拶の冒頭から滂沱の涙を流し、言葉を発することさえままならず、結局英雄校長・根津が代行した。

体育祭で使用されるスタジアムの一つを埋め尽くすような数の人々が『最高のヒーロー』の冥福を祈り、一昼夜かけて花を手向けた。出久もまたそんな人々の中にいた。

現役の生徒達は関係者として扱われ、早い順番で花を手向けることができた。

半ばお茶子に引つ張られるようにして自分の番を終えた出久は涙を流すこともできないまま人混みに紛れ、そのまま立ち尽くした。

「……あの野郎。俺より先に逝きやがって」

「……グラントリノ」

いつの間にか隣にはオールマイトと出久、両者にとっての師である老人がいた。

淡々と呟く彼を見て、衝動的な怒りが湧き上がる。

「悲しくないんですか。オールマイトが死んだんですよ」

「んなもんとづくに通り越してるんだよ、俺は。いや、俺らは。ヒーローが無茶して死ぬ。敵に殺されて死ぬ。何の不思議がある？」

グラントリノは怒りもせず答えた。

強烈な正論。

同時に、達観した大人の理論であるその答えに、出久は唇を噛むしかなかった。

「僕は」

「……………」

「僕は、何もできなかつた」

あつさりワン・フォー・オールとO F Aを奪われ、『残り火』の全力をあつかりと打ち砕かれ、拳敵から情けまでかけられた。

オールマイトが再度戦う決意をする中、ただ学校生活を送っていた。

「個性」を失ったショックを受け止めるのに精いっぱいというフリをして、最前線に立つことを避けていた。

「あいつからは何か言われたか？」

『君は悪くない』『無理はするな』『私に任せろ』って」

「そうか。あいつらしいな」

グラントリノはそれ以上何も言わなかった。

けれど、出久は雄英を辞めるというオールマイトと最後に話した時のことを思い出し、何か言わずにはいられなかった。

「グラントリノは、どう思いますか？」

「……………」

「僕が、僕が悪いんですよね？ 僕が弱かったから。僕が何もできなかったから。だから、だからオールマイトは——」

「小僧。お前、俺になんて言っただけじゃないんだ？」

「っ」

息が、詰まった。

思ってもいなかった言葉に思考が停止する。

「僕は、ただ答えを……………」

「そんなもんはどこにも無い」

「——」

「お前が自分で考えて導き出すしかねえ。それができないなら何もするな。邪魔だ。…………ただ、そうだな。俺の見解を敢えて言うんなら」

グラントリノは出久の方を見ずに言った。

「別の奴が——身体が出来上がってて、自分の「個性」も持つてるよ。うな奴が継いでいけば、俊典はもつと楽ができただろうな」

例えばビッグ3。

ミリオならOFAを奪われても『透過』で戦い続けられたかもしれない。天喰ならもつと常に周囲を警戒し、不意打ちなど受けなかったかもしれない。

ねじれなら永遠の戦友として共に立ち、彼女の孤立を防げたかもしれない。

「……あ、あああ」

やっぱり。

求めていたはずの言葉を与えられた出久は瞳から溢れる涙が止まらなくなつた。

オールマイトの死を知らされてから葬儀まで何度も泣いた。泣きすぎて枯れてしまったと思つていたのに、まだまだ涙は溢れてきた。気づいたらグラントリノと別れて人気のない場所にいた。

どこだ、ここ。

雄英の敷地ではある。見覚えがないわけでもないのに、冷静になれずすぐに戻れるだろうが、今の出久は思考も感情も碌に働いていなかった。

だから。

隣にサングラスの有翼ヒーローが舞い降りても特に何も思わなかった。

「緑谷出久君。君にちよつとしたお誘いがあるっス」

「……なんですか？ 僕なんか」

ホークスは少しだけ苦笑し、「これは極秘なんすけど」と前置きしてから言った。

「人為的にヒーローを作る実験が始まっています。参加してみる気はないっスか？」

それは、天からの福音に他ならなかった。

ただし、天が常に正しいとは限らないのだが。

## 5. 悪の組織の女子会

【反乱から三週間後】

『ワープゲート』で玄関に帰還した私はふう、と息を吐いた。

外を振り返って、特に騒がしくもなければ人の気配もないことを確認して頷く。まあ、ここ、マンションの最上階だったりするので、そうそう煩くても困るんだけど。

さて。

「ただい——」

「永遠ちやーン!!」

「わ」

声を上げ終わる前に透ちやんとトガちやんに抱き着くように出迎えられた。

ほとんど音もなく帰って来たはずなんだけど!?

「永遠ちやん永遠ちやん。今日のノルマは終わったんですか?」

「うん、終わったよ」

トガちやんは髪を下ろして薄く化粧をし、黒いワンピースに白のエプロンを着ている。頭にはフリル付きのカチューシャ。要するにメイドさんの格好だ。どうしてそんな格好なのかというと「趣味」だということだけど、可愛いからいいかなと思う。

「じゃあのんびりしようよ。悪の組織にもリフレッシュの時間は必要だよ!」

透ちやんは着物をベースにした動きやすい和服。女中さんの格好って言えばいいだろうか。これはトガちやんに対抗した結果らしい。ちなみに顔の部分には能面を付けているので、その、こわかわいい。

「ん。そうだね。そうしよっか」

ここは、私率いる悪の組織が構えた暫定の本拠地。

どうやって用意したのかといえど、どうということではなく、透ちやんの実家——葉隠の本家を頼ったのだ。



私とお姉ちゃんがあつさり勘当されたのに対し、葉隠家は透ちゃんを一族から追放しなかった。

『葉隠透を一族失格と見做すつもりはない。さりとしてかの一党を支持する気もない。我らは我らのやり方を貫くのみ』

それが葉隠家当主が表明した見解だった。

表向きは権力者でもなんでもない古いだけの家だというのも、こういう態度を取ることができた理由。

八百万家はバリバリの名家なので、不始末をしでかした私と百ちゃんを切り捨てなければ家自体が終わりかねない。でも葉隠家なら「いやいや個人の問題でしょ？　なんで家全体でどうこうしないといけないのよ？」で片づけられる。

また、葉隠家の裏の顔を知っている者からすれば、これは当然の見解だった。

主に仕える忍者の家系。ただし、家全体で一つの主に仕えるのではなく個人で主を選ぶ。だから、透ちゃんが主である私に仕えている限り、一族としては失格どころか「いいぞもつとやれ」という態度を取る。

葉隠家にとっては私が有名ヒーローでも世紀の大犯罪者でも構わない。わざわざ仕えるに足る、大きいことをやる人物であることには変わりないからだ。

というわけで。

「葉隠家には本当に感謝しています。こんないい隠れ家を用意していただけて」

「「とんでもございません」」

この部屋の管理をしている姉妹は声を揃えて答えた。

若い女性で、一応は葉隠の傍系にあたるらしい。透ちゃんと違って『透明』じゃないし忍者修業もしてないものの、家事全般＋α、つまり「人に奉仕する訓練」を受けてきた人達らしく、その立ち居振る舞いは完璧だった。

料理も美味しいし、年下の私にさえ礼を尽くしてくれる。

帰宅の挨拶と一緒に二人へお礼を言った後、私とトガちゃん、透ちゃんは移動を続けた。

この最上階の部屋はワンフロアまるごとを使用する豪華な造りで、いわばオーナールームのような場所らしい。つまりあの姉妹は若くしてマンションの管理人なのだ。羨ましい。って、それはともかく。表向きは葉隠家と関係ない物件なので足がつく心配もほぼない。

至れり尽くせり。これで私達を支援する気がないって無理があるんじゃない？ って話だけど、そこはそれ、葉隠家的には透ちゃんのを要請で彼女に便宜を図ったのであって、私を匿う意図とかはない、という理屈である。

方向性がアレではあるものの、私は今、世界に最も影響を与えている人物であり、うまいこと取り入った透ちゃんはヒーロー志望だった頃よりずっと優等生扱いを受けているのだ。

「みんなは？」

「適当にごろごろしたり、バタバタしたりしてると思いますよ？」

トガちゃんの言った通りだった。

轟君は防音防水防火、その他考えられる耐久力向上処理を施された簡易訓練場で特訓の真つ最中。白雲君が組み手に付き合っていた。

一緒におやつでも食べない？ と誘ったら「俺はいい」「女子だけで楽しんでください」とのこと。代わりに怪我の治療を求められた。まあそれくらいならお安い御用なのでぱつと実行。

私が患部に手を当てるとみるみるうちに怪我が治る。『巻き戻し』じゃなくて治療用の『個性』を使ってるので、特訓した成果まで消えてなくなることはない。

「それは何の個性だ、永遠？」

『効果転送』＋『自己修復』。っていうか、轟君に名前前で呼ばれるのまだ慣れないなあ」

「八百万じゃないんだから仕方ないだろ。それに、百の妹なら俺にとっても妹みたいなものだ」

へー、ほー、ふーん？

轟君つてば、自由な時間が増えたのと、家を飛び出したつり橋効果でお姉ちゃんと更に仲良くなってるみたい。考えてみると結婚可能年齢も近い。

轟君がお義兄ちゃんかあ、変な感じ。

「どうか所長。服着ないっスか？」

「へ？ ……あ」

白雲君に言われて下を見ると、私は全裸のままだった。

…いや、違うんだつてば。

外で活動してる時つて見つかつちやいけないわけじゃない？ だから透ちゃんからコピーした（正確には透ちゃんのコピーから奪った）『透明』を使つてるんだけど、そうすると全裸にならないといけないのだ。

で、毎日全裸もとい『透明』で外を歩いてるうちにだんだん慣れてきて、服を着てるか着てないかわからなくなつてきて、

「つていうか二人とも教えてよ」

「永遠ちゃんは裸族だからそれが普通なのかと思つて！」

「透ちゃんにだけは言われたくない」

「なにおう!？」

とりあえずトガちゃんのエプロンをもらつて羽織つた。

センスライさん——もとい扇頼子さんは、呼び寄せた旦那さんと宮下さんの三人で情報収集やら何やらにあたつていた。

下手にハッキングしたりとかは危険だからできないけど、逆に言えばネットでエゴサーチするくらいなら全然問題ない。なにせ日本中が私の動向に注目してるので、検索してる人なんて腐るほどいるのだ。

それに三人ともラブラバからセキュリティ関係のレクチャーを受けたりしてたから、専門外にしてはそこそこその辺に詳しい。

「あ、永遠ちゃん。どうしたの？」

「あ、はい。ちょっと休憩でもしませんか？」

「あー、私達はいいわ」

目隠れ美女改め目隠れ美少女は傍らに置いた『飲み物』に視線を向けて笑った。

「今も遊んでるようなものだし」

「ははは、事務所で仕事に追われていた頃に比べれば、この状態が息抜きですね」

「なるほど」

頼子さんと旦那さんが飲んでるのは透明の液体。液体を収めているのは保冷機能のあるタンブラーで、中には氷がいっぱい。

柿ピーが一緒にあることを考えても日本酒か焼酎で確定。

なお、旦那さんも頼子さんと同じ年代に『巻き戻し』済み。若い頃に戻ったせいで気持ちまで若返って夫婦仲も良くなったとか。

「頼子さん。その格好で飲みに行ったら捕まりますから気を付けてくださいね」

「……しまった。盲点だったわ。ねえ永遠ちゃん、二年くらい老けさせてくれない？」

「無理です」

「じゃあ、しばらく居酒屋はおあずけなのね……」

ぐぬぬ、とか言ってる頼子さんを置いて部屋を出た。

お姉ちゃんはラフな格好で山盛りの唐揚げを食べながら便利アイテムの創造をしていた。

「……………」

「……………」

「……………」

そっ閉じ。

「と、永遠!?! 皆さん!?!」

ドアを閉め、見なかったことにしようとしてアイコンタクトをしてその場を離れようとしたら、お姉ちゃんが慌てて部屋から飛び出してき

た。

「べ、別にやましいことをしていたわけじゃありませんわ！ ただ、物資の確保と“個性”の訓練をエネルギー補給と並行していただけで——」

「うん、大丈夫、わかってるから」

「女の子がしちやいけな性格だったとか思っただけよ！」

「絶対思ってるじゃありませんか！」

ちなみにトガちゃんはお腹を抱えて笑っていた。

たぶんトガちゃんが一番酷いと思う。

お姉ちゃんはこほん、と咳ばらいをして、

「そ、それで。どうしたんですの？」

「うん。お菓子でも食べながらのんびりしないかなー、って」

「でも唐揚げ食べてる時に甘いものとかいらなそうですよね」

「是非ご一緒させていただきます。ですから唐揚げのことはお忘れいただければ——」

むしろ私は唐揚げが食べたくなかったので、唐揚げ&お菓子による女子会、というカオスな催しが開催されることになった。

「まあ、私達は食べもの控えめにしておこうね、トガちゃん！」

「そうですね。晩御飯に響きます」

「ツツコミませんわ。ツツコミませんからね？」

私は食いだめできる体質、お姉ちゃんは“個性”に脂質が必要なので必然的に大食らい。なんだけど、変人みたいに言われると若干胸が痛い。

お菓子の方は市販のチョコやクッキーといったものから、透ちゃんおススメのお店の羊羹まで。

唐揚げと甘いお菓子を交互に行けば無限に食べられるのでは、と呟いたら、頷いてくれたのはお姉ちゃんだけだった。おかしい。

「……あー、幸せ」

絨毯の敷かれた床に直接ぺたんと座って言う私。

あ、ちなみにお姉ちゃんにマントを作ってもらってエプロンの上から羽織りました。

「好きな物を好きなだけ食べられるとか天国だよねえ」

「永遠ちゃんはカロリーとか考えなくていいですからねえ」

「本当！　ってトガちゃんもじゃん！　裏切り者！」

「透さんは多少太っても全裸でいれば問題ないのでは？」

「百ちゃんひどっ!?　それは女の子に言っつていい台詞じゃないよ!？」

同年代の女子しかいないせいで無礼講だ。

ここに男子の身で交じるのは——うん、確かに嫌かもしれない。

「ですが、ある意味本当に夢のような時間ですわ」

お姉ちゃんがしみじみと言う。

「永遠さんと。みなさんと。こうやって気兼ねなく笑いあえるのですから」

「……そうだね」

忙しかった頃は考えられない話だ。

いや、今も忙しいんだけど。

お仕事とか修業とか、自分を取り巻いていたしがらみからいったん解放されたお陰でいろいろすつきりしてしまった。

お陰でご飯が美味しい。

「そういえば聞きたかったんですけど」

クッキーをさくさく齧りつつトガちゃん。

「透ちゃんって永遠ちゃんのこと好きなんですか？」

「ぶっ」

「好きだけど？」

「くはっ」

トガちゃんの質問でお姉ちゃんがジューズを吹き出しかけ、透ちゃんの返答で更にせきこむ。

でも当人達はいったって真面目で、

「永遠ちゃんと結婚するんです？」

「あはは。別にそういうのじゃないよ！」

「……あー」

うん、そうだよね、良かった。

何を言いだすのかと思ったら割と普通の話題だった。

お姉ちゃんの背中をさすりながら話を聞く。

「私は永遠ちゃんのこと好きだよ。好きだし、尊敬もしてる。じゃなかったら『契約』なんかしないよ」

私と透ちゃんの関係についてはこの二人には話してある。

いつかバレることだし、私達はもう一蓮托生だからだ。

「でも、永遠ちゃんのせいでヒーロー諦めたわけですよね？」

「まあね。でも、いいんだよ」

私も、透ちゃんのそのあたりの思いはちゃんと聞いたことがなかった。

「私はヒーローが好き。ヒーローになりたかった。でも、それってたぶん、光に当たる世界への憧れだったんだよね」

「家系への反発ってことですか？」

「そう。陽の当たる場所でみんなに褒められたかった。たぶん、最初はそんな感じだったと思うんだ。でも、だんだん変わっていったってどうか」

頬をぼりぼりと掻く透ちゃん。

普段明るくしてる子だから、照れくさいのかも。

「ヒーローも、葉隠の使命も『人を生かすこと』には変わりないのになって。褒められたいだけなら、ご主人様がいっぱい、何人分も褒めてくれるんじゃないかって」

「……仕える者の苦労なんて顧みない主人もいそうですね」

「永遠ちゃんだからね！」

あれ、今度は私が恥ずかしい。

「うん。だからね、あらためて考えたんだ。ヒーローになって何がしたいのか。ヒーローじゃないとできないことなのかって」

「それで？」

「私ってさ、たぶん不器用なんだよね！」

立ち上がった透ちゃんが私に抱き着いてくる。

柔らかな感触の仲、彼女がドキドキしているのが伝わってきた。

「不器用、ですか」

「そ！ 大きいこと考えようとしても漠然としか出てこないっていうの？ みんなから褒められたいって思っても、それって結局、学校の友達だったり先生だったり、お父さんお母さんだったりするんだよ。だったらそれ、みんなっていうほどみんなじゃないでしょ？」

「そんなことないと思うけど……」

「ありがとうー」  
なでなでされる。

実はお酒飲んでるんじゃないかっていうくらい透ちゃんが楽しそうだ。

「だからね、私が助けるのは身近な人でいいと思ったの。助けたその人が大きなことをして、みんなを助けてくれたら、私が直接助けるのと結果は変わらないじゃない？」

「私、みんなを助けられるかわからないよ？」

「大丈夫、永遠ちゃんならー！」

私をぎゅーつとしながら、透ちゃんは言い切った。

「きつと世界は良くなるよ！ 普通にやっても変わらないなら強引に変えちゃおう！ 邪魔する奴は全部ぶっ飛ばせばいいんだよ！」

「……ん」

それはあまりにも子供っぽくて身勝手な理屈だったけど、

「わかりやすくもいいね、それ」

「でしょー？」

今の私にはちょうどいい、正義を目指す悪役の理屈だった。



## 6. お茶子の決意

【反乱から三週間後】

「デクくん。やっぱり、考え直さへん……？」

夜の静寂に包まれた並木道。

麗日お茶子はクラスメイトであり、恋人であり、尊敬する相手でもある少年を見つめて、何度目かの問いかけを投げた。

向かい合った出久は硬い表情のまま、いつもの答えを返してくる。

「もう決めたんだ。それに、今更キャンセルはできない。明日にはホークスが迎えに来るんだ」

「でも……」

「わかって欲しいとは言わない。でも、これ以上、僕を止めないで欲しい」

鋭い眼光がお茶子を射抜く。

今の出久はまるで抜き身の刃のようで、お茶子は見られただけでぶるつと震えてしまう。敵相手であれば怯むことなどないのだが、この恐怖はそういうのとは違う。

だが。

止めなければ彼が遠くに行ってしまうと、勇気を再び振り絞る。

「別に、無理しなくたっていいやん。『無個性』だったらプロ試験受けられないわけやないんやし」

ぎゅつ、と、胸の前で握った拳は決意の表れ。

精いっぱいのお茶子の笑みを浮かべて、明るい声を出して、

「このままみんなと勉強して、一緒に試験受ければ——」

「次の試験、本当に開催されると思うかい？」

「っ」

言葉が止まった。

出久が右手を振り上げ、近くの木に叩きつける。だん、と、大きな音がして幹が揺れ、葉がざわざわと音を立てる。

怒っている。

緑谷出久は、麗日お茶子に明確な怒りを覚えていた。

「開催されたって無駄だよ」

少年が首を振る。

「『無個性』の僕じゃ合格しない。単純に実力不足だ。敵と戦ってもやられるだけの人間をヒーローになんかするわけがない」

「そんなこと、デクくんは頑張ってるやん！ だから——」

「頑張るだけで結果が出るのかよ！」

怒声が空気を震わせた。

「僕は君にさえ勝てないんだぞ！？」

「え——」

「USJの時も、合宿を襲撃された時も、僕は敵に後れを取ってるとは思わなかった！ でも！ オールマイトは死んだ！ あの時の僕よりずっと強いのに！ 敵に殺されて死んだんだ！」

「デク、くん？」

駄目だ。

怖い。

麗日お茶子は、向かい合っている『デクだった誰か』が怖くて仕方なかった。

出久は、心底鬱陶しそうに息を吐くと、踵を返して言った。

「話は終わりだ。僕は、もう一度『個性』を得てヒーローになる。そして永遠さんと戦う」

「っ」

永遠。

友人でクラスメイトだった少女の名前に、導かれるように叫んだ。

「永遠ちゃんがオールマイトを殺すわけないやん！ あれは別の敵が

——」

「だからどうした！」

「!？」

「敵は敵だ。永遠さんは——オール・フォー・ワンの後継者は、必ず僕が討つ。必ず僕が、殺す」

歩み去っていく少年の背中を、お茶子は呆然と見送った。

あの日以来、何もかもが変わってしまった。

出久が、エンデヴァーが、イレイザーが“個性”を失い、永遠は最強最悪の敵となって今なお暗躍を続けている。

“個性”喪失者は初日の時点で数百人。

以後、一日の喪失者数はおよそ五十人ずつ増え続け、今では千人を軽く超えている。被害総数は二万以上。

『本日の個性喪失被害者数は……』

などというニュースが日常となりつつある。

永遠は『透明』状態かつ『ワープゲート』で移動しながら略奪を続けているらしく、いっどこで誰が狙われるかはわからない。

“個性”喪失者の急増によって社会・経済は混乱、精神を病む人まですべて出ているという。

そんな中、政府関係の研究機関から出久に対してとある申し出があった。

——人為的な“個性”開発への協力要請。

要は科学による肉体強化と個性付与を行い、ヒーローに足る能力を人の手によって与える計画。

政府の承認を得た研究のため雄英側、出久当人へのアフターケアもしっかりと行われるらしく、理屈の上では悪い話ではないのだが。

『俺は反対だ』

担任であるイレイザー——相澤はきつぱりと告げた。

『目的とタイミングが胡散臭すぎる。こんなもん、お前を体よく利用して良くないことを考えてるに決まってるんだろ』

お茶子も同意見だった。

理屈ではない部分、勘に近い何か「これは危険だ」と告げている。美味しい話には裏がある、という両親からの教えから考えても受けるべきではない。

しかし、出久は強硬に「受ける」と主張した。

何しろ正式な要請だ。本人が合意してしまえば学校側は了承するしかない。出久は雄英に籍を残したまま研究へ参加、その間の出席日

数もカウントされる、ということになった。

そして明日、出久は出発する。

『なんとかなりませんか？ デクくんを説得するとか——』  
相澤に直接訴えたこともあったが、返答は芳しくなかった。

『もう何回も話した。が、あいつの答えは変わらねえ。お前の言葉も聞き入れねえんだろ？ なら、お手上げだ』

除籍したところで意味はないだろう。

学校を通しての要請が個人への要請に変わるだけ。むしろ出久をより捨て身にさせるだけだ。

『お母さんには——』

『もちろん話は言ってるが、あいつが頑なに『行く』と言っているらしい。あそこまで頑固な息子は見たことがないそうだ』

『それじゃあ……』

打つ手がない。

それでも、嫌な予感が止められないお茶子は何度も出久に訴えた。訴えて、彼の心を変えられなまま、時間だけが過ぎていった。

「デクくん……」

暗い自室で膝を抱え、お茶子は呟いた。

——こんな時、永遠ならどうするだろう。

小さくて食いしん坊で、どこか抜けている友人。

いざという時の行動力は人一倍な彼女なら、殴つてでも出久を止められるかもしれない。言って聞かないんだから殴るしかないよね、と。

だが、『個性』喪失がコンプレックスになって今この彼にそれをやって意味があるだろうか。

「私は、どうしたらいいんやろ」

お茶子には、永遠を憎む気持ちはない。

あの少女が無暗な殺戮を好むとはどうしても思えないからだ。実際、反乱後、永遠に直接殺された人間はいない。彼女の作り出した混乱が原因で死んだ人はいるが——。

今、起きている騒動にしても、多くの人から「個性」だけを抜き出すもの。

ヒーローへの被害も、ヒーロー側から襲い掛かった事例以外では出していない。むしろ意図的にヒーローを避けているようにも思える。一方、ここ最近、指名手配中だった敵が「個性」剥奪の上、気絶した状態で何名も発見されている。

だから、出久と永遠に戦って欲しいとは思わない。

言葉は通じない。

でも、今の出久を一人にするのは心配だ。

なら、せめて――。

「うん」

お茶子は一人、心を決めた。

そうと決まれば時間がない。

少女は夜のうちに準備を済ませ、相澤に連絡を取った。

「麗日ちゃん。緑谷ちゃん行っちゃうわよ」

午前八時。

お茶子の部屋のドアを叩いたのは、蛙吹梅雨だった。

可愛い外見に似合わずシニカルなところのある彼女は、デクの説得を早々に諦め、彼を見放していた。一方、お茶子のことはさりげなく気にかけてくれている。

「ありがとう、梅雨ちゃん」

遅くまで色々やっていたせいで寝坊しかけたお茶子だったが、なんとか間に合った。

ドアを開けて微笑むと、梅雨は表情を強張らせた。

「……その格好。もしかして」

「うん」

皆まで言わず頷き、荷物を背負って廊下に出る。

梅雨は黙ってついてきた。

出久とホークス、それから1―A生の多くがロビーに集まってお

り、その中の一人——芦戸がいち早く気づいて「あ！」と声を上げる。  
「お茶子」

「麗日……?」

振り向いたクラスメート達もまた、お茶子の格好を見て驚く。

それはそうだろう。

今日は平日。出久を送り出したらすぐ登校しないといけないのに、私服姿で大荷物を背負っているのだから。

お茶子は笑顔のまま説明を省略すると、人だかりを抜けて中心へと出た。

私服姿の少年と、有翼のプロヒーロー。

「こんにちは、ホークスさん。先生から話に行ってますか」

「ええ、聞いてますよ。麗日お茶子さん」

「お茶子さん? どういうことだ……!?!」

何事もないように頷くホークスと、そのホークスにさえ食って掛かる出久が対照的。

ホークスは少年を落ち着かせるように手を広げると言った。

「大したことじゃないっすよ。麗日さんも『研究』の協力がしたいというのでオツケーしただけです。特に問題はないでしょう?」

「それは……」

出久が、なんとも言えない表情で口を噤む。

お茶子のこの行動は出久の目的を邪魔するものではない。なんとなくやりづらいので止めて欲しいが、喧嘩した手前言いだしづらい。そんなところだろう。

なら、そんな空気を利用する。

「決めたことだから。デクくんの邪魔はしないから、いいでしょ?」

「……勝手にすればいい」

結局、出久はそう言っただけ目を逸らした。

よし。

お茶子は内心で安堵する。

——これで、少しはマシになる、よね?

出久を止める方法が思いつかない。

だから、お茶子はせめて彼についていくことにした。

何をするわけじゃない。ただ傍にいる。それだけで、少なくともお茶子自身が安心できるし、出久だって無茶はしにくくなるはずだ。

当然、相澤からは反対されたものの、自分の考えと意志が硬いことを伝えると、最後には了承してくれた。

『……わかった。麗日、緑谷を頼む』

『はい！ 任せてください！』

ホークスを見上げると、彼は僅かに苦い表情を浮かべて、言った。

「麗日さん。……『研究』、そして『実験』はあなたにとって辛いものになると思うっす。それでも、一緒に来ますか？」

「行きます」

「……わかりました」

頷いた青年は、どこか溜息でもつきたそうに見えた。

(ホークスさんも本意やないんやろか)

だとしたら、どこから？

お茶子を連れていくこと？ 出久を連れていくこと？ それとも

『研究』自体？

わからないが、とにかく今はできることをする。

「お茶子ちゃん」

「麗日……」

クラスメート達を振り返ったお茶子は、笑顔で言った。

「みんな、ごめんね。ちょっと行ってくる。うんと強くなって帰ってくるから、びっくりせんといてね？」

いつもと変わらぬお茶子の態度に安心したのか、みんなも笑って送り出してくれた。



【反乱から一か月後】

夕方のニュースの時間、とあるテレビ局が「急遽予定を変更して」放送した「とあるインタビュー」は、国内、そして世界をも震撼させた。

ゲストは、黒いドレスを着た美少女、あるいは美女。

メインで喋る男性アナウンサーの隣に座り、少女と斜めに向かった若い女性アナウンサーは、緊張を感じながらマイクを握りしめた。

「本日はようこそお越しくださいました——永遠さん」

「ありがとうございます。こちらこそ、よろしくお願いします」

少女——永遠はにこりと微笑み、座ったまま一礼する。

綺麗だ、と心底から感嘆する。

彼女の立場が「犯罪者」でなければ、放送後、芸能事務所からのオファーが殺到したことだろう。

「あ、それと、あまりかしこまらないでください。歳が変わったわけじゃないので。前みたいに永遠ちゃんで大丈夫です」

「い、いえ。今回はインタビュという形ですので、多少距離を取ってお話させていただければと思います」

ナイス。

先輩にあたる男性アナウンサーの対応に感謝。

同時に、この少女が本当に永遠なのだ、と、奇妙な感慨を覚えてしまう。

「まずお聞かせ願いたいのですが、他の局ではなく、当局からのインタビュ依頼に応じてくださったのは何故でしょうか？」

「それは、私が最初にテレビに出演したのがこちらの局だったからです」

「それは……とても光栄です」

永遠とは知らない仲ではない。

最初のテレビ出演以降、幾度となくテレビに出るようになった彼女とは何度も話をしたことがある。お菓子などで「餌づけ」して楽しんでたことも少なくない。

だからこそ、以前の容姿とのギャップ、それから彼女が「敵として」テレビに出ていることが信じられない。

「永遠さんは——失礼。永遠さん、と呼ばせていただいても構いませんか？」

「はい、もちろんです。苗字を名乗れる立場ではありませんし、ヒー



ローネームを名乗ることもできませんから。永遠えいえんと書いて永遠とわと読む下の名前だけが私の名前です」

「巷では『エターナルクイーン』などという通称も生まれているようですよが……」

「呼んでいただく分にはもちろん構わないのですし、あだ名をつけていただくのは嬉しいのですが、自分で『クイーンです』と名乗るのはちよつと嫌ですね」

それはそうだ。

くすりと笑ってしまいそうになるのを必死に堪え、こほんと小さく咳ばらいをする。

気を抜いてはいけない。

今のやり取りで「中身はあまり変わっていないのではないか」とほつとしてしまったが、相手はその気になればいつでも自分達を殺せる敵なのだ。

「では、永遠さん。あなたは どうしてヒーローに、そして世界に弓を引かれたのですか？」

「それは、そうしなければ世界を変えられないと感じたからです」

## 7. インタビュー・ウイズ・イモータル

「永遠さんは世界をどのように変えたいのですか？」

「今よりも争いが少なく、争いが起こっても人が死ににくい世界にしたいと考えています」

志は立派だ。

争いで傷つけられるのも、大事な人が傷つくのも嫌だ。そう思う人間の方が、争うのが好きな人間よりもよっぽど多いだろう。

男性アナウンサーも頷いて、その上で尋ねる。

「失礼ですが、争いを減らしたいという考えと『敵になる』という手段が結び付いていない気がします。それについてはどうお考えですか？」

「さつきお答えした通りです。そうしなければ変えられないと思ったから、そうしました」

「苦渋の決断だった、と？」

「はい」

永遠の表情は落ち着いている。

もともと受け答えのしつかりした子ではあったが、肉体の成長と共に精神的にも強くなったように見える。

「悪いことは悪いこと。昔からそう思っていましたし、その考えは変わっていません。短絡的な手段に出るのは我慢が足りない証拠だと。

……だから、私の弱さがこういう手段を選ばせた。そうお考えいただいて構いません」

表情を歪める永遠。

何だか自分まで胸が締め付けられるような、そんな気がした。

「……具体的に、どのようにして『世界を変える』おつもりなのでしょう？」

「この世界から『個性』を消し去ります」

「っ。そ、それはどのようなようにして、でしょうか？」

「私にはA F O——人から『個性』を奪う『個性』があります。

それを使って私が全ての『個性』を引き受けます」

衝撃だった。

予想していたことではあったが、実際に口に出されると驚かすには居られない。

「世界には何十億という人がいるのですよ？ それを一人で、手作業で奪っていくというのですか？」

「はい。私には『二倍』——分身を作る『個性』もありますが、使うつもりはありません。分身を使って回収してしまうと本体である私と分身に差異が生まれます。それによって、一か所に『個性』を集約できない可能性が生まれてしまいますので」

「それでは労力的に、その、あまりにも無謀なのは？」

「そうでしょうか？ 私は既に三万人以上から『個性』を奪いました。明日は今日より五十人、明後日は明日より五十人多くの人から奪います。一年後には何人分になっているでしょうか？」

一か月で三万人。

増加分を考えずに単純計算すると、一年で三十六万人。十年では三百六十万人。途方もない人数だ。本当に一人で可能なかと考えたくなる数だが、やはり足りないのではなからうか。

「世界人口の全てが『個性』所有者ではありません。日本やアメリカでさえ『無個性』の人が存在します。『個性』否定派の国もありますから、人数はぐっと減るでしょう？ それに『無個性』同士から『個性』持ちは生まれません。今日一人減らすことが未来の『個性』持ちを一人、あるいはそれ以上減らすことに繋がります」

「何十年——百年以上かけて、世界から『個性』を消し去る、と？」  
「必要であれば」

こくりと頷く永遠。

——戦慄した。

気の長すぎる計画だ。そもそも、人はそんなに長く生きられない。実行できるのは『不老不死』である永遠だけだ。

と、少女は微笑んで、

「そんなに時間をかけるのは『最悪の場合』です。うまくいけば、もつとずっと早く、世界から『個性』が無くなるはずです」

「その、方法とは？」

「私は、自分が『個性』を奪った相手に『寄生』をかけています」

この瞬間、既に三万以上の人間が永遠の手中にあることが明らかとなった。



「まあ、そうだろうね。僕が彼女ならそうする」

「校長。落ち着いている場合ですか」

「そんなこと言ってもね。録画だろう、これ？」

「……まあ、そうですが」

校長室。

教頭だか校長補佐だか運営監視役だか、とにかく「校長の相手役」に内定している相澤は根津と二人、空前絶後の放送を眺めながら溜息をついた。

放送に「LIVE」の文字はない。

インタビューの最初にも「収録は番組開始の一時間前に終了します」「当テレビ局は公正な立場でインタビューを実施しており、政治的意図は一切ありません」と明言されている。

今頃テレビ局は凄いいことになっているだろうが、今更行っても永遠はない。

放送を止めさせる意味もさほどないだろう。

人は何よりも「未知」を恐れる。悪役が自分から手の内を語ってくれるというのだから放っておけばいいのだ。そうすれば、少なくとも何をされるのかわからない」という心配はなくなる。

『き、寄生とは……あの、オール・フォー・ワンが使った、あの!?!』

『はい。本体が死んだ場合、寄生した相手を同時に乗っ取って群体と化す、あの『個性』です』

『永遠さんが、死んだ場合……?』

『まあ、私は死んでも生き返るんですけどね』

くすりと笑う永遠。

相澤は苦々しいものを感じながら呟いた。

「……やってくれたな、あのガキ」

永遠を殺しても彼女は死なない。いや、滅びない。

だが、一度でも「死んで」「再生する」という手順を経た時点で、三万以上の人間が永遠に乗っ取られる。

これは「永遠を殺しつくし滅ぼして解決する」という手段が封じられたことを意味する。

「生け捕りにするにせよ、永遠君にはオール・フォー・ワンと同等の“個性”の他に三万超の個性があるわけだ。いやはや、意味が分からないね」

三万。

普通のヒーローが一つの“個性”で戦うのを考えれば、その差は圧倒的だ。もちろん、多くはヒーローが用いるに足りない「ハズレ」だろうが、組み合わせや相乗効果によって化ける可能性もある。

『せ、世界を支配するつもりですか!?!』

『いいえ。重要なのは乗っ取りの効果じゃありません』

『寄生』にはもう一つの効果があると永遠は語った。

本体の死による乗っ取りを経なくとも、相手が持っている情報を共有することはできる。つまり、永遠は三万人分の感覚をハックできる。

『目がたくさんあれば、ターゲットを探す手間が省けるでしょう?』

私は、“個性”を奪えば奪うほど、寄生すればするほど、次のターゲットを探しやすくなるんです』

それが、日々犠牲者が増えるからくり。

緩やかに犠牲者が増えていくこの状況はあくまでも下準備でしかないのだということ、彼女は暗に告げていた。

「それだけ『目』があれば探し残しも無くなる。合理的だね」

「合理的であれば何をやってもいいんですか」

「相澤君に言われたらおしまいだと思いますが」

一クラスまるごと除籍指導↓全員復学させる、という離れ業をやらしたことがある相澤は目を逸らした。

『で、ですが、それはあまりにも人道的に!』

声を荒げたのは、それまでサブに回っていた女性アナウンサーだった。

永遠は彼女に視線を向けると、不思議そうに首を傾げた。

『どうしてですか? 私が死ななければ身体にも心にも異常は出ません。気にしなければいいだけです』

『実害がなければいいんですか!? そんなの、爆弾を抱えて生活するようなもの——』

『なら聞きますが、あなたの周りに攻撃的な“個性”を持った人はいませんか? 洗脳系の“個性”を持った人は?』

『え……?』

『彼らがちよつと“個性”を暴走させただけで、あるいはちよつと魔が差して“個性”を悪用しただけで、あなたは死んでしまうかもしれない。意のままに操られてしまうかもしれない。それと何が違いますか? 道行く人の中にそういう人がいるかもしれないから出勤するのを止める、なんて言いますか?』

『そ、それとこれとは話が違——』

『じゃあ、こう言いますでしょうか?』

永遠の声はなおも穏やかだったが、続いた声にはどこか冷たさがあつた。

『九十九回殺されるよりマシですよ?』

『——っ!?!』

がたん、と、女性アナウンサーが席を立つ。

『そ、それはあなたが罪を犯したからでしょう!?!』

『お、落ち着け!?!』

隣にいた男性アナウンサーが制止しなければ、彼女は永遠に食って掛かっていたかもしれない。

押さえられてなお、憎々しげな視線を送る彼女に対し、永遠は涼しい顔で、

『ワープできるうえ、一人で大量殺戮できる敵を生け捕りにしなかったのが落ち度でしたか? それとも、無数にいるオール・フォー・ワ

ンの寄生体を短時間で処理できなかったのが落ち度ですか？ その過程で犠牲者を出したのが罪ですか？』

なら、と永遠は続けて、

『オール・フォー・ワンと決着を付けられずに神野事件まで生き永らえさせていたオールマイトは大犯罪者ですな』

『故人を侮蔑するような発言は控えていただけませんか』

これは、オールマイトフリークとして知られている男性アナウンサー。

『失礼しました。……私もオールマイトからは直接教えを受けたことのある身です。彼の死は大変残念に思っています。信じていただけるかともかく、私やその仲間は彼に一切手を出していません』

『……ヒーローにも限界があるのは承知しています。ですが、“個性”の違法所持の件もあります。そちらについても罪ではないと？』

『証拠を出せと言われても無理なので、言い訳がましくなってしまうが……“個性”としてのAFOならびにその他の“個性”所持については政府も公安上層部にも了承を得ていました。それどころか、私にしかできない案件を複数依頼され、解決しています』  
『なっ!?!』

相澤は「言いやがった」という思いで画面を眺めた。

『し、証拠は!?!』

『先ほど申し上げた通り、ありません。そもそも、敵という立場になった私がどんな証拠を出したところで、偽造だと言われるのが関の山でしょう?』

今のご時世、電子データの改竄など珍しくもなんともない。

紙の書類であればなおのこと、書式や筆跡さえコピーしてしまえば幾らでも偽れる。

沈黙の後、再び男性アナウンサーが尋ねる。

『……どうあっても、方針を変えないおつもりですか？ たとえヒーローに追われても?』

『ええ。私にヒーローと争う気はありません。私が欲しいのは平和ですから、他の敵に暴れられるのは不本意なんです。ただ、向こうから

くるなら別です。私を捕まえるつもりでも、殺すつもりでも、どうぞご自由に。ただし、やれるものならやってみろということになります  
が』

『無数のヒーロー、それに警察を相手に戦える、と?』

『そうですね。最低でもオールマイトとオール・フォー・ワンの両方を相手にするつもりでかかってきてください。オールマイトの個性も私が持っていますから』

根津が「あーあー」と他人事のように声を上げるのが聞こえた。



ワン・フォー・オール オール・フォー・ワン  
O F AとA F Oの関係、そして歴史。

聞かされたそれらには信じられなかったが、オールマイトが引退時点で「個性」を失っていたことは広く知られている。

永遠がオールマイトから奪ったのであれば、彼女はもっと早く大々的に動けただろう。少なくともオール・フォー・ワンを殺すのに手間取ることはなかったはずだ。

だから、頭に血が上った状態でも、永遠の語った「後継者からの奪取」という話は十分にありうると納得できた。

「何故、オールマイトの「個性」を奪ったのですか?」

「あれが一番の脅威だからです。イレイザー・ヘッドの『抹消』、エンデヴァアの『ヘルフレーム』も同じです。彼らは私を敵として処分しようとしたから、自衛の範囲内ですが」

これは、彼女は、あの頃の永遠とは違う。  
今になってようやく確信する。

正義とか悪とか、そんな言葉で片づけてはいけない存在。人ではない何か。超越者。それが今の永遠なのだ、少女の発するある種の力  
リスマに「ぞくぞく」しながら、理解した。

「……最後にお聞かせください。現在、世界には大きな混乱が起きて  
います。「個性」を奪われる前に使おう、と殺人が起きるケースもある  
ようですが、それについてはどうお考えですか?」



「ヒーロー以外が『個性』を使うのは禁止のほうです。それを奪われるから社会が混乱する、というのとはおかしな話ではないでしょうか。ましてや殺人を犯すなんて、当人の倫理観の問題でしょう？ 察知してきた事件については可能な限り対処するつもりはありますが、事件を起こす人間も、その原因を私に求める考え方も、はつきり言えば理解できません」

「……ありがとうございます」

撮影は終わった。

終了後、永遠はスタッフ一同に丁寧にお礼を言った。そして笑顔を崩さないまま口にした。

「裏で控えているヒーローさん達に伝えてください。ここだと迷惑がかかるから、戦う気なら局を出てからにしませんか、って」

「――」

彼女は、自身の永遠に対する感情が怒りや憎しみから畏怖、あるいは崇拜へと変わっていくのを、心のどこかで感じた。

## 8. 暗躍

【反乱から四十日後】

国内の「個性」喪失者はなおも増え続けている。

人々からの不安の声は収まることなく、政府には望まぬ「個性」喪失に対する補填を要求する訴えが寄せられているという。

「個性」を失い、実質的に戦えなくなるヒーローも増加中。

国は否応なく変革の時を迎えている。

「くそっ、忌々しいガキめ！」

怒り任せに机を叩くと、どん！ と大きな音が室内に響いた。

ヒーロー公安委員会において重役を務める立場——人前であれば注意されてしかるべき行動だが、今この場にいるのは『彼』と秘書だけだ。

息を吐き、秘書に尋ねる。

「実験はどうなっている？」

「順調に進んでおります。候補者の適合数値にバラつきが出始めているため、順次選別を行い、実験段階を進めていく予定です」

「そうか。完成はどのくらいになる？」

「およそ一か月ほど先になるかと」

「よし。そのまま進めろ」

「かしこまりました」

恭しく答えると、秘書が退室していく。

一人になった『彼』はにやりと笑った。

今、行っている実験は、あの忌々しいガキ——永遠に与える予定だった大量の金を用いたものだ。事務所を閉鎖し、ヒーロー資格を剥奪した時点で報酬を受け取る権利もない。なので、その金を用いて永遠を倒すための『戦力』を作り出すことにしたわけだ。

公安の中でもこの実験については意見が割れているのだが、過半数の合意を以て強硬かつ迅速に進めた。

一か月後には最強クラスのヒーロー、否、戦士が出来上がっていることだろう。

実験の詳細、特に施設の場所については『彼』はもちろん秘書も知らない。

これは永遠の『寄生』対策だ。

実験について詳しいものは全員施設内に詰めており、外に出さない。これによって誰を情報源にしようと大した情報が得られないようにした。

結局、金と権力があれば何でもできる。

人と物を動かせるというのはそれだけで力であり、何万の“個性”を持つていようと個人は個人、できることなどたかが知れているのだ。

「待っている。一か月後にはお前も終わりだ。あの世か、あるいは監獄で己の罪を思い知るが良い」

あれが死ねばまた平和が戻ってくる。

ヒーローになりたがる馬鹿な子供なんて幾らでもいるのだ。雄英の運営は率先して貧乏くじを引きたがる正義馬鹿に任せて、自分は甘い汁を吸えばいい。

そうして好き放題やって満足して死ねれば、後のことなどどうでもいい。

実験による犠牲？ 志願し、契約書にサインした時点で自己責任だ。遺族が泣きわめこうが、適当に金でも出してスケープゴートを辞職させておけば問題ない。辞職した者もどうせ天下りで関係機関に再就職できるのだから損はしない――。

「へえ。それは楽しみ」

「!？」

声は、すぐ近くから響いた。

驚愕。

がたん、と椅子から落ちて腰を抜かした『彼』は、警報のボタンを頭で思いながらも動けなくなった。“個性”の影響ではない。単純に「次の瞬間に死んでいるかもしれない」という恐怖のせいだ。その間にぺと、と、手のひらが触れる感触。

ほんの一秒後に手が離れた時には、生まれた時からずっと付き合っ

てきた「個性」が『彼』の身体から消失していた。

痛みも何も感じないが——『寄生』もされたのだろう。

「ま、待て！ 助けてくれ！」

気づけば命乞いを口にしていた。

「私を殺しても実験は止まんらん！ いや、むしろ、一般市民の怒りはお前により向かうだろう！ だ、だから殺さないでくれ！ 違う、殺すな！ 損をするのはき、貴様の方だぞ！」

「……はあ」

溜め息。

「馬鹿じゃないの」

「ひっ……!?!」

どがぐしゃ。

複雑な音、かつ一瞬の音だったせいで、実際には殆ど衝突音としか感じられない音と共に——高級品の頑丈な机が、跡形もなくばらばらになった。

「殺すわけではないでしょ？ 私利私欲ばかり考えてても、あなたは人

間なんだから」

「え、あ？」

気配が、消えた。

数分待っても何も起きない。音を聞きつけた秘書や他の職員がやってきても、彼女は、永遠は何もしてこなかった。

自分が年甲斐もなく粗相をしていることに気付いたのは、心底ほつとした後のことだった。



「よし、今日のノルマ終わり、つと」

「お疲れ様です永遠ちゃん。これ今日の着替えです」

「ありがとうトガちゃん。……って、言いながら首に噛みつくの止めようよ」

「いいじゃないですかこれくらい」

「うん。まあ、慣れると微妙に気持ちいいけど」  
とりあえず着替えてから噛みついてもらった。

で、そのやり取りが終わるのを待ってお姉ちゃんが歩み寄ってくる。

「それで、永遠。首尾の方はどうですか?」

「ばつちりだよ。休憩しながらデータで転送するから、後の処理はお願いできる?」

「ええ、任せてくださいませ」

ふん、と、胸を張って請け負ってくれた。

本当に頼もしい。うちにはお姉ちゃん他に頼子さん、宮下さんもいる。みんなに任せておけば地味な作業はお任せしちゃって大丈夫だ。

『寄生』件数も結構増えてきたのでそろそろ頃合いだろうと、私は今日のノルマで日本のお偉いさん十各国首脳を相手にしてきた。

外国で狙ったのは主に核保有国。

そろそろ「日本にサプライズで核しこたま打ち込むね♪ その永遠とかいう敵と一緒に滅んでね♪」とかやってきてもおかしくないからだ。私を殺したら自分も死ぬっていう状況で核発射を命じられる聖人君子はそうそういない。また、少しでも頭が回る人間なら、自分が『寄生』された時点で私を殺しきれないってことがわかるはずだ。

『寄生』は自分の一部を相手に宿す“個性”。

私の身体の一部である以上、本体である私が再生不可能なダメージを受けた場合、寄生体が本体に成り代わる。核で一国まるごと焼き滅ぼしてなお、消せるのはA F Oオール・フォー・ワンとその他数多くの“個性”だけ。『寄生』と『不老不死』は残る。

賢明な人なら思い留まるはずだ。

更に、偉い人たちに『寄生』したことで、彼らの所業を丸裸にできる。

普通に仕事をしている人達をどうこうする気はない。

ただ、私欲のために権力を利用している不屈き者には容赦しない。彼らの記憶から抜き出した悪事・醜聞を“個性”で整理、電子データ

にして媒体に保存。後はお姉ちゃん達にお願いしてリストアップしたり編集したりして公開してもらおう。

奪って手に入れた『超記憶力』『記憶整理』『空想の電子化』等々によるコンボだ。

「これで日本も世界も少しはすつきりするね」

今日のおやつは何にしようかと考えながら、私は廊下を歩いていった。



「えー……まだ若干、接続に手間取っている人がいるようですが、時間なので始めます。皆さん、本日はお忙しい中、こうして参加いただきありがとうございます」

『脳筋なヒーローも多いからな。しゃーねえ。っても、これだけの人数が一度に会議に参加するのって初めてじゃねえか？』

「ええ。それだけ切迫した事態ということですよ。ヒーロー校である雄英としてはこの状況を鑑み、ヒーローの意思確認を図るべくこの場を設けました」

相澤は雄英校舎内の会議室にいた。

隣には根津やミッドナイト等の主要な教師も座っている。彼らの姿はカメラが映し、接続されたPCへと転送、ネットワークを通じて他のヒーロー達へと送っている。

要はWebを利用した大会議である。

先に言われた通り、接続者数は百を優に超える。普段忙しく動き回っているヒーローだけに、これだけの人数が一度に話し合うというのはまずない。実際に集まるのであればこの規模はほぼ実現不可能だっただろう。

「では、時間がもったいないのでさっさと会議に移ります。議題は永遠——仮称敵名『エターナルクイーン』への対応についてです」

『ホント、トワちゃんってば随分仰々しいあだ名を付けられたわよね』

『Mt. レディ。もともとはアンタの教育がなつてなかつたん違うか?』

『んなわけないでしょ。あの子はヒーローの役目も辛さも百も承知よ。なのにこうなつたのは、あの子の頑張りを誰もまともに評価しなかつたから。違う?』

『それは——』

誰かが反論しそうになつたところで、相澤はわざとらしく咳ばらいをした。

「それくらいでお願いします。過ぎたことを言つても仕方ありません」

『……そうね。悪かつたわ』

『いや……』

「では、話を続けます。彼女に対する対応方針については事前に大まかなアンケートを取りました。結果はこの通りです」

- ・脅威として優先的に対応 ……12%
- ・通常の敵同様に遭遇すれば交戦 ……61%
- ・よほどのことがない限り放置 ……22%
- ・その他 ……5%

『何だよこの結果。ヤベえ敵なのは明らかだろうが。とつとと捕まえずにどうするんだよ!?!』

『……そう思つた者の多くは既にこの世にいない、あるいはこの場に出てこられない状態にある、ということであろう』

「まあ……そうですね。彼女、及びその一派に直接殺されたヒーローはいないかごく僅かですが、“個性”を奪われた者や、注意が疎かになつたところを他の敵に殺された者は結構な数に及びます」

正義感の強い者が馬鹿を見ている、ともいえる。

否、アンケートに答えたのは全てヒーロー。正義を志していない者などいない。ならば血気盛んな者、と呼ぶべきか。

「一般人や街に目立つた被害が出ていない以上、静観という見方も決して間違つてはいないでしょう」

『被害なら出てるだろ。“個性”奪われんのは立派な被害じゃねえ

か』

「いや、法的にはそうとも言えないんだよ」

と、これは根津。

「『個性』は法律上、個人の能力の一部として扱われる。身体能力とか歌の上手さ、絵の上手さ、文才などと同じく、個々人によつて差があつて当然のもの、ということだね」

そして、こうした『能力』を損なわせるような行動を取った者は、その手段に応じた罰を受ける。

怪我をさせて身体能力を損なわせたなら暴行や傷害になる。危険な薬物を用いたのなら取り扱いに関する法律等々が加わるだろう。大会やコンクールへ参加させない、十分な練習の機会を与えない等の嫌がらせであれば法的な処罰は難しい場合もあるだろうが、所属組織を通じて罰を与えることが可能だろう。

「では、痛みも怪我もなく毒物も使わず、一瞬にして証拠も残さず身体能力を奪つたとして——それは罰することができるだろうか？」

『そりゃあ……あ？　できる、のか？』

「難しいだろうね。現状、『個性』を奪うことができるかわかつているのは永遠君一人だけだが、だから永遠君が奪つた、というのは論理の飛躍が過ぎる」

そもそも『個性』自体まだまだ解明されていない部分が多いのだ。対象に『個性』があるかないかを判別する手段さえ特定の『個性』に頼っているような状況。

例えば、個性が突然、自然消滅することだつてあるかもしれない。

例えば、永遠以外にAFOに類似した個性持ちがいるかもしれない。

例えば、個性消失申告者の中に嘘をついている者がいるかもしれない。

せめて、永遠が触つた直後に『個性』が消えたという映像証拠でもあれば別だが、奪取が『透明』状態で行われている以上は難しい。

「まあ、既に犯した傷害等の罪があるから捕まえるに越したことはないんだが……彼女を相手にするなら『無数の個性のどれが使われるか



わからない中』『一度も触られず』『殺されることなく』『怪我也毒も洗脳も効かない怪力持ちを生け捕りに』しないといけない」

『……十三号のブラックホールとか使えば理論上は殺せる、いや、滅ぼせるんだろ？ だったら最悪やる価値は——』

「永遠君が九十九回の死刑を受けたんだ。それで三万人以上の命を奪うなら、数千回は死刑……せめて半殺しに遭わないと理屈に合わないだろうね」

もちろん、罰を受ければいいという問題ではない。

罪の重さを罰の厳しさに当てはめ、ヒーローの取って良い手段ではない、と諭しただけだ。

『……寄生がブラフってことはないのか？ あれは増殖型の個性なんだろ？ バラ撒いたら本末転倒じゃないのか？』

「彼女の目的が“個性”による争いを無くすことであると仮定すれば、本人に使いようのない“個性”が残る分には問題ないのでしよう。寄生している相手の所在もわかるのですから、二度手間ですが事後の回収は可能です」

『……話は戻るが、生け捕る方法は何かないのか？』

「ワープと自己増殖ができて状態異常も効かないオールマイトを拘束する手段があれば、それが有効です」

有り体に言って無理ゲーである。

『なんだよ、それ。ヒーローってのはこんなに無力だったのかよ!？』

「これはコミックでも映画でもない。現実である以上、どうしようもないこともある。こうなる前に手を打てなかった我々全員、いや、全人類の責任だ」

会議はその後にも紛糾したものの、進展の望めるアイデアが出ることはなかった。

## 9. 波乱

【反乱から50日後】

『業務停止命令』

目の前に置かれた紙——電子メールで送られてきた内容のプリントアウトだ——を眺めた雄英校長・根津はH A H A H A！と笑って言った。

「いやあ、遂に来ちゃったねえ！」

「笑いごとじゃないでしょう!?!」

雄英の会議室。

なんだかんだ雄英教師陣の良心、といった感のある、際どい服装の美女——ミッドナイトが、呑気な根津の態度に声をツツコミを入れる。

「混乱が深まっている今こそ、新たなヒーローの養成が必要だということに……何故、雄英が閉鎖されないといけないの!?!」

「仕方ないさ。うちは国立。運営資金の大部分を国からの出資に依存している。国が止めろと言うなら従うしかないんだ」

嫌ならお金を出さない、と言われれば「やめてください死んでしまいます」となる。

校長や教師の任命、解任の権利はさすがに独立しているのだが、教育委員会が『指導』を行う権利は当然ながら存在する。それは実質的な命令権だ。

ミッドナイトもそのあたりの事情は理解しているのだろう。頷いたうえで再度口を開き、

「どうせ『あの子』を育てた責任がどうこう言うんでしょ？ だったら、校長やイレイザーだけ解雇して代理を立てればいいじゃない」

「……もう少し言い方があると思うんですが、ミッドナイト先生」

「いいのよ、イレイザーだから」

ひどい話だが、相澤もそれ以上はツツコミを入れなかった。

根津は笑って、

「それも無理だろうね。何しろ今、国の機関はどこも大混乱だ」

理由は永遠による個性略奪と『寄生』である。

「個性」のなくなった人間は同時に『寄生』を受けているということであり、永遠に情報を流す端末に成り下がったも同然。

閣僚や秘書等々がその対象になった場合に懐を探られたくないお偉方はどうするか——答えは、その人物を辞めさせる、である。

加えて、永遠達の犯行とみられる大規模な「偉い人の醜聞暴露」が発生。

長年高い地位に胡坐をかいていた人間が相次いでバッシングを受け、辞職を余儀なくされている。

こうして、強制的な大幅な人事異動が起こり、結果としてどこも人手が足りなくなった。

マンパワーの余剰が嫌われるのが現代社会なのだから、人が一気に何人も辞めれば仕事が滞るのは当然。人件費をケチっているからそういうことになるのだという話だが、後から後悔しても遅い。

何が言いたいかというと、どこも人手が足りてないのに、外部から雄英校長を送り込めるわけがない、ということだ。

根津と、彼が相談に便利使いしている相澤がいなくなれば雄英の運営は立ちいかなくなる。

よって、いったん閉鎖して再開を待つしかない。

「校長が政府や公安に喧嘩を売るからじゃないの……？」

「すまないね。ここ最近、馬鹿には馬鹿と言わないとわからないんじゃないかと思っっているんだ」

「それは否定しませんけど」

根津や相澤が辞めさせられる理由はミッドナイトが言った通り、永遠を育てた責任を追及するため。

些か遅すぎる対応とも言えるが、政府としては雄英の運営を根津に押し付けたかったのだろう。だが、一向に収束しない『個性ロスト』の恐怖から民意が雄英バッシングへと動いた。

一般市民が辞めさせろ辞めさせろと煩いので「じゃあ辞めさせろか。根津最近ウザいし」となったわけだ。

相澤が溜め息をついて、

「プロ試験自体も実施が危ぶまれています。うちの閉鎖もやむを得ないでしょう」

次のプロ試験——相澤の担当するA組が三年次の試験までは会場を受験者以外に非公開として実施される方向で動いている。

それにしたって、永遠がヒーロー及びその卵を襲わないという前提に基づく計画だ。

根津自身、試験自体に永遠達からの介入はほぼ無いと考えているが、だからといって他の敵が襲撃してこないという保証はどこにもない。

「ま、命令によれば雄英の閉鎖は段階的。在校生は卒業させていいと言ってくれているから、まだ温情を感じるね」

今の三年生が卒業し、新入生が入ってこないのであれば、生徒数は単純に三分の二になる。

二年生以下の生徒にしても親の希望で辞める者が出るだろう。それだけ人数が減れば根津と相澤がいなくともなんとかなる。

「ホント、お偉いさんってのはふざけてるよな」

プレゼントマイクが吐き捨てるように言った。

「本当に世界から個性が無くなって敵がいなくなって、警察が犯罪者を捕まえてくれるなら——ぶっちゃけ俺はそれでいいぜ。白雲の奴を追いかけてあいつらを手伝いたいくらいだ」

「マイク。そういうのは公の場で言っちゃいけないよ」

部下を窘めつつ、根津は曖昧な笑みを浮かべた。



「よう、邪魔するぜ」

「ここが『女王』の育った店か。しけてんな」

昼の営業時間が終了しようかという時間。

人の減ってきた洋食店『RYORI』の店内に二人の男性客が入ってきた。

粗野な性格が伝わってくるようなラフな服装をした彼らは、片や手

にしたナイフの刃を伸ばし（カッターナイフ的な意味ではなく、金属の刃が実際に伸びている）、片や周りの空中に複数の刃物を浮かべている。

ニヤニヤという嫌な笑い方から見ても、食事が目的でないのは明らかだった。

店の主人夫婦の一人息子、浩平は調理場から店内に出ようとして――父である店主に止められた。

「親父」

「お前はここにいろ。その腕が傷ついたら大変だろう」  
「っ」

唇を噛み「わかった」と答える。

浩平の右腕は以前、とある敵に襲われた際に傷つき、失われている。代わりに超高性能な最先端の義手を使っているが、もし大規模な破損をした場合、修理費用を賄うのは極めて難しい。

父親の、料理人の腕だって同じくらい価値がある――と、言いたいのは山々だったが、同じ傷なら生身の腕の方が安く早く治せるのは紛れもない事実。

店の調理担当が一人減るのは大打撃なので、理屈で言っても、ここは我慢するしかない。

父とベテランの男性従業員が二人で出ていくのを見送り、キッチンに引っ込んで来た母を庇う。

「何の御用でしょうか。当店は洋食屋です。他のお客様の迷惑になりますので物騒な物はしまっただけませんか？」

「は？ 嫌に決まっただらろボケ」

「いいから『女王』を出せよ」

またか。

うんざりして溜め息を吐く。この手の輩が来るのはこれが初めてではない。多くは一般人からの誹謗中傷や悪戯の類であり、無視するか、落書き等に対処するだけで済む。この店は常連さんが多いので売り上げに多大な影響が出ているわけでもない。

ただ、『女王』の名を出して“個性”を行使してくる輩だけは本当に

困る。

既に母が警察に通報を始めているが、到着するまでには時間がかかる。到着したところで警察は「個性」を使えない。ヒーローが来てくれればいいが、今は戦えるヒーローが減少傾向にある。

「……申し訳ありませんが、そのような者は当店におりません。お引き取りください」

「うっせえな、いないなら呼べばいいだろうが!」

「痛い目に遭いたいのかよ!?!」

「個性」喪失騒ぎのせいで、この手の小者の敵は増えた。

無くなる前に使いたい、というだけで犯罪者に堕ちるのかと、大した「個性」を持たない浩平などは思ってしまうのだが、結局のところ、理由をつけて力を誇示したいだけなのだろう。

「さっさとしないとお前の身体が『こう』なるぜ?」

宙に浮かんでいた刃物の一つが突然動きだし、無人のテーブルへと向かう。

勢いよく突き立てられればクロスもろとも破損し、交換を余儀なくされるが――。

「止めるよ、格好悪い」

「な……?」

隣のテーブルで食事をしていた客が立ち上がったってナイフを止める。それも、人差し指と中指で挟んで、だ。

「邪魔すんじゃないやねえよコラ!」

「殺されてえのか!?!」

「殺す。殺すねえ。言うじゃねえか。耳が無くなった程度で――私が誰なのかわからないってか!?!」

衝撃音。

一瞬にしてチンピラ二人のうち、ナイフを伸ばしている方に肉薄した褐色肌の美女は、鋭い拳を男の腹へと突き立てた。

「がっ!?!」

「な、何い!?! なんでお前がこんなところに居るんだよ!?!」

「なんでって、ヒーロー資格剥奪されて暇だからに決まってるんだろ！」  
拳を引き戻すと同時につま先を跳ね上げ、もう一人の顎を蹴り上げる。

「個性」を失い、代替として与えられた「個性」さえも『女王』に取り上げられた。ヒーローではない、ただの無個性の一般人になつてなお、その強さは健在だった。

「雑魚が。……鍛え方が足りねーんだよ」

たった一撃で地面に倒れた男達を足でぐりぐりしながら言うミルコ。

「あのさあ。お前ら、わかってるか？」

「な、何がだよ……？」

呻くように問い返す男達。

それに対して、ミルコは勿体付けるように笑みを浮かべて、

「私はお前らの言う『女王』にもう接触してる。「個性」なくなったのは知ってるんだろ？ それって、どういうことだと思う？」

「個性」回収と『寄生』はセット。

寄生された人間はあの少女の監視対象になる——。

「あ、あああ……っ!？」

悲鳴と共にナイフが浮かび上がり、男の手へ。手に納まったナイフの刃がぐんぐん伸びて——突然、元の長さに戻った。

「あ——？」

更に、ぽかんと声を上げた男達の身体が、みるみるうちに縮んでいく。

小学生くらいの年齢まで退行した二人は、「個性」を奪われ、更に身体まで変えられたショックで泣きわめき始める。

まさか、心まで子供に戻ったわけではないだろうが、

「よう、ごころーさん」

誰もいない、少なくともいないように見える空間にミルコが声をかけて。

数秒、呆けた浩平は、はっと我に返って店内へ向かった。

「永遠が、いるのか!？」

「いや。もういねーよ」

「ここしばらく頻繁に飯を食いに来ては長居していく元プロヒーローは軽い口調で答えると、元の席に戻って食事を再開した。「ち、冷めちまった」

今日の注文はビーフシチュー（にんじん多め）だった。



「……はあ。今日も頑張ったなあ」

今日のノルマを終えた私はいつもの通りアジトに戻ってきた。戻ったら忘れないうちに服を着る。

最近手に入れた『布作成』＋『布加工』の「個性」コンボ。

『布作成』はお姉ちゃんの万能型と違って布しか作れないけど、私が組成を知ってなくても使えるのが魅力。『布加工』の方も完成系さえイメージできればある程度の無理が利くので使いやすい。

黒い布で簡単なワンピースを作って、ほっと一息。

廊下を歩いていくと、最初にお姉ちゃんと会った。

「お帰りなさいませ、永遠」

「ただいま、お姉ちゃん。変わりはない？」

「ええ。透さんとトガさんがどんどん忙しくなってきた程度ですわ」

「そっか」

最近はおトガちゃん達にもお仕事が増えた。

「支援者が増えてきてる証拠だね」

「ええ」

私を応援したい、という個人や団体がだんだん増えてきている。

私に代わって（トガちゃんは『変身』して、透ちゃんはこつそり護衛として）彼らに会って、その人柄を見極めるのが二人の仕事。

移動に必要な白雲君や『嘘発見』ができる頼子さんがついて行くことも多い。

「実態として、永遠の思想に心底感銘を受けている者は——正直、少な



いですが」

「仕方ないよ。人は長いものに巻かれるものだし」

生き残るために恭順を選ぶ者、私に付けば好き放題できると考えている敵（もしくは予備軍）、支援者のフリをしてスパイをしようとする者などなど、色んな人がいる。

なので、支援者候補の人達にはここには呼んでいない。所在を聞いてこっちから出向く、を徹底している。

居場所を教えなければ便利使いできる人達もそこそこいるし。

「……例の研究施設についてはまだ有力な情報がありません」

「ん……まあ、そうだよね」

デクくんとお茶子ちゃんが参加する『実験』が行われているという施設。

小癩な情報統制を行ってくれたらしく、非人道的な実験、という以上の詳細は殆どわかっていない。

放っておけば、私対策を徹底した何かが出来上がることだけは確かなんだけど。

「最悪、放っておいてもいいよ」

「よろしいのですか？」

「正義の形は一つじゃないでしょ？ デクくんが望んで『復讐』しに来るなら相手をするべきかな、って思う」

彼が私を殺しに来るんだとしても、だ。

「さて。誰かに変身しておやつでも買つてこようかな。そろそろポテチが足りなくなつてたような気がするから……」

「永遠」

振り返ると、お姉ちゃんが真剣な顔で私を見ていた。

「緑谷さんが再び戦いを挑みに来たとして、あなたは、どうされますか？」

「殺すよ」

私は即答した。

ヒーローとしてじゃなく、私を殺すために立ちふさがらるなら、それは敵だ。

一般人でもない以上、容赦をする理由がない。

「……ままならないものですわね」

「お姉ちゃん。止めてもいいんだよ?」

「いいえ。わたくしは引きません。一度背負った罪は最後まで背負います」

「……ありがとう」

最後まで、か。

いったい、私の最後はどこになるんだろう。

## 10. 狂気

【反乱から六十五日後】

某地下研究所内・演習場。

緑谷出久は簡素な運動着姿でその一端に立ち、周囲を見渡した。  
何もないドーム状の空間。

壁の上側は透明になっており、そこからは白衣姿の男女がこちらを見下ろしている。強化に協力してくれている研究者達——と言えは聞こえはいいが、要は出久達をモルモットにしている人でなし共だ。  
だが。

『実験』の成果は確かに表れている。

ヒーローとしては貧弱と言わざるを得なかった出久の身体は見違えるほどに引き締まり、身体能力が向上、頑丈さも回復力もアップしている。

莫大な金がつぎ込まれたプロジェクトというだけのことはある。

今ならO F Aの100%にだって耐えられるかもしれない。  
ワン・フォー・オール

それでも、足りない。

ここに『個性』が足されるとしても、その程度では『あの少女』には届かない。

もつと、もつと、もつと、強くならなければ。

(あいつを——殺せない)

心の中の憎悪は恐ろしいほどに膨れ上がっている。

実験に次ぐ実験、トレーニングに次ぐトレーニング。果ては、カウ  
ンセリングによる『心の闇の増幅』さえもメニューには含まれていた。

『君はどうしてここに来たんだい？』

『目的は？』

『そうか、その子が憎いんだね。どのくらい憎い？』

精神科医の巧みな話術によって本音を引き出され、自覚させられ、  
繰り返し認識させられた。

『なら、声に出して言うんだ！ ほら、大きな声で！ 僕は永遠を殺したい！ ヒーローを気取っていた癖に敵に堕ち、オールマイトを殺し

たあの女に復讐してやりたい、って!!」

何度も何度も繰り返すうち、一人になると自然と声に出るようになった。

『殺す。永遠さんを——永遠を殺す。あの女を殺す。絶対に許さない。復讐してやる。オールマイトの敵。殺す。殺す殺す殺す』

利用されているのはわかっている。

でも、それで構わない。

目的さえ果たせばいい。その後はどうなろうと——他の敵を殺すための駒にされるのか、それとも、要らなくなったから殺されるのか。どちらでも構わない。

今望むのは『実験』に最後まで参加することと、永遠を殺せるだけの強さを手に入れること。

『No. 20。準備はいいか?』

「いつでも」

スピーカーからの声に淡々と答える。

ここでは、出久は「緑谷出久」ではなく「No. 20」だ。彼はあくまでも協力者、被験体の一人にすぎない。参加者は他にも——少なくとも十九人はいる。いた、と言うべきか。

うち何人かは出久が「潰して」しまった。

腕を折って。片眼を潰して。右手の指を噛みちぎって。

優位性と有用性を示した。

これから行われる試合も同じ。ルール無用の殺し合い。向こうのゲートから現れた相手を潰すだけ。死ぬ前に戦闘不能になってくれれば殺す気はないが、場合によっては殺してしまっても構わない。

「というか、相手はまだですか?」

これまでの試合では、入場はほぼ同時だったのだが。

『まあ、待ちなさい。今日は特別だからね』

「?」

『これが最後の試合ということだ。もう被験体は君ともう一人しか残っていない』

なるほど、いつの間にかそこまで減っていたのか。

これは蟲毒のようなもの。

互いに潰しあい、生き残った被験体同士がまた潰しあう。そうして  
経験値を飛躍的に高めさせ、最後に生き残った一人が残る研究費とマ  
ンパワーを総取りして「仕上げ」を受ける。

これに勝てば、永遠にたどり着ける。

『感想はどうだい、No. 20』

「嬉しいです」

実際、唇の端が歪に吊り上がっている。

「嬉しいです。嬉しすぎて、やりすぎるかもしれない」

『そうか。それはいいことだ』

音を立ててゲートが開いていく。

ゆつくりと姿を現す対戦相手。意外なことに女のようだ。出久が  
これまで戦ってきた女は悲鳴ばかりが大きい雑魚だったのだが、向こ  
うも自分とほぼ同じ数の勝利を重ねてきたというのなら、きつと齒ご  
たえのある相手なのだろう。

相手にとって不足はない。

『是非。殺しあってくれたまえ。——恋人同士で、ね』

露わになった相手の顔は、世界で唯一キスをした人と同じ顔をして  
いた。



身体が熱い。

高揚が収まらない。

戦いが、痛みが、血が、悲鳴が楽しみでたまらない。欲しくてたま  
らない。それらを全身で感じるたび、絶頂に等しい快感が駆け巡る。

——ああ、駄目だ。

自分はすっかり変わってしまった。

変えられてしまった、と、麗日お茶子は自覚していた。

研究所に来てから数十日。

外の世界がどうなっているのかもわからないまま、狭い部屋を宛が

われ、一日の殆どをトレーニングや投薬、カウンセリングと称した洗脳に充てられた。被験体同士で顔を合わせることもすら敵わず、期待したような出久との接触は不可能だった。

業を煮やして脱走しようとしたこともあったが、その結果、お茶子を待っていたのは『お仕置き』と、より苛烈になった実験メニューだった。

裸同然の格好にされ、屈辱と共に耐えがたい苦痛を与えられる。求められたのは恭順。

叱責をされれば「ごめんなさい」、小さなものでも与えられれば「ありがとうございます」。たとえ心からの言葉であろうと、相手が満足しなければ何度でも繰り返し言わされる。そうしているうちに、研究者達に従うことが当たり前になっていき、彼らの言うことを素直に聞き入れる人格が出来上がった。

刷り込まれたのは競争意識。

生殺与奪さえも彼らに握られているという認識が過酷な訓練を受け入れさせ、最初の『試合』で無我夢中のまま、相手を半殺しにしたことで、お茶子の心は完全に変質した。

——やらなければ自分が殺されていた。

言い訳を本心にしなければ罪悪感に耐えられなかった。

同時に、次は自分が殺されるかもしれないと強く思った。よくやった、と、研究者達から褒められ、その日から食事の質が少し良くなったことに、たまらない快感を覚えた。

『敵は殺せ』

『勝つということは、自分の価値を示すことだ』

『弱い者に生きていく資格などない』

次第に暴力を振るうことへ疑問を覚えなくなり、戦いの興奮が快感に変わった。

今のお茶子はヒーロー候補生ではなく、戦士だ。

それも狂戦士。

そして。

何度目かの試合で。

開いたゲートの先に待っていたのが緑谷出久であることに気付いた瞬間、お茶子を満たしたのは「好きな人と殺しあえる喜び」だった。唇が歪む。

心底からの高揚に身を任せながら、お茶子は今の自分にできる形で「元の自分の望み」を果たすことを決める。

「久しぶり、デクくん。元気やった?」

浮かべた笑顔には一片の嘘も存在しなかった。



「お茶子さん。無事だったのか」

「心配してくれてたんだ。嬉しい」

甘い声——大人びた、色気のある声を聞き流して、出久は答えた。

「とつくにリタイアしたと思ってた」

「ふうん、言うやん。無個性のくせに」

「っ」

挑発的な台詞に怒りが湧き上がる。

「そう言っ僕を侮った奴が何人も病院送りになった。中には死んだ奴もいるかもしれない」

「それで?」

「わからないか? 君もそうなるって言ってるんだ」

「死にたくなければ棄権しろってこと?」

お茶子らしくない言葉だ。

出久は、自分と同じくお茶子もまた厳しい『実験』を乗り越えてきたのだと悟る。心優しい彼女が嫌味と皮肉にまみれた言葉を吐き、戦いの前の興奮で頬を紅潮させている。今、目の前にいるのは『ウラビティ』——麗日お茶子ではなく『被験体No. 021』なのだ。

いいじゃないか。

これ以上なくわかりやすい。

「死にたくないならそうすればいい。これが最後のチャンスだ。僕としては、君にも経験値になって欲しいんだけど」

「吠えんといて。殺すよ?」

本気の殺気が来る。

確信する。彼女は強い。これまでで最強の相手だ。死の恐怖からではなく、肥大した自尊心のためだけでもなく、ただ戦いを楽しみながら相手を殺せる輩だ。

「良かった。まだ甘いことを言っていたらどうしようかと思った」

愛だの正義だの、そんな言葉はもう聞き飽きた。

「言わへんよ。勝てばいいんやから。言葉はもういらん。ただね、一つだけ」

「?」

「ご主人様達にお願いしたんよ。私が勝ったらデクくんをくださいって。だから、殺してでも勝つ」

「ははっ。本末転倒な気がするけど」

「永遠ちゃんに殺されるくらいなら私が殺す。単純やん」

言いたいことは本当にそれで終わったらしい。

黙ったお茶子を見て、出久はぞくぞくするのを感じた。

「そっか。じゃあ——戦<sup>や</sup>ろうか」

「うん」

二人は短く笑いあって、同時に床を蹴った。



八割以上の確率で『No. 021』——麗日お茶子が勝利する、というのが研究者達の予測だった。

二人は共に雄英出身。

クラスまで同じだったとあって、技術や経験に大きな差はない。むしろ『No. 020』——緑谷出久は保有していた“個性”を喪失した分、研鑽の多くを無駄にしている。

加えて“個性”自体の有無。

男女の差も、実験によって強化を施された今となっては些細なもの。



故に当然の結論、だったのだが。

「これは、面白いことになったな」

「ええ。No. 020のパフォーマンスが上昇しています。戦いの中で、急速に」

「No. 021も成長していますが、速度はNo. 020が勝っています」

「戦いの中で成長する、か。まるでコミックの主人公だな」

研究主任は笑って、透明な窓の向こうにいる二人を眺めた。

戦いの序盤はお茶子が出久をリードした。

開幕、出久へ向けて突っ込んだ彼女は高速のジャブを繰り出した。

出久はこれをかわし、重いストレートを放つ。通常なら致命打になりかねないカウンターだが、ここで『無重力』が発動。

浮き上がるように高く跳躍したお茶子は瞬時に「個性」を解き、出久の顎を蹴りつけた。

フロートイングアーツ  
浮遊殺法。

『無重力』状態と通常状態を小刻みに使い分けることによる三次元戦闘。一番の利点は周囲に「浮かせられるもの」が存在しない状態でも問題ないこと。

むしろ、地の利がどちらにも味方しない分、この能力の存在が大きい。

が、出久もまた果敢に攻めていく。

これが雄英内での模擬戦であれば『無重力』で浮かされた時点で敗北だが、この試合にそんなルールはない。決着の条件は相手を戦闘不能にするか屈服させること。

たとえ浮かされても「負けてない」と言い張れば戦闘は続行される。自分で移動ができなくなってもカウンターは可能なわけで、お茶子も迂闊に『無重力』は使えない。

よって、殴りや蹴りを着実に積み重ねる。

「あはははっ！ デクくん、さっきまでの威勢はどこに行ったの!？」  
「……いいさ。そうやって得意になって、手の内を晒せ」

「!?」

戦闘に使える選択肢ではお茶子が圧倒している。

にもかかわらず、次第に出久へヒットする攻撃が減っていく。パターンが読まれているのだ。もちろん言うは易しのだが——出久はこの研究所で練り広げられた戦いの中で観察眼を磨いていた。そして、これまで不足していた冷静さや容赦のなさが加わったことで、独自の戦闘スタイルを確立した。

身体が動くうちに相手を戦術を読みつくし、打倒する。

拳、蹴り、関節に投げといった接近戦を総なめするストロングスタイルの上で駆使される戦闘論理は決して無視できるものではない。

読みを外そうとして無理に戦法を変えようとすればその分、隙が生まれる。出久はそこを突くことも当然ながら躊躇わない。

「っ、面白いやんっ!」

当然、お茶子とてただではやられない。

戦いの中で浮遊殺法を更に洗練させ、読めていても避けられない攻撃や絶え間のないラッシュ、更には新たな攻撃。パターンの開拓まで行ってなおも攻め立てるが、出久はそんなお茶子の成長さえもデータとして組み込み、自身の参考として戦術を更新していく。

お茶子優勢だった戦況がやがて五分になり、そして、

「ぐ、あああああっ!」

お茶子が吠えた。

時を追うごとに被弾が増えていく中、敢えて浮遊殺法を捨てる。正面から少年と拳をぶつかり合わせ、鋭い一撃をギリギリでかいくぐり、逆に攻撃を浴びせようとする。

「そうだ、諦めるなお茶子さん! 僕にも着実にダメージは入ってる! これは根競べだ! どっちが先に諦めるか、どっちが先に考えるのを止めるか!」

「あ、あははっ! あはははっ! 楽しいねデクくん、殺し合いって!」

「ああ、ずっと、やっていたいくらいだっ!!」

彼らは戦いながら愛し合っていた。

肉と肉がぶつかり合い、汗が弾け、時には血を流して。

羞恥をかなぐり捨てた生の声を上げて交わり、離れ、また交わる。永遠に続くのではないかと思えるほどの死闘。

終わりは、突然にやってきた。

「あ、は——」

笑いながら、ぷつん、と糸が切れたようにお茶子が倒れこむ。

予想外の動きに拳を空振りさせた出久はかろうじて踏みとどまると、仰向けに倒れたお茶子が本当に動けないことを確認すると、その腹を残る力で踏みつけにした。

「楽しかったよ、お茶子さん。……だけど、これでさよならだ」

麗日お茶子は全身ボロボロの状態で医療ブースに運ばれ、なんとか一命を取り留めたものの、全治二か月と診断された。

## 11. 死闘

【反乱から72日後】

決戦の時は、唐突にやってきた。

私はいつものように無作為にワープしながら“個性”を回収して回っていた。都内の繁華街で数人から回収し、次の場所へ移動しようかと思った、その時。

横手から猛烈な殺気が発生。

何が起こったのか思考している暇はない。反射的に振り返りながら防御行動を取る。と、正面を向いた直後には拳打がクロスした腕に突き刺さっていた。

枯れ枝のように折れ、ちぎれ飛ぶ両腕。

激突の衝撃は収まらずに胸を打ち、ろつ骨を何本かへし折りながら私の身体を吹き飛ばした。背後にあったビルに激突、窓ガラスを割ってオフィスの中へ突入し、壁に激突してようやく止まる。

——このご時世にこの威力の攻撃、か。

腕を再生させながら床に降り立った私は、超高速で飛び込んで来た刺客の攻撃を右手で受け止めると、左手を振るって彼を殴り飛ばした。

吹き飛ばされた少年はうまく衝撃を吸収したのか、ビルの外まで飛ばされた後で地面に着地、滑るようにして停止した。

周りの一般人は。

気になって見渡せば、宙を飛び交う羽根が一人残らず回収して安全な場所へと移動させている。

「デクくんはホークスかあ」

呟いて、私は『透明』を解除。

黒い布を作り、マントに変換して纏うと、ビルの外に出た。

「どうして居場所がわかったの？」

「赤外線だよ」

答えたのは少年の方だった。

久しぶりに会うデクくんはだいぶ変わっていた。全身が見るから

に筋肉質になり、身長も少し伸びた。そして何より表情が違う。少し間の抜けた穏やかな表情も、使命を宿した真つすぐな表情もそこにはなく、戦いの喜びに燃える狂気と暗い憎悪がある。

身に着けているのはダーク色のインナーに、重厚な装甲と内部の精密機械で構成されたプロテクター——ううん、超高性能かつ軽量型のパワードスーツ。

顔もマスクで覆われていて、私に『透視』の「個性」が無ければ表情までは見えなかった。

「透明になつていても熱を発していないわけじゃない。赤外線カメラで見れば『そこに見えない誰かがいる』ってわかる」  
「なるほどね」

後は決め打ちか。

都内で襲われたのは、彼らが都内で待ち構えていたからだ。

近くにある監視カメラ、妙に新しいと思つたら、赤外線機能のある新型だったのだろう。私対策のためだけに設置したのだとしたら物凄くお金の無駄だ。

「それで、ホークスは何の用？」

近くのビルの上からこちらを見下ろす青年に声をかける。

「僕は見届け役っスよ。彼はまだ仮免生なもので」

「そっか、プロヒーローが傍についてないとヒーロー活動できないんだ」

ふっ、と、思わず鼻で笑ってしまう。

「ヒーローとしてこの場に立つてもいない癖に」

「君に、何がわかる」

「わかるよ。私だってヒーローだったんだから。今のデクくんは正義のためなんかには動いてない。ここに来た目的は何？」

「決まつてる。君を殺してオールマイトの仇を取る」  
殺す。

デクくんは迷わずにそう言い切った。

ほら、やっぱり。

「ヒーローはギリギリの一瞬まで『敵を殺さないこと』を考えないとい

けないんだよ?」

「そんなことはどうでもいい。君は止める。ここで、殺す」

説得は無理そうだ。

まさか、あんなにヒーローに憧れていたデクくんがこんな復讐鬼になつてしまうなんて。

当然か。

クラスメートが最凶の敵になった挙句、O F Aワン・フォー・オールを奪われ、オールマイトまで死んでしまったんだから。

じゃあ、

「これでも、戦いを止める気はない?」

ホークスを手元に『転送』し、瞬時に『剛翼』を奪取。軽く首元に手刀を入れて気絶させる。

「これで監督役のヒーローはいなくなったよ。仮免生には活動する資格がないけど……」

「そんなことはどうでもいいと言った」

「そう」

私は『ワープゲート』を起動して、自分とデクくんを別の場所に転送させる。

「じゃあ、せめて場所を変えよっか」



移動した先は雄英のスタジアム。

今日は特にイベントも開かれていないので、当然誰もいない。降り立った瞬間に警報が起動したけど、それこそ、そんなことはどうでもいい。

「さ。ここならそこそこ暴れられると——」

「狭いな」

底冷えする声が響いた直後、デクくんがこちらへ超高速で接近。

地面を蹴った上にスラストスターを噴射して急加速したのだ、と、理解するのもつかの間、パワードスーツを纏った剛腕が唸る。

迎撃。

右拳同士が激突。ひしやげたのは、強度的に劣る私の身体の方だった。

『衝撃反転』は効かないか」

「このスーツの打撃は全てダブルインパクト構造になってる」

打撃の衝撃を一波と二波に分けることで、一波を反転されても本命の二波が生きているという仕組みだ。

と、会話をしながらも私達の動きは止まっていない。

今度は左腕が激突。『衝撃反転』に加えて『ショック吸収』を起動したことで外的な損傷は発生しなくなったもの——。

「防御を硬くしようと、競り負けていることに変わりはない」

続いて右足の蹴り上げ。

私は全身から冷気を放出してパワードスーツごとデクくんを氷漬けにしようとして、

「馬鹿に——」

「しているのはどっちだ」

凍らない!?

熱か！ スーツが発した熱気で冷却に耐性を付けてる！ 逆に熱したとしても表面が防燃加工されているうえ、中の冷却機構が熱暴走を抑えるだろう。

やむなく腕でガード。食らい、空中に跳ね上げられる。

スラスターにより姿勢制御されているデクくんはすぐさま私を追いかけ、追い越して、両手を組むとハンマーのように叩きつけてきた。

「ぐうっ!?!」

地面に落とされ、衝撃と轟音。

激突に耐えきれなかった地面に罅が入るのを感じながら、私はすぐさま立ち上がった。

迫りくるパワードスーツに向けて左右の腕で『空気を押し出す』。

「無駄だ」

「っあああああああーっ!?!」

軽く手を振るうだけで空気塊が無効化され、後ろに飛んでもすぐさま

ま追尾され、そのままタツクル。

吹き飛ばされた私は観客席の下、壁まで飛ばされて激突した。  
痛い。

これだけの痛手を受けたのは久しぶりだ。

「こんなものか、『エターナルクイーン』」

追撃は、来なかった。

代わりに失望したような声。

「こんなものか、OFAは。肉体強化と人工個性。ワンオフのパワー  
ドスーツ。その程度で、こうも一方的になるっていうのか！」

怒りの声。

「そうじゃないだろ！　OFAは、平和の象徴の『個性』は、そんなに  
弱くない！　使いこなせないんだとしたら、お前はOFAには相応し  
くない！」

「そうだね」

私は地面に降りて答える。

「デクくんは正しいよ。本当のOFAはこんなものじゃない。だって  
私——まだOFAを使ってもいないんだから」

「な、に……!?!」

『OFA』『空気を押し出す』以下省略」

私が腕を振るうと同時、暴風が生まれた。

地面の土を削ぎ、巻き上げながら、物凄い質量と勢いをもって殺到  
する風。それを見たデクくんは地面をしっかりと踏みしめると両腕を  
突き出して、

「オオオオオオオオツツ!!」

直撃の瞬間、大気を裂いた。

猛烈な腕の振り。それだけのことで裂かれた暴風は散らされ、吹き  
過ぎ、風いで、元の静かな空気へと戻っていく。

『転送』『OFA』

ほっと息を吐く少年を眼前に呼び寄せ、無造作に腹を蹴りつける。  
パワードスーツの腹部分が軋むような音を立て、デクくんが冗談の  
ように吹き飛んでいく。なんというか、ヒロアカじゃなくてサイヤ人



同士の戦いみたいだけど。

吹き飛んだデクくんが体勢を立て直すのを待たずに連続して指を弾く。大気の指弾が少年の纏うパウードスーツを殴打。砕くようなことはできないものの体勢を更に崩していく。

『ヘルフレイム』『蒼炎』——プロミネンスバーン」

本家であるエンデヴァアの二倍近い熱量が直撃。

いくら熱に強いと言っても、一度に受けられる許容量は存在するはず。冷却が追いつかなくなれば精密機器は当然、支障をきたす。

『剛翼』

ありつたけの羽根を動けないままの少年に叩きつけ、遂に打ち倒した。

どう、と倒れるデクくん。

「ねえ、デクくん。逆に聞くよ。それで終わり？」

「――」

「だったら私こそ失望だよ。私にはOFAがあるんだよ？ 確かに今のデクくんは強いよ。全盛期のオールマイトと同じか、それ以上だと思う。でも、その程度で勝てるわけないでしょ？ ふざけないでよ。馬鹿にしてるのはどっちなの？ 本気で私を殺す気があるんなら、殴つてないでブラックホールでも持つてくればいいでしょ？」

デクくんは答えない。

まさか、あの程度で死んでしまったわけがない。

『サーチ』等、複数の『個性』で強化された私の感覚は少年が生きていることを察知している。というか、デクくんはまだ、動くのに支障が出る程のダメージを受けていない。

彼が持っている『個性』は『身体能力全強化』『感覚超強化』『追跡』『痛覚遮断』。どれも短時間しか持たない使い捨てらしい。しかも、複数所持に対応させるのと効果を出来るかぎり上げるために所有者の寿命を大幅に削るようなデメリットまである。

どうせ消えるなら奪う必要もない。

「せっかくチャンスをあげたのに」

傲りとか希望的観測とか全部抜きにして考えてみればいい。

『OFA』『AFO』『不老不死』を持ち、更に無数の“個性”を有する相手にたった一人で、付け焼刃の人工個性なんかで勝てるわけがない。

私がOFAを使っていない間に、不意打ち一発で決められれば、まだ可能性はあっただろうに。

「ねえ、答えてよデクくん。これで終わり?」「いいや」

答えた少年は、ゆっくりと起き上がった。

彼の眼の光は死んでいない。

どころか、何かを狙っているように輝いている。

「そろそろ効いてくると思うんだけど」

「なにを、言つて——っ!?!」

悪寒が、走った。

何か良くないものが体内に生まれている。『それ』はみるみるうちに増殖して私の全身を蝕み、身体の機能を狂わせていく。

熱い。寒い。痒い。痛い。苦しい。

手足の感覚が、なくなっていく。

「あ」

どざりと倒れる。

「個性、破壊弾?」

「違うさ。そんなつまらないものじゃない。それは、科学の力が作り出した最強の毒。打ち込まれた直後は無害な成分を装いながら爆発的に進化を続け、存在が発覚した時には取り返しのつかない致死性を発揮する。しかも、そうやってなお秒単位で変異を繰り返すため、どんな解毒剤もワクチンも効果がない」

毒?

私に、不老不死に、毒?

今更、そんなもので?

「せっかくのチャンス、か。ああ、ちゃんと生かしたよ。最初の一撃で、それをちゃんと仕込んでおいた。君を確実に殺すために」

「な、あ」

デクくんがゆっくりと近づいてきて、倒れた私を踏みつけにする。  
「があっ!?!」

「安心していいよ。すぐには死なない。君の『不老不死』ならその毒にも耐えるだろう。耐えて耐えて、でも中和しきれなくて——エネルギーを使いつくすまで苦しみ続ける」

「あつ、がつ……」

「エネルギーがないと蘇生はできない、だったよね？　そして、スペアボディがある以上、本体はそっちに移行する。OFAもAFOも消滅して、二度と戻ってこない」

なんて、悪辣。

息が続かない。私は最後の気力を振り絞って大きく息を吸い込み、  
「っ、ははっ、あはははははっ!!」

「何がおかしい!?!　死ぬのが怖くなったのか!?!」  
「ううん」

私は『槍骨』を起動。

右手の爪を細長い槍に変えて伸ばし、パワードスーツの隙間からデクくん突き刺す。そして、

『巻き戻し』『効果転送』

デクくんに及ぼした『巻き戻し』の効果を私に転送。

身体の時点を分単位で戻して、

「あ——!?!」

「OFA——100%」

スマッシュ、などと誇示する必要はない。

パワードスーツの足を跳ねのけ、跳び上がるようにして立ち上がると、軽く地を蹴って懐に飛び込む。

咄嗟にクロスされた腕の上から右拳を突き刺し、スタジアムの観客席さえも破壊して、外まで吹き飛ばした。

『全知の魔』

パージされたパワードスーツが飛来するのを察知、そのままだと自爆するという未来予測に従って風で迎撃。さっきの一撃でガタが来ていたスーツは今度こそぐしゃりと潰れ、用を為さなくなった。

そして。

なおも収まらない粉塵の向こうから猛スピードでこつちに飛び込んできたインナー姿のデクくんを、私は正面から受け止める。

「パワードスーツは補助であり拘束具だ！ 身体へのダメージを考えなければ、生身の方が！」

並の敵なら一撃で即死してもおかしくない攻撃のラッシュが、今、ここに開始された。

## 12. 略奪者と落第継承者

速い!

私はデクくんの勢いに驚愕した。

更なる隠し玉。

強力な装備が実はリミッターだった、って設定は割とあるけど、膨大なお金をつぎ込んだ近未来パワードスーツが筋肉に負けるのは正直どうなんだろう。

まあ、それはともかく。

温存していた『認識阻害』の“個性”を起動。

私の気配を抹消し、周りの人間に存在を認識されなくする。石ころぼうし、と言えはわかりやすいだろうか。

ただし欠点もあって、機械などの無生物には効かない。

パワードスーツにもリーダーやカメラが搭載されていたはずなので、このタイミングまで待った。

デクくんは瞳に映る私の姿に気づけなくなる。

——それでも、少年の右拳は真つすぐ突き出された。

手のひらで受け止めれば、デクくんは拘ることなく即座に反転。私から距離を取る。

『追跡』の“個性”だね」

「ああ。指定した一人の位置を追い続けられる」

効果自体は『サーチ』の劣化版だ。

でも、それなら認識阻害状態でも戦える。“個性”が示す位置に迷わず攻撃を叩きこめばいい。部位狙いはできないけど、身体のどこかには当たる。

最後まで戦えないこと、私に逃げられることだけは避けようとちやんと用意してきたらしい。

でも。

「それで?」

私は淡々と尋ねる。

「さっきの一撃でわかったんじゃない? デクくんの攻撃じゃ、私に

は届かない」

『超耐久力』『衝撃反転』『ショック吸収』『筋繊維強化』『骨格強化』『エアークツション』エトセトラ——持てる個性をたっぷりつき込んだ結果、私の防御力は非常識なレベルに達している。

ぶっちゃけ、ワン・フォー・オール O F Aの100%程度じゃ痛くも痒くもない。

これには、デクくんも頷いて、

「ああ、良くわかった。だから、これを使う」

彼は左手に握っていたアンプルのようなものを首筋に突き刺し、注入を開始。

中身は、おそらく人工個性。

パワードスーツに収納されていたものを、パージの前に回収していたんだろう。

人体に宿っていない個性は『サーチ』できない。

私の認識をズラすための、策。

「ぐ、ああああああああつ!!」

絶叫。

狂気としか言いようのない叫びを上げたデクくんは、直後、きつ、と、動物的な殺意を込めた視線を私に向け——音速に近い速度で迫ってきた。



『夜』！』

スタジアム全域を覆うように闇が降りる。

私を『追跡』で追っているデクくんだけど、周りの状況や足場の状態は視覚で把握している。だから動きが一瞬、鈍る。

本当に一瞬だけど、それで十分。

——『跳躍力強化』『浮遊』『剛翼』。

地面を蹴った私は空へ急上昇。

少年も迷いなく跳躍して追いかけてくる。

——『武器作成』。

未知の物質でできた薄いプロテクターで身体を覆い、

『黒鞭』！』

エネルギーでできた触手を無数に生み出した。

触手達はデクくんを殺到。

端からただの体当たりで押し負け、引きちぎられていく。

「おおおおおおおっ!!」

さすがにこれだけじゃ止められない、か。

「でも、想定内！」

渾身の左ストレートを、同じく左ストレートで迎撃。

ぐしゃ、と。

瞬時に砕け散る左腕はデクくんのもの。

でも、少年は一瞬たりとも執着しなかった。

むしろ、胴体に衝撃が伝わらないよう巧みに身体を捻り、勢いを右

手に乗せると、握っていたその拳を開いた。

五指が迫ってくる。

単に殴りつけるのが目的じゃない。

何か裏があるに決まっている。

分かっているなお、私は右手で単に受け止めた。

「えっ？」

呆然とした声。

ぽかんと、間の抜けた表情で、デクくんがお互いの右手を見つめる。

『崩壊』。

触れたものを問答無用で破壊する「個性」が効果を及ぼさないこ

とが不思議らしい。

最後の切り札がこれ、か。

あれは比較的早い段階で手に入れたから、ドクターが診察の際に無断採取でもしてたんだろう。それをどこかの研究者が複製、改造して、触れた部分から連鎖的に崩壊するように仕上げた。

確かに『崩壊』は怖い。

最初は持つてなくて、途中で獲得する作戦も良かった。拳で来ると思わせてからの掌底も意表をついていた。普通の相手なら通用した

と思う。

でも、甘い。

新しく獲得した「個性」も『サーチ』すればいいだけの話。実際、私はそうした。

なんなら心を読んだって良かった。そこまではしなかったけど。

というか、

ワン・フォー・オール  
「O F Aに眠ってる「個性」。全部は知らなかったんだ？」

私の右手には「個性」が効かない。

知らなかったらしい、第九代目継承者は、目を見開いて、

「先代達の「個性」だと……!?!」

「うん。借りてるよ。ちゃんと本人達から許可を得て、ね」

「な、え、あ。ああ、あああ……っ!?!」

萎えちゃった、か。

愕然とする少年を見て、私は息を吐いた。

「遊びはもういいよね」

『抹消』をオン。

デクくんの「個性」を全て無効化したうえ、左手で彼に触れて『巻き戻し』を起動。彼の肉体年齢を二か月前に戻した。

死に物狂いで鍛えた二か月はこれで、消えた。

もともと、頼るべきじゃない力だったんだ。

「――あ」

落ちていく。

デクくんは落ちて、落ちて、どさつ、と、受け身も取らずに地面に到達した。

「なんで、だよ」

悲痛な声が空気を震わせる。

「なんで、お前みたいなのがヒーローより強いんだよっ!!」

「ヒーローの強さは「個性」でも腕力でもない。最後まで諦めない強さ。それがヒーローの一番の強さだよ」





日本中が。

世界中が、その戦いを見ていた。

永遠は一度も口にしなかったが——彼らの戦いは最初の激突の直後から全て中継されていた。「個性」によって作り出した不可視の使い魔に一部始終を監視させ、その情景を電波として流した。たったそれだけのこと。今や十万を超える「個性」を持つ永遠にはそのくらい造作もない。

普段は砂嵐しか流れないchであったが故に最初は気づかない者も多かったが、気づいた者がネットに流し、やがて大手テレビ局も気づいて「他chの放送内容をそのまま中継する」という前代未聞の行動に出た。

だから、彼らは全てを見ていた。

デクが永遠を不意打ちするところを。

三万、否、十万以上の犠牲が出ることを厭わず「永遠を殺す」と言い切ったところを。

気絶したホークスを無視して戦闘を続行したところを。

永遠を殺すために毒物を使用したところを。

倒れた永遠を踏みつけたところを。

永遠がヒーローの在り方を説いたところを。

街の被害を避けて移動したところを。

毒物による死を避けて、間接的に人々を守ったところを。

自身を殺そうとする少年を殺さずに止めたところを。

——地面に落ち、ボロボロになったデクがもう一度立ち上がり、パワードスーツの残骸から新しいアンブルを取り出すのを。

元の身体では人工個性に耐えきれないのを承知で注入、最後の一撃に打って出るのを。

瞬間。

世界には少年を非難する『声』が満ちた。

『ふざけんなよこのガキ、何やってんだ』

『オールライトは女王の作業じゃないって結論出ただろ』

『殺すじゃねえよお前が死ぬこのアホ』

『女王、もういいからこいつ殺せよ』

『え、この子雄英の生徒なの？ マジ信じらんないんだけど』

『引っ込め』

『要らない』

無数の声は実体となって現れ、濁流と化して少年を飲み込んだ。

B組所属、吹出漫我の『コミック』に類似する“個性”の効果。

威力は出久を罵る声の量に比例する。

つまり、出久が受けているのは傍観者——『何の罪もない一般人』の本音だ。

「お前らは、お前らはいいいよな！ そうやって好き勝手なことを言いながら『守られてれば』いいんだから！」

『崩壊』で、あるいは強化された筋力で声を蹴散らしながら、出久が叫ぶ。

しかし、当然、人々がそれを素直に受け止めるはずがない。

彼らにとつて出久は叩いてもいい対象——敵に等しい存在である。法的にも仮免の範囲を超えている以上、実際に敵であると言っている。いい。

今、世界においては既に出久こそが悪なのだ。

「ふぎ、けるな……っ！」

なおも叫びながら、出久は力を使い果たして倒れ伏す。

倒れた少年を『声』はなおも打ち続けた。

「これじゃ、オールマイトは、何のために死んだんだよ……っ!?!」



「オールマイトの死に意味なんてないよ」

私は、デクくんの傍に降り立って告げた。

『声』はもう消してある。

少年は腕一本さえ動かす気力もない——どころか、骨が無事かどうかさえ怪しい状態でなお、私を睨みつけてくる。

「なん、だよそれ……っ!？」

「無駄死にだつて言ってるの。彼は自分の生き方を変えられなかった。意地になって『使命』にしがみついただけ。……というかそもそも、人の死に意味を与えるのは『残された者』だと思っ」

意味があるから動くんじゃない。

残された者の動いた結果が、人の死に意味を与える。

「A.F.Oを滅ぼすのがO.F.A継承者の役目。なら、どうしてA.F.Oが悪なのか、もう一度考えてみない？」

人の「個性」を奪ったからか。

悪人に「個性」を与えたからか。

世に混乱を齎したからか。

あらゆる行為の先に、ただ個人的な欲望が在ったからか。

「……考えたって結論は変わらない。お前は、悪だ」

「そうだね」

私だつて「世界から「個性」を消したい」っていう個人的な願いで動いている。

自分のために世を騒がせているんだから、やっていることはオール・フォー・ワンと大差ない。

でも。

「少なくとも、A.F.OとO.F.Aの戦いは私が終わらせる」

「——っ」

「それだけじゃない。「個性」が世界を脅かす可能性は全部私が潰す。そうすれば、「個性」が世の中を混乱させることだけは絶対になくなる」

「個性」が無くなっても争いはなくならない。

「個性」がナイフや銃、拳に取って代わるだけなのはわかってる。

でも、武器は誰でも手に入れられる。

才能の差こそあれ、身体を鍛えることは誰にでもできる。

費用対効果も確実に下がる。

今だつて、核を打たればあらゆるヒーローが死ぬ。なら。

「作らなければ絶対に産まれない兵器と今この瞬間にも産まれるかもしれない最悪の個性どっちが怖い？」

「詭弁、だ」

デクくんはそれでも否定する。

「人はそんなに弱くない。『個性』を悪用する敵がいれば、必ずヒーローがやっつける」

「現状で、私を誰も止められてないのには？」

「っ」

「『個性』の暴走で死ぬ人がいるのには？ 殺される人がいるのには？」

「ヒーローがやっつける？ どうやって？ 私は、助けてもらえなかった人がいたのを知ってるよ？」

「でも、お前だってオールマイトを殺した！」

「殺してない」

私は『取り寄せ』の『個性』を使って適当な新聞を手にする。

『オールマイトの殺害、米国が関与していた』

一面にはショッキングな見出しが躍っている。

「アメリカを背負ったような最高のヒーローが日本にいる、っていうのがずつと許せなかったみたい。こっそり敵を扇動して殺させたんだって」

「嘘、だ」

「デクくんが『結果的に私が殺したようなもの』って言いたいのはおわかってるよ。でも私は、私達は本当に直接手を下してなんかいない。それだけはわかって欲しい」

「……………」

きつと、彼にはこのことは知らされていないなかっただろう。

意図的に伏せたまま実験や訓練に参加させられていたっぽいのは、『巻き戻し』と一緒に施した『寄生』で記憶から読み取れる。

ちなみに米国の関与を突き止めたのは私達だけ——言っても自慢になるだけだから言わない。

もし、オールマイトが殺されず、私に辿りついていたら、その時は殺していたかもしれないけど、そのことも言わない。

「それでも、憎しみは消えない？」

「消えるわけ、ないだろ」

「……そうだね。私はあなたから奪った。『個性』を。あなたがヒーローになる希望を」

持たざる者だった彼は最高のヒーローから力を受け継いだ。

どん底にいた者は夢を見て、またどん底に落ちた。

恨まれるのは仕方ない。

「OFAを先に回収したのは邪魔だったから。それも否定しない。でも、早いか遅いかの違いだよ。世界から全部の『個性』を消すんだから」

「でも、そうしたら、僕は一生ヒーローになれない」

「人を救いたいなら警察になればいいじゃない。どうして、ヒーローじゃないといけないの？」

デクくんは一瞬、黙ってから答えた。

「僕は、まだ何もできていない！」

「……………」

「なにもしていない！ オールマイトから受け継いだのに、何もできなかった！ 本当は、僕がやらなきゃいけないかった！ 戦いに行くオールマイトを止めれば良かった！ 僕も連れてってください、つて、言えばよかった！」

「……………」

「お茶子さんに、あんなことするべきじゃなかったんだ！」

お茶子ちゃんは地下施設で治療中らしい。

全治二か月。

酷い洗脳を受けた末にデクくと「殺しあった」ことを私はデクくんの記憶から知った。

「研究施設は私が潰す」

「っ。どう、やって？」

『箱の中の猫』  
『シュレディンガー』

周囲の「ありえるかもしれないという認識」を「現実」に変える力。無数の『個性』を持つている私は、多くの人にとって「どこまでで

きるのかわからない存在」。なので、それを利用して無から個性を生み出せる。

「思い出の中の風景の座標情報を知る『個性』。まあ、大した力じゃないよね」

これで『ワープゲート』で転移できる。

「研究成果はともかく、研究者達の所業は全部公開する。二度とこんなことが繰り返されないように」

「永遠、さん。君は」

「デクくんは、どうする？」

お姉ちゃんには「殺す」と宣言した。

私の邪魔をした以上、殺すべきなのもわかっている。

それでも。

元クラスメートを、主人公を殺すのを躊躇ってしまう。

少年は、ほんの一瞬だけ迷ってから答えた。

「殺してくれ」

「わかった」

私は右手を差し伸べてデクくんの頭を掴み——『巻き戻し』を起動、彼の肉体年齢を雄英入学前、中三の一学期頃まで戻した。

「面倒臭いから、死ぬなら勝手に死んで」

「っ！」

飛びかかってきたデクくんを適当な『個性』で眠らせて、私は溜め息をついた。

「今更人殺しを躊躇うとか、なんなんだろうね、私」

そこに。

一つの足音がゆっくりと、私に向けて近づいてきた。

### 13. 転換

現れたのは、明らかに睡眠が足りていないだろう顔をした痩せ型の男だった。

「相澤先生……」

「お前に先生と呼ばれるいわれはない」

「そう、ですね」

私は頷いて、世間の言う『女王』としての態度を取る。

「イレイザー・ヘッド。あなた一人ですか？ てつきり大挙して押し寄せてくるかと思いましたが」

「警察はもうすぐ到着する。必要なら雄英教師が総出で相手をする  
が」

「いいえ。面倒になる前に逃げますし」

「だろうな——っ」

相澤先生——イレイザーは何の前置きもなく両手から捕縛布を伸ばしてきた。

『槍骨』

身体をぐるぐる巻きにしてくるそれを爪の槍で引き裂くと、その間にもう一方の捕縛布がデクくんを捕らえていた。

最初からそつちが主目的だったんだろう。

「こいつは警察に引き渡すぞ」

「どうぞ。彼にはもう用はありません」

「そうか」

頷いたイレイザーはデクくんの身体を捕縛布ごと引き寄せた。

「デクくん、どうなると思いますか？」

「……さあな。司法が正常に機能していれば、情状酌量の余地はあるだろうが」

彼がビルを破壊したのはホークスの監督下にあった時のこと。

「個性」を使って交戦した相手は敵であり、結果的には誰も殺していない。  
いない。

言動に問題こそあれ、年齢を考えれば更生の余地は十分ある。

まあ、雄英は退学になっちゃうだろうけど。

「この国を掌握する気はないということか？」

「ありませんよ、そんなの。自分より圧倒的に強い存在が支配する国とか息苦しくて嫌じゃないですか」

「永遠の女王が小市民みたいなことを」

「小市民ですよ、私は」

私も相澤先生も、ヒーローと敵というスタンスを崩さないまま会話する。

それでも、ノリはどこか昔の、教師と生徒だった頃のままたま気がした。

「スタジアムの修理代金は後でどうにかして送りますね」

「敵に弁償されるのも妙な話だが、もらえるものはもらっておく。来年分の生徒募集はなくなったから急がなくてもいいぞ」

ああ、二年生と三年生しかいないからスタジアム一つ余るんだ。

「長い雄英の歴史がストップしちやいますね」

「前代未聞の事態だからな」

あらためて、私のしたこと重さを思い知る。

「じゃあ行きますけど、いいんですね？ 私を捕まえなくて」

「捕まえようにも方法がない。むしろ雄英教師としては、生徒に被害を与えず帰ってくれるならそうして欲しい」

「わかりました。それじゃあ、お元気で」

パトカーの音が近づいてきたのを感じながら、私は『ワープゲート』でその場から去った。



研究施設内に侵入した途端、警報が鳴り響いた。

前後の隔壁が降り、毒ガスが散布される。結構毒性の強いものだったのか、私は何度か咳き込み、耐性を獲得してほっと息を吐く。

『透視』『超視覚』『建築物探査』

お茶子ちゃんの病室は、そこか。



『ワープゲート』だと毒ガスまで運びかねないので『転送』で跳ぶ。つていうか、最初からそつちで跳べば良かったか。

「失敗した……つて！」

連中は果たして正気なのか、病室にまで毒ガスが撒かれ始めた。

手の内を先に確認できた分、ワンクツション置いたのは結果的に正解か。私は装置に繋がれたお茶子ちゃんを『巻き戻し』で二か月分くらい前に戻した後、彼女を素早く抱き上げて、

『全知の魔』『O F A』！』

さつき確認した施設の構造と合わせて力の通り方を考慮しつつ、自分達に被害が及ばないように、超パワーで天井をぶち抜く。

轟音と振動と共に大穴が開いて地上まで繋がる。

風圧で毒ガスも吹き飛ばしたので、この際にお茶子ちゃんを『転送』。A組の寮のロビーに送った。

「やっし」

私は研究所の中枢部に転移すると、告げた。

「外道ども、覚悟はできてる？」

阿鼻叫喚になった。

一応、殺しはしなかつたので安心して欲しい。



「あー、もう。疲れたー」

アジトに戻った私は自分用のベッドにぐでー、つと突っ伏した。

エネルギーが十分なら徹夜余裕なのが私の身体だけど、精神的には疲れるのだ。そこを完全無視してしまうと価値観が完全に人から離れていくので、最後の手段にしている。

「お疲れ様でした、永遠」

「やったね永遠ちゃん！ 大勝利だよ！」

優しい笑みを浮かべたお姉ちゃんが労ってくれて、透ちゃんがベッドにダイブして抱きついてくる。

「二人ともちよつとテンション高くない？」

「永遠ちゃんがあの子を生かしたからですよ。私は殺しても良かったと思うんですけど」

「うん……まあ、一応クラスメイトだしね。あ、ありがとトガちゃん」  
答えながら、差し込まれたスティック状のチョコレートを食べると  
啜える。

甘くて美味しい。

「お菓子とご飯だけ食べてごろごろしていたい……」

「実際、少しのんびりしてはいかがです？ そろそろ『準備』も整った  
でしょう？」

「そうだね。いいデモンストレーションもできたし」

現実的な実現方法について「寄生による情報網の強化」「協力者の増加」を挙げてきた私だけど、それ以外の策を考えていなかったわけじゃない。

ここまでの行動は「もつと手っ取り早い策」のための準備だったと言っている。

もちろん、いざとなったら一人ずつ奪ってでも達成させるつもりだったけど。

と、百ちゃんが嘆息して、

「というか、しばらく手が足りなくなりそうなのですわ」

「ああ。情報拡散の方？」

「ええ。永遠がある程度精査してくださるとはいえ、要約と整形は必要です。多重投稿となるとそれなりの手間もかかります」

「何しろ項目の数が段違いですしね」

トガちゃんもうんうんと頷く。

政治家、大企業の上層部、学者、果ては外国の王様や軍人まで、対象は数多い。真実しか扱わないという制約の上でもなお、ネタは尽きることがなかった。

そのうえ、今日も新しいネタを発掘してきちゃったし。

頼子さんや宮下さんなんか、ここ最近は「ヒーロー事務所やった時より忙しい」と悲鳴を上げている。

「だから、永遠ちゃんは私と外回りしようよ！」

協力希望者との面会のことだ。

私本人が出向くなら移動を自分で済ませられるし、『嘘発見』もできる。護衛に透ちちゃんを付けたとしても、頼子さんや白雲君の時間が空く。

トガちゃんも事務仕事ができるメンバーなので裏方が捗る。

私としてもあちこち飛び回り続けるよりは格段に楽だけど、

「知らない人と会うのもそれはそれで肩凝りそう……」

「まあまあ。女王様モードで適当に喋ってればいいから！」

「それが肩凝るんだってば！」

と言いつつ、私は結局外回りをオーケーした。



デクとの交戦以降、〃個性〃喪失者数の増加はぴたりと止まった。

一部では『女王の死』が囁かれたものの、大多数の者はその説を笑い飛ばした。最新式のパワードスーツを一蹴し、最後までぴんぴんしていた彼女がそんな簡単に死ぬわけがない、と。

女王一派の仕業と思われる暴露情報の公開は継続して行われており、むしろ、一日ごとの情報量は増えている。

ということは計画が第二段階に入ったのでは、という見方が大勢を占めている。

『女王って案外優しいよな』

『ね。自分を殺そうとした人を生かしておけるんだよ。凄いよ』

あの戦いによって女王支持者、そして女王信者は急速に数を増しつつある。

解散総選挙が囁かれる中、女王支持を表明する国会議員さえ現れた。

——この流れはもう止まらない。

かつて異能解放論を唱えたデストロは志を遂げることなくこの世を去ったが、もしも女王がこのまま姿を消したとしても『個性不要論』が完全に途絶えることはないだろう。

女王の支持層は幅広い。

無個性の多い高齢者はもちろん、先進的な考えに行きつきやすい若年層、強いものが大好きな男児、もともと永遠のファンだった女兒等々。

特に多いのは女性。

男であるデクを下した例の件も手伝っているが、主な理由は、女は男ほど「個性」というものに拘っていないからだ。有名な女性ヒーローもいるし、彼女らにアコがれてヒーローを志す者もいるとはいえ、どうしても男に比べれば少数派。

むしろ、一般高校などでは「個性」を盾に威張り散らす男子を嫌悪する女子が多く存在している。そうした者にとって個性不要論は渡りに船だ。

自分は暴力を振るいたくない以上、相手側の弱体化＝自分への被害の軽減になる。

「私も、個性がなくなるならそれはそれでいいと思います」

「……………」

エンデヴァーは、自宅を訪ねてきた妻——冷と向かい合いながら、なんとも言えない思いを抱いていた。

冷が訪ねてきたのは突然のことだった。

訪問も何も、ここは冷の家でもあるのだが、長期入院＋退院してからの期間もほぼ実家に帰っていたため、彼女にとっては「慣れ親しんだ場所」とは言えないだろう。

むしろ、この家には嫌な思い出が染みついているはず。

『無理に会いに来なくても良かったのだぞ』

そう言えば、冷は首を振って言った。

『逃げているだけでは前に進めませんから』

女王——永遠が支持されるようになったことで、エンデヴァーへのバッシングや詮索もなりを潜めた。

そうでなければ冷の来訪も誰かに見咎められていただろう。

「……………昔、言われたことがある」

「何を、ですか？」

湯飲みと煎餅を前に正座した冷は静かに尋ねてくる。

『才能のあるお前が羨ましい』

「……『個性』は生まれ持ったもの、ですからね」

「……ああ」

言ってしまうえば、容姿や運動神経、芸術のセンスなどと同じ『才能』だ。

当時のエンデヴァーは上ばかりを見ていた。

オールマイトとの差を感じ続けていた彼にしてみれば「何が才能だ」という話だったのだが、今ならばあの言葉も理解できる。

冷はきつと、才能——『個性』なんて要らない、と思ってきた側だろう。

「……『個性』が無くなれば、個性婚も無くなるだろう」

「自分の『個性』で怪我をする子もいなくなります」

冷は、エンデヴァーを責めなかった。

事実だけを告げられながら、それでも胸が痛むのは罪悪感があるからか。

「永遠ちゃんはきつと、横暴な支配者ではありません」

「直接会って話した見解、か」

「はい。お話ができた期間は僅かでしたが——八百万ヒーロー事務所の皆さんからもたくさんお話を聞きました。その人柄は他の人よりわかっていっているつもりです」

「……そうか。そうだ、な」

エンデヴァー自身は、あの少女との思い出が碌にない。

戦いの場において相対したのがほぼ全ての記憶であり、その人柄を判断するにはあまりに足りない。そもそも彼はそういった機微に疎い。

途中で「あんなこと」があったとはいえ、四人の子供を育てた冷の方が人を見る目は確かに決まっている。

「俺は、仮定の話を本気で考えたことなどなかった」

「今も、ですか？」

「ああ。俺はヒーローだ。ヒーローである以上、敵が存在する限り戦

う。それだけだ。……それしかできん」

エンデヴァーは今も活動を続けている。

一人になってからはトレーニング、家の掃除、数時間のパトロールをこなし、夜は静かに晩酌をする。深酒は決してせず、近隣で敵が出れば夜中でも出向く、そんな生活サイクルが出来上がっている。

怪我をすることもあつたが、鍛え上げた肉体は健在。

碌な訓練も積まず、己の「個性」を振るうだけの輩ならば捕まえることは十分に可能だった。

「では、敵が一人もいなくなつたらどうします?」

「……その時は、適当に隠居するでしょう」

幸い、金は有り余るほど持っている。

エンデヴァーヒーロー事務所は所長の個性喪失以降、新規の仕事受付を大幅縮小、これまでの事務仕事を全て片付けた上で閉鎖した。

所員達にはしっかりと退職金を払い、可能な限りアフターケアも行ったため、惜しむ声はあつても文句が出ることはなかった。

ヒーロー活動とトレーニングに明け暮れてきた男だ。碌に興味もない。茶と酒、あとは茶菓子とつまみがあれば、他に望むものもない。黙って湯飲みを持ち上げ茶を啜るエンデヴァーを、冷は静かに見つめて、

「その時は、隣にいても良いのでしょうか?」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「必要ない、と答えかけて、その言い方では伝わらないのだと思いたおす。」

「好きにしろ」

「はい。好きにさせていただきますね」

冷は強くなった。

原因があるとすれば、それはきつと永遠と焦凍なのだろう。

二人の間にゆっくりとした時間が流れ――。

「あー。そろそろいいか、二人とも」

「ごめんなさい。良い雰囲気邪魔する気はなかつたんですけど」

「!?」

不肖の息子と悪の女王が連れ立って現れた!

「な、何の用だ、貴様ら!」

「はは。驚き過ぎて隠せてねえぞ、エンデヴァー。来たのは挑戦状を叩きつけるためだ」

「挑戦状」

「うん」

永遠は瞬時に——歴戦のヒーローであるエンデヴァーでさえ反応できない速度で移動すると、ぴと、と手を触れてくる。

次の瞬間には、エンデヴァーの身体に懐かしい力が戻っていた。

『ヘルフレイム』。

「……何のつもりだ」

「近いうちに大きいことをするので、戦う気があるならそうしてもらおうと思って」

ここで、不安げな表情の冷がおおずおすと、

「大きいこと、って……?」

永遠はにつこり笑って、

「もちろん、世界から『個性』を消します。一気に何千万か何億か、消せるといいと思ってます」

それが、ヒーローと敵による最終決戦が始まる、最初の予兆だった。

## 14. 宣言

“個性”喪失数の停止から一週間。

私は再びテレビに出演するため、テレビ局へ向かった。

局は前回と同じところ。

前回の放送が（良くも悪くも）大反響だったので、是非またうちで、  
と言ってもらえたからだ。

「永遠さん！ 今日よろしくお願いしますっ！」

スタジオに入るとすぐ、顔なじみの女子アナさんが駆け寄ってきて  
くれた。

目が恋する乙女みたいになっているのに内心若干引きつつ、私も笑  
顔を作って頭を下げた。

「今日もよろしく願います」

「そんな！ お忙しい中、時間を作っていただいているのはこっちなん  
ですから、堂々としていらしてください！」

「ありがとうございます」

精いっぱい女王然とした表情で答えて、彼女から離れた。

「この一週間でどれくらい『信者』増やしたの、永遠ちゃん？」

「やめてよ、もう」

透ちちゃん（いつも通り全裸、透明状態）の囁きに苦笑して答える。

……いや、まあ、敵等々から手に入れた『カリスマ』『フェロモン』  
なんかの“個性”を試しに使ったら本気で崇拜されかけたりしたけ  
ど。

慌てて解除したし、それからは使っていないから許してほしい。

「前回に続き、ご足労いただきありがとうございます、永遠さん」

「こちらこそ呼びいただきありがとうございます。よろしく願  
います」

今日の衣装も、デザインこそ違うものの黒いドレスだ。

会話の相手もアナウンサーの男女で変わらない。



違うのは、女性の方が無個性になっている、ということくらいか。自分の「個性」ももらって欲しい、というので有難くもらい受けた。彼女から聞いた話によると、他にも人を呼ぼうという話もあったらしい。辛口コメントーターとか、いつそ政治家とかを呼んだ方が公平になるのではというアイデアだったのだが、収拾がつかなくなるのを恐れて取りやめになったのだとか。

「さて、早速ですが、今回は我々から永遠さんへ質問するのではなく、視聴者の皆さんの声に答えていただくかと思っております」

「あらかじめ局に寄せられた電話やFAX、メール等を集計して、多く寄せられた声の中から一部を紹介させていただきます」

私のスタンスについては前回話したので、人々の疑問を潰していこうという狙い。

その時点でだいぶこっち寄りの番組作りになつてる気がするけど、まあ、それが成功かどうかは視聴率に現れるだろう。

「では一つ目です。十三歳の男子中学生の方からです。『僕はあなたに個性を奪われました。ヒーローになりたかったのに、これではなれません。個性を返してください』」

「こういう方はきつと多くいらっしゃるかと思いますが——永遠さん、どうお考えですか？」

「そうですね。率直にお答えするなら『できません』」

今回も撮影なので、発言への反響はすぐには出ない。

それでもスタジオ内が多少ざわつくのがわかった。

「それは、何故でしょうか？」

「私は、世界から全ての「個性」を消滅させるのが目的です。一部の方にだけ「個性」を返しては不公平になりますし、私の目的を果たすこともできません」

「不幸になる人が出るのだからいつそ止めるべきでは、という声もありませんが——」

「不幸になる、というのが具体的にどういうことなのかわからないので抽象的な答え方になってしまいますが、その方が「個性」を使ってやりたいことというのは、本当に個性でないといけないことなので

「しょうか？」

ヒーロー。〃個性〃アスリート。〃個性〃医療の専門家。

色んな人がいて、色んなものを目指している。それはわかる。じゃあ、それをしたいのは何故なのか。

悪い奴から人を守りたい。

一番になりたい。

怪我や病気から人を救いたい。

根っこにあるのはそういう気持ちなんじゃないのか。

「運動は無個性だつてできません。人を守つたり救いたいなら警察や医者になればいい。それでは駄目なのか、私には疑問に思えます」

「〃個性〃を用いた方がより大きな成果が得られる、ということはあると思いますが」

「私は〃個性〃によって救われる命より、奪われる命の方が心配です」

〃個性〃を容認するということは敵を容認するということ。

自分の目的のために他人が傷つくのを良しとするのは、許されていないことなのか。

正しい人だけに個性を与える？

「どうやって？ 正しいかどうかは誰が判断するのか。奪つたり与えたりは？」

そもそも、正しい目的のために使われた個性が思わぬ災害を齎さない、と誰が保証できるのか。人を癒す力は反転すれば人を傷つける力になる。

「もし、正しい人だけが〃個性〃を持つ社会を実現できたとしても、産まれてくる子供までそうとは限りません。産まれた瞬間に個性が発動して世界が減びることがない、と誰が言えるでしょう？」

「〃個性〃に限界はあるかないか。ないとしたら、個人が世界を終わらせる可能性もあるのではないか——という理論ですね。既に通算数十億人の個性が生まれているわけで、現状でそれほどのインフレが起こっていない以上、杞憂に過ぎないという見解もあります」

「私の持っている『不老不死』も『A F O』も<sup>オールフォーワン</sup>原初の個性です」

不滅に近い生存性。

“個性”を奪うというインチキ。

どちらも最初期に生まれているというのに、呑気な話だと思う。

「また、私としては『個性特異点』が存在するという説を支持していません」

「“個性”は代ごとに混ざり合って進化し、より複雑で強力なものになっていく、という説ですね。もしかしてですが——永遠さんはそれを体感していらっしやる、と?」

「はい」

私は答えて『黒鞭』を発動。

複数の黒い触手を数秒だけ出してから、消す。

「今のはO F Aの一部『黒鞭』です」

「例の戦いでも使われていた……。あの、O F Aとはオールマイトの“個性”なんですよね?」

「はい。オールマイトの“個性”であるO F Aは個性を受け継ぐ力。何人もの使い手に受け継がれてきたこの力には複数の個性が宿っています。本来の持ち主が使っていたよりも遥かに強い力で」

「——っ!?!」

通常の、親から子への遺伝ではまだ多くて四、五代目。

対してO F Aはデクくんが九代目。正統に継承したわけじゃない私を含めるなら十代目だ。

「A F Oは各個性を別のスロットに保管するようで、私が奪った個性では特異点は発生していません。でも、十分な証拠ではないでしょうか」

「……では、次の質問に移りたいと思います」

『個性を奪った結果、死ぬ人がいるとしたらどうしますか?』

「もちろん奪いますが、私は個性を無くすのが目的であって殺すのが目的じゃありません。手持ちの個性で治療できるならするんじゃないでしょうか」

『個性を無くすのに個性を使うのは矛盾ではありませんか?』

「目的を達成するために使えるものを使っているだけです。それが気に入らないというのなら、私が考えられる代案は『個性を破壊する銃弾』を開発することになりますが、あなたが試し打ちに協力してくれますか?」

「『永遠さん自身の不老不死も最終的に消滅させるのですか?』  
「もちろんです。全ての『個性』をなくす必要がある以上、『不老不死』も『AFO』も消し去ります」

「政治家等の不祥事暴露は永遠さんが行っているんですか?」  
「私『達』が行っています。私は基本、足を使って飛び回るのが仕事なので、集めた情報を広めるのは仲間の役目です」

「『永遠さんに国を治めて欲しいです』  
「面倒くさいから嫌です。国を動かす人はできるだけ、一般の人の視線に立てる人であるべきだと思います」

「『好きな食べ物はなんですか?』」  
「たいていなんでも好きですが——強いて言うならハンバーグやビーフシチューでしょうか」

「『踏んでください』」  
「踏まれに来てくださるならそのくらいは……って、なんですかこの質問」

「『結婚してください』」  
「お友達からお願いします。って、だからなんですかこの質問!」

「『もう魔法少女はしないんですか?』」  
「ネタがなくなったらそう言ってください。……機会があればしてもいいですけど、少し恥ずかしいですね」

概ね質問に答え終わった後、私は告げた。

「私からもお知らせがあります」

アナウンサー二人にはあらかじめ内容は伝えてある。

知っている二人は「ついに来たか」とでも言いたげに身体を緊張させながら、私の言葉を待っている。

「二週間後の正午——私は世界から『個性』を消滅させる儀式を行います」

この内容は放送と同時に多くの人が知ることになる。

きつと世界にも届くだろう。

「儀式の場所はどちらになるんでしょうか」

「富士山頂とか樹海とか湖の真ん中とかいろいろ考えましたが、国内だと問題が出そうなので、海の上に島を一つ作ろうかと思いません」

あらかじめお願いしておいたので、映像で大まかな位置が示される。

「島自体は三日前には作る予定です」

「それをあらかじめ告知する目的というのは何なのでしょうか」

「全力で阻止してもらおうためです」

再びスタジオがざわつく。

「わざわざ止めてもらう余地を残すのですか？」

「はい。私のやり方が気に食わない方もいるでしょう。『個性』が無くなつては困る方もいるでしょう。であれば、実力行使で私を止めさせてください。私も、私達も全力で抗います」

「日本中のヒーローを一か所に集める、ということでしょうか？」

「日本だけじゃありませんし、ヒーローだけじゃありません。軍も、<sup>サイラン</sup>敵も、一般の方も全て。世界中から集まってください」

前代未聞の宣言。

「それらすべてを倒す、と？」

「はい。……もちろん、これは真剣勝負です。殺したくない、なんて甘いことを言う余裕はないでしょう。来るなら死ぬ気で来てください」

「敵の存在がある以上、ヒーローが集まるのも難しいと思うのですが」「儀式が成功すれば世界から「個性」が消えます。それでも黙って見ている敵なんてただの雑魚でしょう?」

「敢えて汚い言葉を使って挑発する。」

「「個性」を悪用する敵は私にとつても敵です。儀式に際して暴れようとする者、なおも隠れていようとする者は叩きのめします」

「どうやって?」

「私、その気になれば何万でも何十万でも増えられるんですよ?」

「……ですが、『寄生』がある以上、反抗はほぼ封じられているのでは?」

「そうですね。それが何か?」

一瞬、静寂が下りた。

「「個性」とは、「個性」社会とはそういうものだと言わなければならない。私を殺せば十万人が死ぬとして、殺さなければそれ以上のことが起きると判断すれば彼らは私を殺すでしょう」

これは決して実感のない言葉じゃない。

『綾里永遠』は実際に、温かい未来を奪われている。

「ヒーローだって、決して万能じゃない。一人一人の考え方だってある。しがらみで動かざるをえない時、動けない時だってあるんです。私を殺せば十万人が死ぬとして、殺さなければそれ以上のことが起きると判断すれば彼らは私を殺すでしょう」

私は淡々と言って、続きを口にする。

「もちろん私も全力で抵抗しますが、巻き添えで死ぬのが嫌なら、私を狙う者達を自分で阻止してください。命がけで。別に珍しいことじゃありません。今となっては記録的にしか認識できませんが、私も最初は敵に襲われたせいでヒーローを志したんですよ?」

「つまり、永遠さんは『自分で何かを為す気がないのなら黙って見ていろ』と、そう仰っているわけでしょうか?」

「はい。そもそも、私は敵です。私を敵にしたのはヒーローではない不特定多数の人達のはずです。自分を九十九回殺した相手をたった一回殺したとして、何の罪がありますか? 私は何もしていない?」

逆恨みだ？ 知ったことじゃありません。私を助けてくれたのは知り合いだけだった。理不尽で構いません。現実とは理不尽なものなんですから」

収録は終わった。

「OK」の声がかかった直後、私は疲労がのしかかってくるのを感じながら息を吐いた。

「永遠さん！ お疲れ様でした！」

あらかじめ用意してあったのか、それともタイミングを合わせて用意させたのか、程よく冷えたドリンクを女子アナさんが差し出してくる。

微笑んで受け取って一口飲むと、爽やかな甘さが疲れを和らげると同時に、身体がカロリーに喜ぶのがわかる。

「格好良かったです！ すごく！」

「ありがとうございます。……でも、編集とか大変じゃないですか？」

「大丈夫です！ できるかぎりそのまま放送するよう掛け合います！」

そこまでしてくれるとは、本当にありがたい。と。

彼女はふっと不安そうな顔になって、私を見てくる。

「私も死にたくはないんですが、戦わないと駄目でしょうか？」

「そんなことありません。あなたは、報道っていうやり方でできることをしているでしょう？ だったら、それがあなたの戦いだと思いません」

「っ。はいっ。ありがとうございます、永遠さんっ！」

あれ、なんか目がきらきらするのを乗り越えてハートマークになつてるような気が。

「……永遠ちゃん。どこでそんな人心掌握術覚えたの？」

「え。素だけど、何か問題あった？」

答えると、透ちゃんの溜め息だけが何も無い空間から聞こえてき

た。



## 15. 級友

「えー。まずは全員合格おめでとう」

卒業式の日のHR。教壇に立った相澤は開口一番にそう告げた。

女王の宣言が放送されてから一週間。

この一週間はこれまでで最も慌ただしいものだった。ヒーロー公安委員会は急遽予定を変更してプロヒーロー試験を実施、昨日全試験が終了して結果が発表された。

これを受けて雄英高校では三年生の卒業時期を変更、本日をもって全員に卒業証書を渡すこととした。

「知つての通り、今年は例年に比べて合格枠が非常に拡張された。全員が合格したのはめでたいことだが、今後もこれに慢心することなく励んで——」

「慢心、って、喜べるはずないじゃないっすか……!」

相澤の言葉を遮るようにして声を上げたのは切島だった。

「合格も、卒業も、俺達を戦わせるためなんでしょう……!?!」

「そうだ」

相澤は淡々と答える。

実際、上が何を考えてこの措置を下したかは明白。一週間後に行われる『決戦』に一人でも多くのヒーロー——否、『戦力』を送り込むためだ。

『討伐』に参加したヒーローには国から破格の報酬が出る。希望調査の提出期限は明日までだが、俺が受け取って代理で提出できるのは今日までだ。出していない奴は十七時まで提出しろ」

「待ってくれよ、先生!」

決まってしまったことは覆らない。

相澤はいつものように必要なことを最低限だけ伝える。

しかし、切島はなおも納得がいかないようだった。いや、彼だけではない。他の生徒も、多くの者が苦悩の面持ちだった。

「先生はこれでいいのかよ! ヤオモモ達と殺しあうなんて——」

「——甘えるな、切島」

「っ」

故に仕方がない。

効率的ではないが言葉を重ねる。

生徒が納得していないのなら納得させてやる。納得できないまま放り出すよりは合理的だろう。

「お前が自分で考えろ。いいか、これは強制じゃない。必ずしも戦いに参加する必要はない」

「それ、は」

「まだ学生気分でいるのか？ 今日でお前らは卒業、明日からはプロになる。その瞬間、お前らと俺は対等の立場だ」

基本的にヒーローは独立独歩。

私の強い連中ばかりなので、先達が新人を導くということとは多くない。そうした指導は所属事務所の人間がすることであって、いつまでも相澤がでしゃばることではない。

「卒業が早まったのは確かだ。試験が終わってすぐ卒業と言われても実感はないだろう。だが、早まったと言ったってほんの少し。それともなんだ。お前らは敵を前にしても『待つてくれ』と言うつもりか？」

全員が黙った。

そんな中、ツンツン頭の少年が口を開いた。

身長が伸び、顔つきも随分と大人になったが、口の悪さは未だに変わっていない。

「おい。あんたは行くのか、例の島に」

「ああ」

爆豪の問いに、静かに答えた。

「幸い『個性』も戻ってきたからな。一人でも多くのヒーローを死なせないために行くしかないだろう」

女王が律儀に返却に来たのだ。

必要だろうから、と。

「殺すのかよ、あいつを」

「さあな。だが、行かなければ、殺す必要が出た時に後悔する」

あるいは、守る必要が出た場合にも。  
だが、そこまでは口にしなかった。



卒業式は終わった。

非常時故、保護者達は来ていない。

必要以上にしんみりとした下級生達に見送られての卒業となった。

とはいえ、帰る場所が敷地内の寮なので、そういう意味では格好がつかない。

寮に戻った後はなんとなくロビーに残り、なんとなく気まずいような名残惜しいような不思議な空気の中、少しずつ解散していく。

結局、引越し準備等々のために部屋へ戻る者と残り続ける者がほぼ半々。

「ね、お茶子はどうするの?」

麗日お茶子は居残り組だった。

何をするでもなくソファに腰をかけていると、仲が良い(といっても女子は人数が少ないので皆仲が良いのだが)芦戸や耳郎が声をかけてきた。

お茶子は振り返って微笑みを浮かべた。

「私に行かないよ」

「……そっか」

「やっぱり、病み上がりだから?」

「ん……それもあるかな」

研究所で出久と戦った後のお茶子の記憶は飛び飛びだ。

大怪我をして装置に繋がれ、治療を受けていたのは臆げに覚えてい  
る。その後は気づいたら寮にいて、みんなにとても驚かれた。

怪我は何故か治っていた。

あの研究所での実験や訓練がなかったかののように身体はすつきり  
していて、薬物等の影響がなくなったせいか、精神的にもだいぶ落ち  
着いていた。

それでもカウンセリングにかなりの時間を要したのだが、プロ試験にはなんとか参加することができた。

結果は「全員合格」と言った相澤の言葉が物語っている。

「でも、どっちかかっていうとそれはおまけ。できるだけデクさんの傍にいてあげたいから」

「もう緑谷のことなんか放っておけばいいのに」

「ちよっ、響香」

「ありがとう、二人とも。でも、私、やっぱりデクさんのこと好きだから」

出久は警察によって捕らえられた。

現在は事情聴取等を行い、刑を確定しようとしている段階。重い刑にはならないだろう、という話だが、結果が出るのには時間がかかるらしい。今は警察も人手不足で、にもかかわらず敵はどんどん逮捕されており、取り調べが追い付いていないような状況なのだ。

一度、会いに行った。

出久は別人のように憔悴していて、お茶子に「死ねないんだ」と話してきた。

『二十四時間監視されていて、自殺しようとする必ず邪魔が入る。残酷だよ』

『残酷なのはどっちなの!?!』

思えば、あの時ほど感情をぶつけたのは初めてだったかもしれない。

『私が、みんながどれだけ心配したかわかつとるの!?! 死んでも、殺されてもおかしくなかったのに、生きてるのがどれだけ幸せなことかわかつとる!?!』

さすがにヒートアップしすぎて警察官に止められてしまったが、出久も「ごめん」と言ってくれた。

『……もう一度考えさせてくれ。僕が、どうするべきなのか』

『うん、待ってる』

また来る、と言ってその場を後にした。

面会希望はまた出しているの、許可され次第会いに行くつもり

だ。

「お茶子は強いよ」

耳郎がぼつりと言った。

「昔の緑谷と今の緑谷は全然違う。それでも好きって言えるんだから」

「デクくんは変わってないよ」

けれど、お茶子は首を振る。

確かに、彼は「個性」を失った。師に先立たれ、使命も見失い、ヒーローになる道筋さえ断たれた。全てに絶望して命を絶とうとしていた姿は見る影もなかった。

それでも、

「根つこのところは変わってないと思う。ただ、辛いことがあって苦しんでるだけ。だったら、そういう時こそついてあげんと」

自分は出久が強いから好きになったのか？

違うはずだ。

麗日お茶子が好きになった緑谷出久は、真つすぐで純粋な心を持った少年だ。純粹だからこそ、辛いことがあった時は人一倍悩み苦しんでしまう。

そういうところもひつくるめて、彼のことが好きなのだ。

「せっかく、永遠ちゃんが助けてくれたんやから」

助けられたのは出久もだが、お茶子自身もだ。

身体の時間が巻き戻ったとしか思えない現象は、どう考えても永遠の仕業だ。

「本当、あいつはどういうつもりなんだろうな」

眩きが聞こえた。

近くにいた尾白が発したものだ。いつの間にか注目を集めていたらしい。男女問わず、会話に加わりたい者が近づいてきていた。

永遠が何かを考えているか。

もちろん、それは永遠自身にしかわからないことではあるが、

「永遠ちゃんは永遠ちゃんなんだと思う」

「禅問答か？」

「そういうんやなくて。永遠ちゃんは、別に私達の理解できない化け物になっちゃったとかじゃなくて、永遠ちゃんなりに大事なもののために戦ってるんだ、ってこと」

「そんなの当たり前じゃない」

梅雨が言った。

「これは現実よ。コミックじゃない。<sup>ヴィラン</sup>敵だつてみんな血の通った人なのよ。言つて止まらないなら捕まえるしかない。捕まえる余裕がないなら殺すしかない。そして殺せば、人殺しになる」

もちろん、ヒーロー活動中の敵への殺傷行為は特例として罪に問われることはない。

それでも、人殺しは人殺しだ。

オール・フォー・ワンに乗っ取られた医者をして「他に方法がないから」と殺した永遠が有罪とされたように、殺した事実が消えるわけではないし、場合によっては一般人から責められることになる。

お茶子は苦笑して、

「梅雨ちゃんが一番、永遠ちゃんに似てるかもね」

「一緒にしないで欲しいわ。……って、言いたいけど、そうかもしれないわね」

永遠もまた、どこかクールなところがあつた。

小さくて人懐っこくて食いしん坊で、ところどころドジな癖に、有事の際には誰よりも的確に、真つすぐに、自分のするべきことを見極めていた。

あの少女は極端に「迷う」ということが少なかった。

そういう少女だからこそ、人の何倍も重荷を背負うことになり、人の何倍もの速度で目的を達成し、結果、行きつくところまで行きついてしまった。

そんな永遠の思考にある意味一番近いかもしれない梅雨は、仲間達に告げる。

「私に行くわ。もう一度永遠ちゃんとお話ししないといけないもの」

「蛙吹が名前で呼ぶとか珍しいな」

「茶化さないで。苗字がないんだから仕方ないじゃない」

ぴしやりと言ってから、梅雨は付け加える。

「永遠ちゃんは何をしたいのか、ちゃんと本人に聞くわ。それからじゃないと判断できない」

「聞いた結果、納得できる答えだったらどうするんだよ？」

「決まってるわ。襲ってくるヒーローの方と戦う」

「……覚悟決まってるな」

A組の中でも正義感の強い尾白がひきつった表情を見せた。

実際問題、ことここに至っては何が正義で何が悪なのか、非常に判断しがたい。

「私がヒーローになったのは別に憧れとかじゃないわ。単にお金が稼げて特権が多いから。その上、雄英なら学費もかからないでしょ」

「すごい納得できるけど、卒業式になって聞くとは思わなかったやつ！」

「別に話す必要もないもの。……まあ、そんなわけだから、ヒーローができなくなるのは困るといえば困るわ。でも、世界から敵がいなくなるなら、私がヒーローになるよりずっと家族のためになるのよ」

「……………」

お茶子は「やっぱり似てる」と思わずにはいられなかった。

他の者達も梅雨の意見に感銘を受けたようで、何も言わずに黙り込んでいる。

なので、

「うん。私も『個性』に拘りはないよ」

お茶子にはもう『無重力』の力はない。

寮で目覚めた時点で『個性』は失われていた。永遠が奪っていったのだろう。残念といえば残念だが、同時にどうでもいいとも思う。

お茶子にとってあれは『手段』だ。

ヒーローになるための手段。ヒーローになるのは憧れや平和への願いが半分、お金を稼いで両親を楽させたいのが半分。

ヒーローの道が閉ざされるのは痛いけど、この三年間で培った経験は決して無駄じゃない。これ以上ないほど身体も鍛えられたし、建築現場でも役に立つはずだ。

「私は街に残って敵と戦うつもり。永遠ちゃんやみんなの負担はできるだけ減らしてあげないとね」

「……みんな色々考えてるんだね」

耳郎が呟き、なおも悩むように視線を落とす。

それぞれ事情も動機も違う。

誰もが同じ答えを出せるわけがない。

幸い雄英の生徒は殆どが“個性”を残しているが、就職先のヒーローが“個性”を喪失した、あるいは『島(仮)』に行くことを決めている例も多い。そうしたヒーローは事務所を解散したり、新人に「道を考え直すように」促していたりする。

逆に、自分の事務所に来るのであれば志を同じくしてもらおう、というヒーローもいる。

「先生の言つてた通りよ。自分で考えて決めるしかないわ」

「……そうやね。私達はもう『卒業』したんやもん」

どの答えが正解というわけではない。

ただ、自分自身で悩み、つかみ取った答えに意味があるだけだ。

本人にとつて後悔のない選択であるならば、それはどんな選択であつても尊いものだ。

「ああ」

「うん」

「ん……」

尾白も、芦戸も、耳郎も頷く。

彼らはどんな答えを選ぶのだろうか。

と。

「おい爆豪！ お前はどうすんだよ、行くのか、行かないのか？」

「あ？ 行くに決まってるだろアホか！」

「行くのか。で、それってなんで？」

「決まってるだろーが。あいつとは決着がついてねえ。白黒つかねーうちに“個性”奪われてたまるか」

わいわい騒ぎながら向かってくる男達がいた。

どうやら、梅雨とはまた別の意味で強く自分を持っている奴がまだ



身近にいたようである。

## 16. 予兆

「どう？ 結構よくできたと思うんだけど」

『ワープゲート』で降り立つと、みんなは『島』を見渡して「おお」と歓声を上げた。

浜辺から土の地面、草原、森、山と続く無人の世界。

大きき的には伊豆大島と同じくらいだ。

「これ、永遠ちやんが作ったんです？」

「うん。設計図とかはお姉ちゃんにお願いしたけど」

「すごいね！ ピクシーボブとかセメントスでもここまでできないよ！」

左右から私に抱きつきながら、トガちゃん透ちゃんが喜んでくれる。

褒めてもらえると頑張って作った甲斐があつたな、と思う。

「意外と早くできてよかったよ」

「一週間かからずに島ができるとか、意外も何も異常に早いのですが」  
作り方なんかを私にレクチャーしてくれたお姉ちゃんが一番呆れ顔をしているのがちよつと可笑しい。

「いいじゃない。極まった使い方をすると“個性”でここまでできるっていう見本だよ」

そして同時に、ここが私にとっての決戦の地になる。

「それじゃ、みんな。ちよつとついてきてくれる？」



私達は浜辺から島の中心へ向かって移動した。

森を抜けて山を登る。

山と言っても何千メートルもあるわけじゃない。せいぜい家族連れがハイキングで登る程度の山だ。その頂上付近は平らにならしてある。

「魔王の城でも建ちそうなところですね」

頂上からあらためて島を見渡しつつ白雲君。

私にはやりと笑って答えた。

「やっぱり城がいいかな？」

「へ？」

「おい。まさかやる気か？」

「うん」

轟君の声に頷く。

そのためにここまで来たんだから、当然。

「ただ、その前に作るものがあるんだけどね」

私は頂上のちようど真ん中に立つと、とある「個性」を起動する。差し出した手のひらから放たれた不思議な波動が地面に下り、きらきらした結晶と化す。せつかなのでファンタジーによくありそうな、人が入れるサイズの縦長のクリスタルに整形。下には台座をつけて位置を高くし、祭壇と階段もつける。

宮下さんが「うわあ」という顔でそれを見上げて、

「所長のやることなのでもう驚きませんが——なんなんです、これ？」

「装置化した「個性」です」

「は？」

幾つかの声が重なる。

「『個性装置化』っていう「個性」があつて。それで「個性」を装置にしてみました」

ワン・フォー・オール  
O F Aのパーツになった『個性を与える』個性と同じく、単独では意味をなさない「個性」だ。

装置化された「個性」は必要なエネルギーが供給される限り、使用者が停止命令を出すまで半永久的に機能し続ける。

当然、装置化したのは「世界から「個性」を消す」ための「個性」だ。

「この結晶は『奇跡を起こす』「個性」の装置」

「また一段と胡乱な名前の「個性」ね」

頼子さんが呆然と目を細める。

無理もないと思うけど、

「あるんだから仕方ないじゃないですか。……まあ、必要なエネルギーが多すぎて本来の持ち主でさえ使いこなせないような代物なんですけど」

「永遠ならそのエネルギーを供給できる……でしたわね？」  
「うん」

私はもう一つの「個性」を『装置化』。

これは結晶をぐるりと囲む金属の輪のような形にした。角度を変えて幾つも重ね、いかにもファンタジックな光景になったところで「ふう」と息を吐く。

「二つ目は『思いを束ねる』「個性」」

「少年マンガでよくある奴かな！」

「そうそう。みんなの想いを力に変えて、みたいな」

まあ、これも単独では「束ねたところで使いようがない」っていう話なんだけど、こうやって装置化して、束ねた思いを別の「個性」に流し込めば、半永久的な「個性」消去装置が完成する。

「起動」

途端、鈍い輝きを放ち始める結晶と輪。

と、トガちゃんや透ちゃん、その他、ここにいるみんなの身体からきらきらした光が生まれて装置に吸い込まれていく。

「綺麗……！」

「つて、あれ？ 永遠ちゃん、動かしちゃっていいんです？」

「いいんだよ。必要なエネルギーが溜まるのに時間がかかるし、最初に消していくのは『寄生』だから」

今から起動しておけば決戦時にはちょうどいい感じになるはず。

「私を殺すと十万人以上が私になると言っただ。あれは嘘だ。——み  
たいな？」

『思いを束ねる』個性装置は世界中から「個性が無くなって欲しい」という思いを集め、エネルギーに変える。

『奇跡を起こす』個性は一人で供給するには膨大すぎる必要精神エネルギーを大勢の人に賄われ、破壊でもされない限り延々と、世界から「個性」を消し続ける。

「ヒーロー、ううん、体制側——も違うか。現世界側の人達の勝利条件はこの装置を破壊すること。当日、戦いが始まれば、“個性”消滅を願う人達の想いもどんどん強くなる。早く壊さないと取り返しがつかなくなるかもね」

でも、この勝利条件は教えてあげない。

敗北条件が緩和されていることも自分からは教えない。

トガちゃんが嬉しそうな顔をしながら言った。

「エグい！ エグいです永遠ちゃん！」

「なんで喜んでるのトガちゃん……。まあ、悪い奴が自分から手の内バラす必要ないからね」

というわけで、

「これからここに城を立てて攻略されづらくします」

「うわ、えつぐ……」

白雲君があらためて悲鳴を上げた。



最初に気付いたのは誰だったか。

空を流れていく光。

異常気象だと夢のないことを言う者もいたが、一方で妖精や天使といった幻想の存在を連想する者も少なくはなかった。

人々は光の流れていく先を追い——他の地域との情報を共有することで、気づいた。

光が向かう先にあるものに。

作られた島に『あの少女』がいることに。



アメリカ某所。

国内有数の軍事基地では、肅々と攻撃の準備が進められていた。戦闘機や爆撃機などの航空戦力が多数、万全に整備され、弾薬や燃

料を投入、いつでも出撃できる態勢が整えられる。

大勢の兵を直接運ぶための輸送機も準備万端。

同時に開戦の狼煙となるミサイルの発射準備も進行している。

湾岸の基地では潜水艦を含む各種軍艦が稼働状態に入っているはずだ。

『もはや一刻の猶予もない』

軍人達には大統領からの声秘密裏に伝えられた。

『一方的に世界の変革を押し進める悪の女王に対し、我々は世界一の大国として正義の鉄槌を下さねばならない。躊躇う必要はない。これは聖戦である。繰り返す。これは聖戦である』

一般人も、他国も、攻撃のことは知らない。

敵に知られないために、と、極秘の作戦とされていた。

もちろん、ミサイルを一発発射した瞬間に世界中が知ることになるのだが——始まってしまえば相手を殲滅するまで終わらないのだから構わない。

世論など後からどうとでもなる。

避けるべきは、取り返しのつかない事態が起こってしまうことだ。「だからって軍ですらない少人数のグループ相手に総攻撃だなんてな」

航空機パイロットの一人、ジャックは待機中にそうこぼした。

「しかも、女王を殺せばこの国からも犠牲者が出るんだろ。それでもやるってんだ。イかれてるぜ、大統領も」

「よせ、ジャック」

同僚のボブが制止するが、彼の表情も硬い。

わかっているからだ。

この戦いのどうしようもなさを。無意味さを。そして、成功の難しさを。

「命令である以上はやるしかない。たとえ、成功する目がほぼ無くても、だ」

「お前は総攻撃でも女王を殺せない。そう思うのか？」

ジャックは成功自体を疑ってはいない。

だからこそ、あの一発やりたい美少女を殺してしまうことがやるせなかつたのだが。

「まず間違いなく失敗するさ」

ボブは断言した。

「あの少女は規格外だ。彼女こそヒーロー。……職業的な意味のヒーローじゃないぞ。コミックに出てくるスーパーヒーローのような能力の持ち主。そういう意味だ」

「ミサイルも、銃も、爆弾も、通用しないって？」

「不意打ちでもなければ通用しない。そう思った方がいいだろうな。……そもそも、不意が打てるのかどうか」

「待てよ。……だとしたら」

攻撃を阻止される。

後に待っているのは、なんだ？

女王は、攻めてきた者には容赦をしないと云っていた。

——ぞわりとする。

わかっていたつもりだった。

だが認識が甘かった。

この先に待っているのは子供を殺す罪悪感ではなく、

「大丈夫だよ」

「!？」

声が聞こえた。

気づくと、目の前に女王が立っていた。

肩を覆わない扇情的な黒いドレスを纏い、悠然と。

反射的に銃を手にしようとして、迷う。

迷っている間に次の声がした。

「戦いは起こらないから」

次の瞬間には女王の姿は消えていた。

代わりに基地内に放送が流れる。

攻撃開始時間を延期。作業中の者はそのまま作業を続行。待機中の兵士はそのまま待機するように、とのことだった。

「おい、なんだったんだ、今の……」

「さあ、な」

兵士二人は顔を見合わせ困惑の表情を浮かべた。

攻撃開始時間は変更され、更に変更され、また変更されて、その日の攻撃は結局中止になった。

基地の最高責任者を始めとする『上』の人間達が揃って「猛烈な腹痛」に襲われてトイレに駆け込み、基地の専属医にかかる羽目になった。更に戦闘機や攻撃設備の約一割に「原因不明の異常」が発生し、そのチェックに追われることになったからだ。

前者はバイオテロの疑いがあるし、後者は復旧・原因究明しなければ戦闘行動中に他の機体で発生する可能性がある。

無理やり決行しようにも命令を出し指揮をする人間が軒並みダウンしているためにどうしようもない。他所から応援を貰おうと思つたら、他の基地でも同じ現象が起こっており、回せる人員なんてどこにもいなかった。

状況が回復次第再開、という話ではあったものの、再開しようとする度に別の問題が発生、結局何もできないまま時間だけが経過していった。

ジャック達兵士は、女王の恐ろしさに震えると共に、彼女の『慈悲』を実感した。

そうして。

各国の軍隊は表向きの静寂を保ったまま、運命の日がやってきた。



船は太平洋上を順調に航行していた。

『島』までは残り数十キロ。

このまま行けば一時間足らずで到着するだろう。

ヒーローにより編成された攻略部隊の一員——エンデヴァーは、自販機前のベンチにNo. 2ヒーロー、ホークスの姿を見つけて声をかけた。

「戦いの最中にトイレに行きたくなっても知らんぞ」



青年は顔を上げて微笑を浮かべた。

「そういうので『速い』レットテルは勘弁して欲しいっすね」

ぐいっと呷る缶の中身はジンジャーエールのようだ。

エンデヴァーは硬貨を取り出すと自販機から緑茶を購入——しようとして、自分の言ったことが引っかけり、ノンカフェインの麦茶を買った。

「貴様が参加するとは思わなかった」

隣にどっかりと座りこんで言えば、ホークスは今度は苦笑を浮かべる。

「聞いてないっすか？ 俺の評判もガタ落ち。バツシングだらけで、汚名返上するためには来るしかなかったんです」

ホークスは緑谷出久暴走の件で責任を取らされた。

『上』の命令を聞く便利屋のような位置にあったことが公開され、彼が出久を唆したのだとまことしやかに囁かれた。実際、出久を直接勧誘したのも迎えに行ったのも、監視役として付いたのも彼だったのだから、全く的外れというわけでもないのだが。

要はトカゲのシツポ切りだ。

今まで便利使いしていた癖に、要らなくなれば捨てられる。彼に汚れ仕事を押し付けていた層が辞めさせられたり閑職に追いやられたりしたこと、いわば組織の体質改善が影響しているのも事実だが、やるせない話ではある。

ただ、この上、女王の一件で動かないとなると「ヒーローとして戦う気はあるのか」というところまでを問われることになりかねない。

これが信用を失う前なら「島には行かず街の平和を守る」と表明するだけで皆が信じただろうが。

かの『女王』が『剛翼』を返還した、というのも大きい。

その背に翼がある以上、ヒーローとして悪と戦うのは当然——というのが一般大衆の見方だろう。

「エンデヴァーさんこそ、指揮官辞退してるじゃないですか」

「俺は皆を指揮するような立場ではない」

今回の戦いは一般的な「ヒーローによる大規模作戦」とは一線を画

する。

少なくともエンデヴァーはそう考えている。それにホークスに言った通り、No. 1ヒーローとしての矜持は既に持ち合わせていない。だから指揮官の打診を断った。

結果、リーダーは決めず個々人の連携に任せるという方針が決定。

普段の戦いと何も変わらない、個人の力が試される形となった。

「エンデヴァーさん。勝てると思いますか？」

青年の目はエンデヴァーを見ていなかった。

ただ、どこか遠くを見据えている。

「勝てないだろうな」

「っ。……意外ですね。そんなにはつきり言うなんて」

「あれは理外の存在だ」

エンデヴァーはオールマイトを全力で追いかけてきた。

一対一で戦えば、勝てるتماでは言わないものの、良い勝負をする自信はある。だが、永遠に勝てる気は正直言ってみるでしない。

永遠の振るう「オールマイトの力」はまだまだ未熟だ。無数の「個性」を持つが故に個を磨き上げる機会を逸している。が、そんなことをものともしない恐ろしさが彼女にはある。

無数の「個性」。

違う。それはあの少女の恐ろしさの本質ではない。

何をするかわからない。

人外レベルの思い切りの良さこそが真に恐ろしい。

だからこそ、

「我々は、あらゆる可能性を警戒するべきだ」

麦茶を持っていない方の手を高速で閃かせると、青年は驚くほどの瞬発力をもって回避。

代わりに飛んできた羽根を『ヘルフレイム』が焼き尽くした。

「ホークス。貴様はどっちの味方だ？」

サングラスの奥で青年の瞳がぎらりと光った。

## 17. 開戦

どき、と。

床に転がされた『その男』を見て、ヒーロー達が声を上げた。

「ホークス……!?!」

「どういうことだ、エンデヴァー!?!」

「どうもこうもない」

ホークスは全身を焦がされ、更に縄で嚴重に拘束されている。

命に別条があるほどのダメージは無いが、羽根の多くは使いものにならない状態。もし今、即座に回復、あるいは新しい羽根を生やすことができたとしても、縄のせいで動くことはままならないだろう。

「この男は裏切り者だ」

エンデヴァーもまた無傷とはいかなかった。

身体には複数の小さな傷が生まれている。あの狭い空間では『剛翼』を防ぎきれなかったからだ。羽根を短時間で焼き切るほどの高熱を出せば船にダメージが行きかねない。止む無く火力を抑え、ホークス個人を無力化することになった。

そんなことを事の経緯と一緒に話して聞かせ、

「そうだな、ホークス?」

本人に確認すれば、青年はシラを切ることもなく認めた。

「ええ、その通りです」

「何故だ!?!」

声を上げたのは別のヒーローだった。

No. 1とNo. 2の争い。

決戦を控えたこのタイミングでそんな事件が起こるのは、彼にとって許せなかったのだろう。

だが、ホークスは動じない。

「何故って、女王につく方が得でしょう?」

この返答に一同はざわつく。

「そんな理由でエンデヴァーと戦っただと……!?!」

「重要じゃないっすか。決戦に参加して何になります? 現政権に恩

が売れる？ だからなんです？ どうせ失脚する奴らの好感度を稼いだって何にもなりませんよ」

「……なるほど、そういうことかよ」

ホークスに関する一連の報道は他のヒーローにとっても大事件だった。

彼が毛色の違うヒーローであることは多くの者が察していたが、汚れ仕事や裏仕事を引き受けるスパイのような役割だったというのには驚く者の方が多かったのだ。

ヒーローとは正義の味方である。

ヴィラン 敵をぶっ飛ばしていけば世界が良くなる。そう信じていた者にとつては信じがたい話。女王に続き——否。女王が反旗を翻す以前からヒーローの正義が穢されていたという事実の色めき立った者は少くない。

だからこそ、決戦へのホークス参戦は好意的に受け入れられていたのだが、

「結局、媚びを売る相手を変えただけなんだな!？」

場は、一気に物々しい雰囲気。

そんな中、有翼の青年はなおも飄々と答え、

「だったら、何です？ 俺を殺しますか？」

「——ッ！」

言葉か、あるいは直接的な暴力が振るわれようとした瞬間。

「止めろ」

静かな、しかし重々しい言葉が沈黙を生んだ。

「エンデヴァー……?」

「別におかしな話ではあるまい」

ホークスを転がして以降、No. 1ヒーローは微動だにしていなかった。

「各々に譲れぬ矜持、考えがあつて当然。ホークスはホークスなりの意思で我らを裏切った。それだけのこと」

「……怒ってないんすか、エンデヴァーさん？」

これには当のホークスでさえ呆気にとられる。

が、

「何を怒ることがある。今はヒーロー同士で憎みあっている時ではない」

「何言ってるんだよエンデヴァー。お前がこいつを『裏切り者だ』って連れてきたんだろ!」

抗議の声はもつともではあったが、

「無論。理想が相反する以上は捨て置けぬ。裏切った事実を周知しなければ無用の混乱も起きよう。だからこうして知らせた。だが、ヒーロー同士で争うのは本意ではない」

「許すってのか!? 女王につく奴を!」

「敵に回るのなら戦おう。拘束で済ませられるという保証もない。だが——別に、ホークスだけに限った話でもあるまい」

「——」  
しん、と、静寂に包まれる。

縄で縛られ拘束されたままの青年が「まあ、そうでしょうね」と息を吐いて、

「裏切るなら戦闘開始と同時に、ある程度分散してからのほうが効率的です」

「なっ……!?!」

驚愕が広がる。

ホークスに向けられていた視線、感情は拡散してお互へと向けられる。

誰が裏切り者なのか。

疑心暗鬼が広がりかけた一瞬を縫うようにして、それは起こった。青年を拘束していた縄がバラバラになり、ひよい、と軽く持ち上げられる。

そして姿を現したのは、黒いドレスを纏った美しい少女。  
どこから来たのか。

……などと言うのは、もはや彼女相手に無意味だが。

「じよ、女——」

「貴重な戦力を確保させてもらうね」

静かな声が動揺の声を抑え、響いた。

有翼の青年は引きつった表情を浮かべて、呟く。

「……許してくれるんですか、永遠さん」

女王はどこか艶やかに笑って答えた。

「許すよ。こつちに付きたいのが、あなたの本心なら」

「——ええ、両親に誓って裏切りませんとも」

「待——」

声を上げ、手を伸ばしかけてから、エンデヴァーは自覚する。

躊躇いがある。

彼の『ヘルフレイム』ではホークスを焼き殺してしまいかねない。

低出力では女王を足止めすることもできないだろう。

否。

全力で挑んだとして、どの程度通用するのか。

一瞬の迷い。

ここで交戦するのは得策ではない、という思考が、攻撃の機会を失わせた。

「それじゃあ」

黒い塵と化すかのように消えていく少女を、一同はただ見送るしかできなかった。

余韻の覚めやらぬ中、フェリーは着実に『島』へ近づいており、ある一定まで近づいたところで誰かが気づいた。

「な、なんだ、あれは……!?!」

島を覆い尽くすように、デフォルメされた無数の蝙蝠が飛んでいく。

海からは鮫が、鯨が、果ては海竜のごとき異形が顔を出してヒーロー達を睥睨する。

地上では虎や獅子、狼が雄たけびを上げている。

「地獄か」

誰かの呟きが全体の認識に変わるのに、そう時間はかからなかった。



「そのまま突っ込んできたのは約二割だね」

島の中央、山の頂上には巨大な城がでん、と建っている。

皆の希望を聞きつつ私が作ったもので、全五階建て。生活スペースや会議室などがあるのは四階から上で、三階から下は地下部分も含めて迷宮や防衛設備になっている。

建築様式は西洋やら北欧やらが混じった適当な感じだけど、一見ただの石に見える素材は「個性」で作った特殊素材なのでとても頑丈。壁や床の内側には更に硬い金属も埋め込んであるので、ぶち抜いて進むとかのズルはそうそうできない。

そんな城の中に作られた、妙に近代的な内装の会議室には私をはじめお姉ちゃんに透ちちゃん、トガちゃん、轟君などなど、戦闘あるいは防衛に参加する面々が勢揃いしていた。

モニターには使い魔から送られてきた映像が映し出されている。

島周辺の会場には数多くの船の姿。

各国の軍には組織的な行動がとれないようにたつぷりと嫌がらせをしたので、来ているのは主にヒーロー、あとは敵や傭兵、若干の民間人といったところ。

多くの船は私の使い魔である海の魔物達を見て前進を止めた。  
止まって正解だ。

構わず進み続けた船は、ある程度の自律行動を取れるよう設定した使い魔達に群がられている。船自体には大した防衛機構はついていないし、ヒーローがデツキへ出て応戦しようとするれば、空から飛べる使い魔達が襲撃してくる、という寸法だ。

「どれくらい死にますかねえ」

メイド服を着たツインテール美少女の眩きに、私は苦笑で返す。

「物騒なこと言わないでよトガちゃん。できるだけ死んでほしくないんだってば」

「わかってますけど、普通死にますよアレ」

「死なない死なない。あれはただの牽制と忠告。あれで死ぬようじゃ

『何しに来たの』って話だよ」

トガちゃんは戦闘服にメイドさんの衣装を選んだ。

動きづらさより趣味優先なんだ、と思ったら、長袖長スカートの方が隠し武器を用意しやすく都合がいいのだと教えてくれた。

インナーには特殊繊維のボディースーツを着込んでいるし、メイド服自体も戦闘がしやすいように各種改造が施されている。また、可愛いツインテールにまとめた髪型と相まって、対峙する相手の気力を削ぐ効果も期待できる。

「いや、雄英に入学した頃の俺なら割と苦戦するぞ」

と、これは轟君。

彼は燃えにくい特殊繊維の戦闘服。黒づくめで、いかにもプロフェツショナルです、って感じ。トガちゃんとの見た目のギャップが凄いいけど、彼の方が普通の格好だ。

「大丈夫だよ。爆豪あたりがまとめて吹き飛ばすでしょ」

「船の上である以上、派手な行動が制限されます。力を温存したいという思いもあるでしょうから、いろいろと難しいでしょう」

お姉ちゃんは腕と胸、お腹、足に大きな露出部分のある、ちよつと——いやかなりエッチな格好をしている。

“個性”の都合上しようがないんだけど、ほんとに悪の女幹部にか見えない。

そこで、いつも通り透明（つまり全裸）の透ちゃんが頷いて、

「船が壊れたら帰れないしね！ 止まった人達はほんと正解だよ！」

使い魔達には「一定以上近づいてきた者だけを襲え」と命令してある。

なので、何も考えずに船で突っ込んでくるんじゃないくて、船を安全地帯に残した上で飛ぶなり泳ぐなり、海を凍らせて走り抜けるなりするのが正解だ。

一人乗りか二人乗りくらいの小型艇があればそれで突っ切るのも手。

つまり、あの使い魔達は敵をふるいにかけて数を減らすのが目的だ。



「お姉ちゃん、メカの方は？」

「もちろん、万端ですわ。敵船と使い魔達の接触と同時に順次、稼働状態に移行させております」

「うん、ありがとう」

私やお姉ちゃんが「個性」でいろいろ作れるのを利用して、防衛用のメカも大量に用意してある。

数としては、メカだけで都市一つ落とせるんじゃないかってレベル。

ドローンなんかの小型メカから四種類の雄英ロボを真似たもので形も様々で、使い魔達の数が減ってきた頃に投入して第二の嫌がらせをする予定。

「罨もいっぱい仕掛けてあるよ！」

「のこのこやってきたことを後悔させてやるです」

透ちゃんとトガちゃんには罨を担当してもらった。

自然を利用した原始的なものから機械を使った電子的なものまで。私達防衛側としては一定ラインより外に出なければ引つかかる心配はないわけで、それはもう、これでもかと用意した。

作戦的に、死ぬような罨は用意していないものの、担当者があの二人だ。

死ななければいいんでしょ？ とばかりの辱め、嫌がらせ、遅滞攻撃などが侵入者達を襲うことだろう。

更に、

「お、始まりましたね」

轟君と同じく真面目な服装の白雲君が言う。

あれ、えっと、呑気に批評してる私もただのドレス姿だったりするんだけど、もしかして女性陣が遊んでて男性陣は真面目、みたいな分かれ方になってる？ いやうん、今更か。

「仲間割れ……っっていうか、賛成派と反対派の抗争だね」

船と船の間、あるいは同じ船の中でも争いが起き始める。

私達を止めに来た人と、そんな彼らを止めに来た人達。二種類がいる以上、こうなるのは当然だ。こっちとしては勝手に食い合っつて疲弊

してくれるんだから御の字。

ついでに言えば、やってきた船の中には腕自慢の敵も交じっているので、ヒーローなんかは「まずはお前からからだ！」とばかりに捕まえにかかっていたりもする。

「ホークスくんは先走って正解だったかもね」

普通のレディーススーツ姿の頼子さんがくすりと笑う。

仕草のせいかな、女子高生まで若返ってもなお艶っぽい印象なのは負けた気がする——って、それはいいとして、言われた有翼の青年はシャツにズボンというラフな服装で苦笑を浮かべた。

「女王様には感謝しています。俺を拾ってくれたんですから」

「そんなにかしこまらなくてもいいよ。こっちに來た以上、ホークスも仲間なんだから」

「そう言ってもらえると嬉しいですね」

防衛に参加するメンバーは反乱の初期メンバー、つまり、私の死刑を止めようとしてくれた人達と、初動の段階で私の側についてくれた人達を中心になっている。

これはもちろん裏切りを防止するためなんだけど、そんな中であつて、ホークスはかなりの特例だった。

何しろ私の死刑に体制側で参加していたばかりか、デクくんを『実験』に誘った張本人なんだから。

でも。

「いろいろ大変だったんでしょ？ 下手に逆らうわけにもいかなかった」

「……何を言っても、言い訳にしかありませんけど」

遠い目での返答が物語っている。

ホークスだって嫌だったのだ。非人道的な仕事なんてしたくなかつた。

でも、効率を優先しなければ為せない事もある。

何が正しくて何が間違っているか、どの仕事が平和に繋がっているかの仕事がお偉いさんの自己満足か、ヒーローになる前から尖兵としての役割を与えられていた彼には判断しきれなかつたし、感情を優先

して動くには体制側に踏み込みすぎていた。

一人の力なんてたかが知れている。

彼の言った通り、犯した罪は変わらないけど、

「せめて最後くらいは協力させてください」

「うん。一緒に頑張ろう」

心強い味方が一人、増えた。

## 18. 出撃

島の付近に到達した反女王勢力は、悪夢のような歓迎を受けた。

先行する船が海、空から迫る『魔物』（としか表現しようのない化け物）に襲われ、女王派の勢力が便乗。これによつて場は一気に混乱した。

無数の敵に対処する間にわかつたのは、次のようなことだ。

魔物は一定以上接近した者だけを襲う。

島の中央、山の上には西洋風の城が建っており、世界から集まる輝きはその中に吸い込まれている。

島の陸地にも陸上型の魔物が跳梁跋扈しており、第一陣を無理矢理突破した者にさらなる攻撃を浴びせている。

「どうしたものか」

そんな中。

エンデヴァーほか日本のプロヒーロー百名ほどが乗る船は敵の攻撃範囲外に位置したまま、他の勢力に出遅れていた。

初動にて慎重策を取った結果、思わぬところから横槍を受けたせいだ。

同乗していたヒーローの約二割が女王派であることを明かし、戦闘行動を取ってきたのである。

対処、制圧している間に先陣を他に譲る形となり、結果、自分達の被害は死者ゼロ、深刻な負傷者も出ていないものの、他の船の中には大破するものも出ている。

幸い、敵に殺意はなく、船を破壊はしても沈めては来ていない。

むしろ、ただ浮かぶだけになった船に気絶した襲撃者を運ぶなど、慈悲さえも見える。

「無理矢理突破するのは現実的ではないでしょう」

「イレイザー。あの化け物どもに『抹消』は？」

「効きませんでした」

黒ずくめのプロヒーローはいつも通りに淡々と答えた。

エンデヴァーが女王派との戦闘を指揮している間に、イレイザーは

あれこれと試しつつ戦況を見守ってくれていた。

結果は、残念ながら芳しくない。

レイザーの『抹消』は『個性』による生成物までは消すことができな。なので当然といえば当然だが――。

「小型艇や個人用のフライングユニットも積んでいますが、戦闘しながら突っ切るのは危険が大きすぎます。できる限り数の利を活かさなければ」

「独断専行していった者もいるが、な」

「彼らは若手とはいえ経験は十分です。自分の身は自分で守る、と信じるしかありません」

不安だろうに、レイザーはそれを表には出さずに答えた。

先行していった無鉄砲なヒーローの中には爆豪――レイザーの教え子もいた。爆発を上手く利用し、空の魔物を蹴散らしながら飛んでいったので、島に着けないということはないはずだが。

「なるべく万全で追いつくためにも、万難を排して進むべきか」  
「ええ」

方針は決まった。

エンデヴァーはレイザーと共に、仲間達へ提案をすべく動き出した。



島へ上陸してきたのは五百〜六百人といったところだった。

結構多い。

世界中のヒーローや敵が集まっているのを考えたら少なすぎるくらいだけど、もちろんまだ上陸していないグループもいる。

安全圏から使い魔を減らしにかかっている面々とか、順次到着してくる後続とか。

「そろそろ頃合いかな」

「そうですね」

私の呟きに、メカを操作中のお姉ちゃんが応じる。

「じゃあ、所長。とりあえず俺は行きます」

「うん。気をつけてね」

「ははは。大丈夫。あの地獄に比べたらなんでもないですって」  
言うが早いか、どこかへとワープしていく白雲君。

それから一分ほどの間を置いて、使い魔からの中継映像に閃光が混ざり始める。

白雲君が島の外周上空へランダムにテレポートしては雲に乗って、フラッシュグレネードをばら撒いているのだ。

殺傷能力はないものの、光と音による妨害性能は格別。

少なくとも足止めくらいは期待できるし、うまく行けば気絶させられる。

ちなみにフラッシュグレネードは『個性装置化』した『創造』で今なおぼこぼこ量産中。エネルギー源は大量のラード。業務用のものを買って込んでどばーっと注いである。本来の持ち主であるお姉ちゃんがやったら体調を崩すことうけあいの荒業だ。

ちなみに、白雲君の言っていた『あの地獄』が何かというと、

「……ああ、あの特訓は本当に酷かったな」

「轟君までひどい」

「永遠ちゃんの愛が気持ちよかったです」

「あれで喜ぶるのはトガちゃんくらいだからね、ほんと」

なんか透ちゃんまでげんなりしてるけど、私がやったのは本当にしただの特訓だ。

密閉空間内の時間を止める「個性」を使って時間を確保して、えんえんと実戦形式でやっただけ。

『不老不死』ほか大量の「個性」があるのをいいことに仮想敵の役を引き受けたところ「鬼」「悪魔」「魔王」などと悲鳴やら文句やらが上がったものの、お陰でみんな強くなった。

特に「個性」の発動速度と精度、規模については別人に見えるレベルだ。

白雲君もぱつと現れてはさつと雲に乗って、ぱらつとばら撒いたかと思えばぱつと消えるので、上空を警戒してはなお、対処するのは

至難の業だ。

「ホークスは城周辺をお願いしていい？」

「了解しました。まあ、しばらく暇になりそうですが……」

「意外とすぐ突破してくる人がいるかもしれないよ」

サンングラスの青年の答えにくすりと笑う。

中継映像の一つには物凄い勢いで突き進む爆豪の姿が映っている。ほんと、こういう時に爆発は便利だ。浮けるし、敵を蹴散らせるし、なんなら毘も吹き飛ばせる。

お茶子ちゃんは来てないっぽいけど、彼女のような浮遊系や飛行系の「個性」持ちなら妨害の多くを無視できるはずだ。

「そうっすね。気を引き締めます」

「お願い。でも、誰も通すなっつわけじゃない。あくまでも少しずつつ戦力を削げればいいから、ホークス自身が死なないのを優先して」

「……本当、女王様は優しすぎますよ」

言って、会議室を出ていくホークス。

「頼子さんは——」

「百ちゃんのサポートに専念するわ。私の「個性」は戦闘系じゃないし」

「お願いします。じゃあ、私達も行こっか。トガちゃん、透ちゃん」

「はい」

「うんっ」

声をかけると、トガちゃんと透ちゃんが笑顔で頷いてくれる。

二人の役割は遊撃。

主に罨ゾーンをふらふらして不意打ち、敵の数を減らすと同時に混乱させる役割だ。

「じゃあ、俺も適当に迎撃に出ている」

と、これは轟君。

「うん。後で拾いに行くね」

「ああ。親父の奴、やけに慎重だからな。さっさと出てきてくれりやいいのに」

轟君の目的はエンデヴァーとの直接対決。

そのエンデヴァーが日本ヒーローと一緒に使い魔滅らしに注力しているので、なかなかチャンスが巡ってこないのだ。

なので、エンデヴァーが島に上陸次第、私が拾ってワープすることになる。

非戦闘員や女王信者（つて自分で言うのアレだけど）への連絡は頼子さんをお願いして、私はトガちゃん透ちやんと一緒に空間を跳躍した。



「チツ、次から次へと雑魚が来やがるー！」

爆豪勝己は単身、島の中央を目指していた。

群がってくる化け物やメカは爆破して蹴散らし、ちまちま歩くのは面倒なので爆発による跳躍を繰り返し、罨の殆どを無力化しながら最短ルートで進んでいる。

かつては両手の汗腺からしか出せなかった爆発性の体液だが、特訓の末、両足からも出せるようになっていた。

これによって機動性の確保や姿勢制御が容易になり、より高度な戦い方ができるようになった。三次元戦闘に長けているという点では緑谷出久の超パワー——ワン・フォー・オール O F Aにも勝っており、直接対決したとしても後れを取るつもりはない。

実際、彼が言うところの『雑魚』も一蹴できているのだが、

（流れが変わりやがったな）

彼は、白雲臍の参戦による後方の変化を敏感に感じ取っていた。

敵が本格的に動き出したということだろう。

（そうだろうな。この雑魚どもはあくまで足止め。本命はここからだ）

爆豪の強さ。

溢れんばかりの才能、便利な「個性」、猛獣レベルの負けん気の強さ——彼には様々な長所があるが、最も『強み』となっているのはそういうたわかりやすい部分ではない。



頭のキレ。

分析力、判断力、直観力。一見直情型に見えて（そういう部分がないとは言わない）、その実、彼我の戦力差や戦局判断はしっかりとできる。それはヒーロー学校に入り、ライバルや強敵とかち合ったことによつて磨かれた隠れた長所である。

だからこそ、

「こんにちは、爆豪」

何の前触れもなく姿を現した『彼女』に対し、するべき対処を取ることができた。

「っ、ラァ!!」

両手を前方——女王に向け、フルパワーで爆破。

反動で後方に吹き飛ばされながら、足裏から爆発を起こし姿勢制御。上空へと跳び上がって視界を確保する。一秒とかからずかなりの高度に達すると、身体を上下入れ替えて追撃の構え。

（あいつがああ程度でやられるわけがねえ）

ほんの少しでも油断したらやられる。

全神経を集中させ、眼下、否、全方向を警戒。

戦力差はわかっている。

相手は少なくとも透明化、認識阻害、その上あたりを夜に変えることができる。気配だけではない。僅かな変化も見逃してはならない。少しでも何かを感じたらそこへ攻撃する。

驚愕が冷めやらぬ中、爆豪はそう自分に強く命じた。

——彼の判断は間違っていない。

むしろ、正しかったと言っている。

圧倒的な相手と真っ向から、己の能力と基本的な装備だけで戦おうとすれば、もはや心構えと対応能力の問題になる。

ただただ、己を戦闘のための装置と化す。

だから、結果がどうであれ、彼の失態ではない。

悪かったとすれば、彼が『彼女』との決着を望んでいたこと。そしてそれを『彼女』が察したことが、いけなかった。

「ごめん、とは言わないよ」

気づいた時には触られていた。

爆豪のすぐ傍、触れ合えるような距離にテレポートし、即座に接触してきたのだろう。個性を無効化する右手で。テレポートであれば移動の気配は感じられない。本人の気配は認識阻害によって消されており、透明化した状態なら姿形さえ捉えられない。

ぐるん。

視界が反転。

全裸の美少女がこちらを見下ろし、右手を突き出して——爆破。熱波に襲われ、下へ、吹き飛ばされる。

「——！」

目を見開いた。

爆豪の技。

己の“個性”に意識を伸ばせば、ない。無くなった。奪われている。

幼少期、気づけば自分と共にあった力。

自らの半身とでもいうべきものが、無くなっている。

「か——」

返せ、と言いかけて、気づいた。

自分がどれだけ“個性”に執着していたのか。

奪われる可能性はもちろん知っていた。

島に来ればいち早く奪われるであろうことも。

理解してなお「自分にはこのやり方しかできない」と突き進んだ。

不器用なやり方だ。

爆豪勝己のやり方は、エンデヴァーのそれと似ているようでいて違う。

大人が生き方を変えられないのは、本人だけの都合ではない。周囲が求めるからだ。違う生き方をしようにも、残された時間が少ないからだ。

選択肢の多い若者が、敢えて他の選択肢を捨てるのとは、意味が違う。

女王が。

永遠が、視線を向けてくる。

「このまま、受け身を取らずにワンチャンダイブしたら、やり直せるかも」

「っ」

「なんてね。死んじや駄目だよ、爆豪」

蘇ったのはかつての記憶。

無個性だと思っていた幼馴染に何気なく告げた言葉。

何故知っているのか、などという、どうでもいいことを考えたのは一瞬。偶然であれ意図的であれ、そんなことはどうでもいい。

爆豪が言った事実は変えられない。

あの言葉を、今となっては後悔している。

雄英入学後、急速に追いついてきた出久。

自分が追い縋っている、と感じたのは一年の終わり頃だっただろうか。

口に出して認めたのは二年の中頃。

『手前エにも勝つ。誰にも負けねえ。覚えとけデク』

少年は、何故かとても嬉しそうに笑って答えた。

『ああ。僕だって負けないさ』

全てが清算されたとは思っていない。

永遠が卒業した後の話だ、少女は少年二人のやり取りまでは知らなかっただろう。だが、それも関係ない。

(ああ)

爆豪はこの時、初めて実感した。

(「個性」がなくなんのは、奪われんのは——こういう感覚なんだな) 悔しい。

自分に相手と同じだけの力があれば、そうすれば絶対負けない、など、ありえない思いさえ浮かんでくる。

身体に力が入らず、ガキの頃のように溢れ出す涙さえ、止めることができない。

落ちて。

落ちて。

半分ほど落ちたところで、かくん、と、落ち方が緩やかになった。  
見上げればもう少女はいない。

それでも、永遠が何かをしたことだけは確信できた。

「クソ。……俺の負けかよ」

地面に落ち、倒れた爆豪は、しばらく起き上がることもできず、その場に転がり続けていた。

## 19. 善戦

爆豪を止めた私は『ワープゲート』で転移。

移動先は、勢いよく中央へ突き進んでくる別のヒーロー。

『透明』かつ『認識阻害』かつ身体能力を解放した状態のまま、おもむろにぶん殴る。

振り下ろし気味に殴ったので、地面にバウンドしながら二メートルくらい吹っ飛び、動かなくなる彼。気絶してるだけだけど、向こうにしたら災難でしかないだろう。

「ごめんなさい、と、心の中で謝りつつ “個性” を奪取し、ついでに出身国内の適当な病院へワープさせた。

これで、彼が時間内に戻ってくるのはほぼ無理。

同じようにして何人かを排除して――。

「思ったより攻めの勢いが凄いなあ」

第二陣、第三陣の乗った船が続々と到着している。

エンデヴァー達、日本のヒーローが使い魔排除を優先してるのが地味に効いてる。

上陸を妨害できなくなれば数の利と勢いで圧されて守り切れなくなる。彼らを先に排除したいところだけど、それをするとう轟君の希望を叶えられなくなってしまう。

「これは、隠れてこそこそしてる場合じゃないかな」

私は別の場所へと転移しながら『透明』『認識阻害』をオフにした。ドレスを作って羽織るのを忘れちゃいけない。

透明でいる間はいいとしても、丸見えの状態で全裸はただの痴女だ。

と。

「女王!？」

「大勢での来訪、歓迎しますよ――ヒーロー達」

悪役モードで嘯く。

転移先には三人のヒーローがいた。固まってくれていると手間が省けていい。

私は地面を蹴って、一番近い相手に肉薄。拳を振るって、

『報復』！』<sup>アウエンジ</sup>

『引き受け』！』

『苦痛増幅』！』

拳が腹に突き刺さると同時、三つの声が響いた。

私のお腹に、私のパンチと同等、否、《倍》の衝撃。

対するヒーローの方はやりと笑って踏みとどまる。代わりに、や  
や後方にいた紅一点のヒーローがふらつと身体を揺らした。

——なるほど。

食らったダメージを相手にも与える“個性”に、仲間の怪我や痛み  
を自分に分ける“個性”、対象の受けるダメージを増幅する“個性”  
のコンボか。

反射は「絶大な攻撃力を持った相手にどう対処するか？」という問  
題のシンプルな答えだ。

いくら私でも、自分の怪力を相手にするのはまずい。

半分持つていかれる前提で強めに殴るとその二倍が返ってくる、で  
も弱めに殴ると有効打にならない、と。

「我々はお前になど屈しない！ いくらでも殴ってこい、女王！」

痛みを堪えながら不敵に笑う彼の姿は、ヒーローと呼ぶのに相応し  
い。

「いい覚悟ですね。……ですが、悪人が真つ向勝負に乗るとは限りま  
せん」

右手を突き出して彼の肩を掴む。

更に左手で触れて『A F O』『ワープゲート』を起動。『報復』の

彼は“個性”を奪われた上で姿を消した。

悲鳴を上げる紅一点。

私にはやりと笑って残り二人に襲い掛かった。

「さあ、あなた達も彼と同じ目に遭わせてあげます！」

いや、まあ、故郷に帰すだけなただけだ。



日本ヒーロー主導による制海権の確保は大詰めを迎えていた。

当初はうんざりするほど溢れかえていた海、空の魔物達も「距離を取って戦えればそう怖くない」とわかってしまえば、後は時間の問題だった。

弓や銃による射撃、遠距離に届く「個性」などを用いて掃除した結果、移動はスムーズになり、島に乗り付けて上陸を始める船もどんどん増えている。

(頃合いか)

熱線の投射を休止してエンデヴァーは思った。

幸い、ここは船上。

身体を冷却したければ水を汲んで浴びればよく、残った水分は蒸発させれば済む。消耗を殆ど気にしなくため、彼との相性は悪くない。

が、そろそろ次の段階に移る時――。

「エンデヴァー」

と、水面からざぼりと顔を出す者がいた。

「フロツピーか」

蛙吹梅雨。つい先日、雄英を卒業したばかりの、最も新しいヒーローの一人だ。

『蛙』の個性によって水中を得意とする彼女は海の魔物の掃討に協力してくれていた。もともと人と争いに来たわけじゃない、とは本人の談。

その彼女が真剣な表情で報告してくる。

「永遠ちゃんが姿を現したわ。侵入者を気絶させては送り返してる」

「なんだと」

エンデヴァーは思わず唸った。

そこへ駆けてくる足音。イレイザーはエンデヴァーと梅雨の顔を見て頷く。

「その様子だと確認済みか」

「ああ。今、肉眼でも認識した」

島の上空に新たな蝙蝠が滞空し始めている。

第二陣を隠していたのかもしれないが、どちらかといえば「新しく作った」というほうがありえそうな話に思えた。

『吸血鬼』。

出血すると魔物を作り出してしまふ。『個性』の持ち主が女王に『救われた』という情報はエンデヴァー達の耳にも入ってきている。

「敢えて姿を現したのはそういうわけか」

「隠れて一人ずつ討つより、相手に来てもらう方が効率が良い。そして、出血すれば手駒を増やせる」

あくどい手口だ。

姿を現した以上、簡単にはやられない算段ができてはいるはず。それでも、メインターゲットを狙わないなどありえない。

反女王派の大半が一点を目指し、塵も積もればと攻撃を加える。

生半可な攻撃で傷がつけばつくほど女王は魔物を補充し、『個性』のストックを増やすことができる。

そして、一度やられた者は故郷へと送り返される。

「……待て。本当に、女王を倒せば戦いは終わるのか？」

ふと、そんな疑問が湧き上がる。

ボスキャラ、しかもラスボスが時間稼ぎのためのブラフ。

考えたくはないが、そもそも『二倍』による分身も可能なのだ。表に現れた女王が本体という保証はないし、何より彼女は「儀式を行う」と口にしていた。

島の中央に降り注ぐ輝きが「それ」であることはほぼ間違いない。となれば、儀式は既に女王の手を離れたと見るべきではないか。

「両方止めないとダメ、ってセンもあるんじゃないかしら」

これは船に上がってきた梅雨の意見。

ありえない、と言い切るにはあまりにも思い当たる節が多い。

あるいは、この島自体がブラフという可能性も、

(いや。おそろしく『彼女』はルール設定で嘘はつかない)

明かされていないルールがあったとしても、口にしたルールに嘘は



ない。少なくともそう考えられる程度には、エンデヴァーはあの少女を信頼していた。

「どうしますか、エンデヴァーさん」

ほんの一秒ほど思案した後、エンデヴァーは答えた。

「私は世を騒がせる不埒者を成敗しに来た。余計な考えは全て捨てる」

「わかりました。……なら、俺は俺でやらせてもらいます」

「どうするつもりだ？」

「決まっているでしょう？ 負傷者の回収と治療。それから、傷つく人間自体を減らしに行きますよ」

教師らしいやり方だ。

ここに来ているヒーローの中には雄英の卒業生もいる。であれば、イレイザーは想像以上に顔が広いはずだ。彼はそうした者達を放っておけない。

同時に、自分の役割をわかってもいる。彼は『合理的』だからだ。

「エンデヴァー。相澤先生」

「なんだ」

「先生と呼ぶな」

呼びかけに二人が応えると、梅雨は感情の読めない顔で言った。

「きつとあなた達が戦いの鍵だわ。頑張って」

二人の共通点。

それは、女王から“個性”を返されたということ。

もちろん女王は複製を取っているだろう。ということは——『ヘルフレイム』と『抹消』は彼女にとっても重要だということ。

重荷をあらためて自覚したエンデヴァーは黙って頷き、そして船上から空へと上がった。

ほぼ同時に。

女王がいるであろう場所の付近に大氷塊が生まれるのを、彼は見た。

(そこにいるのか、焦凍)

どのみち向かうつもりだった場所だ。

そんな風に自分へ言い訳しながら、エンデヴァーは大氷塊を目指した。



一方、日本国内では、街にぬいぐるみが溢れていた。

クマにパンダ、ライオンにオオカミ、キツネにサル、果ては鳥まで。様々な動物型ぬいぐるみ達が歩く姿に、年寄り「百鬼夜行か」などど口走っていたが、見た目的にはそんなおどろおどろしいものではなく、むしろ「どーぶつさん大行進」といったノリである。

とはいえ異常事態。

当初は不審がられ、警察が呼ばれるケースもあつたものの、ぬいぐるみ達は人を襲うこともなく、車や自転車の通行を妨げるでもなく、ただ街中をお散歩でもするかのように歩いているだけだった。

「あ、くまさんだー」

道行く子供などには大好評で、警戒して近づこうとしない母親とは対照的に自分から駆けよって、

「くまさん、握手してー」

「くま」

差し出された手をクマのぬいぐるみが取った。というか鳴いた。

本物の熊が「くま」などと間の抜けた鳴き方をするわけがないのだが、子供は大興奮。

「くまさんと握手したー!」

と歓声を上げ、親をおおいに困惑させた。

そんな時、

「お、お母さん。その子を置いてどっか行けよ」

ナイフを手にした大学生くらいの青年が、二人の前に現れた。

手は震えているが、瞳はギラギラした光を宿している。

「ああ、お母さんだけ残るでもいいや。お、俺の『個性』は血を力口

リーに変えられるんだ。殺すのに躊躇とかしないからな」

「ひっ。だ、誰か、助けてください……っ！」

「無駄だって。女王も、分身に街を守らせるとか言っときながらいな  
いし。最後のチャンスに、個性”使っておかないと——」

そこに立ちふさがったのは、クマさん。

一メートルにも満たない身長の方は、それでも果敢に（表情は変  
わっていないが）母娘の前に立つ。

ふわふわでもこもこの身体とつぶらな瞳はとてもチャーミングで、  
「な、なんだよお前」

「くま」

「馬鹿にしてるのかよ……っ！」

今、この時にも敵ライバルになろうとしている青年には、挑発としか受け取  
れなかった。

ギザギザの入った、いかにも凶悪そうなナイフが振り上げられ、

「くま」

「がっ!?!」

クマぱんちが青年を吹っ飛ばした!

「え?」

「わ」

母娘は、ぬいぐるみに殴られて吹き飛んだ青年を呆然と見つめた。

何かのシヨ〜?

いや、そんなわけがない。ナイフの質感は明らかに本物のそれだ  
し、青年の狂気は間近で見たから良くわかる。

「こ、この……っ!?!」

「くま」

「げふあっ!?!」

追い打ちでもう一発殴られた青年は気絶。

「くまさんすごーいー!」

娘の方は大喜びである。

幼女に抱き着かれながらも、クマのぬいぐるみは表情を変えず、母  
親に向けてジエスチャーする。

電話をかけるようなポーズ。

「警察を呼べってこと？」

「くま」

正解らしい。

慌てて頷き、スマートフォンを取り出した母親は、この段階になってようやく気付いた。

街を練り歩いているぬいぐるみ達はお散歩をしているのではない。街を守ってくれているのだ、と。

「あなた達のご主人様は誰なのかしら」

謎の鳴き声以外発せられないぬいぐるみに代わって娘が答えた。

「きつと永遠ちゃんだよー」

「ああ」

無駄にファンシーで、ちよつと気の抜ける感じは確かにあの娘かもしれない。母親は妙に納得して頷いた。

もしその光景を当の永遠が見ていた場合、きつとげんなりしただろう。

とうか、使い魔であるぬいぐるみの記憶を後で読み取って、実際じたばたと悶えた。



謎のぬいぐるみ達によって治安が守られたのは日本国内だけではなくかった。

アメリカ、イギリス、その他あらゆる国で同様の現象が見られた。誰が見ても可愛く、戦意の削がれる姿をした彼らは、敵や暴漢に対して果敢に立ち向かった。

火を吹くわけでも腕が伸びるわけでもない、ただ機敏に動いてぶん殴るだけの戦い方だったが、彼らは下手なヒーローより強かった。

お陰で、街を守るぬいぐるみ達をあちこちのマスコミが報道した。

もつとも、ぬいぐるみ達の動向に一喜一憂していたのは幼い子供達くらいだった。

何故なら、島での『女王派』vs『反女王派』の様子も中継されていたからだ。

多くの人が固唾を飲んで戦いの様子を見守っていた。

戦いが本格化してからは故郷に送り返されたヒーロー達が「自分の目で見た戦いの様子」を証言し始めた。

戦いの状況を知った女王支持者達は強く祈った。

祈りはエネルギーとなって空へ上り、島へ集った。

## 20. 決戦

剣を、槍を、盾を、銃を打ち砕く。

炎を、氷を、電撃を、風を、土塊を払い、あるいは受け止める。

『透明』『認識阻害』の代わりに簡易版といえる『気配遮断』をオンにした私は『剛翼』を飛ばたかせ、羽根を撒き散らしながら戦場を舞う。

戦法は単純。

一気に近づいて殴り飛ばし、気絶させるだけ。

「九十九」

一人倒したらすぐさま跳躍、あるいは飛翔、時には転移。

次のターゲットのところへ移動してまた殴る。

「百」

倒れているヒーローが結構増えてきたので、爪を『槍骨』で伸ばして彼らに向かわせる。

「今だ！」

「そう簡単にいくと思いませんか？」

ここぞとばかりに集中砲火を向けられそうになったので、ヒーローの一人を手元に『転送』して盾にした。

怯み、手が止まった一瞬を利用して爪の槍を突き刺すことに成功。

『A F O』『ワープゲート』で個性奪取と送還を終えると、あたり

がだいぶすつきりした。

それでも後から後からわらわら湧いてくるのが頭痛いけど。

「構うな、撃て！」

「……は？」

声は、私が捕まえているヒーローではなく、武器や「個性」を準備していた残存戦力の中から聞こえた。

「我々は死ぬ覚悟をしてここに来たはずだ！ 女王討伐の礎となって死ぬのなら奴も本望だろう！」

「ちよつ、正気!?!」

思わず叫んでしまう私。

非殺を心がけている程度で善玉を気取る気はないけど、本人以外が言っちゃつたらもう悪役じゃない!?

なんだこいつ……とサーチ系の「個性」をフル動員してそいつを見れば、ああ、なるほど。ヒーロー面した敵が紛れてたのか。

敵ついても色々いる。大粒小粒、顔がわかっているのにわかってないの。色んな国の人間がごっちゃになつてこの状況では隣にいるのがヒーローかどうかもわからないわけだ。

「あんなこと言ってるけど、いいの?」

「か、構わん……!」

いや、めっちゃ声震えてるじゃないですか、人質の人。

まあ、本人一応いいって言ってるし死なせてあげても……って、

「なるわけないでしょ!」

「う、撃てー!」

「うおおおおおっ!!」

人質の人は「個性」奪つてお帰り願ひ、私は代わりに同士討ちをけしかけた敵を盾にした。

「はい。撃つていいですよ?」

「ま、待て、撃つな!」

「さつきと言ってること違うんだけど?」

っていうか、もう攻撃来てるし。

「あ、あああ、あああああっ!」

「うるさい」

「個性」だけ奪つて後ろに捨て、ワン・フォー・オール O F A 全開で腕を薙ぐように振るう。それだけで攻撃の八割がたは力を失い、残った攻撃も私にはちよつと痒いかなー、程度でしかなかった。

擦りむいた程度の傷口から数匹の蝙蝠が生まれて羽ばたく。

対して、ヒーロー達はさつきの風圧で転んだり体勢を崩したりしていた。

「さて。その敵に踊らされて殺人を犯そうとしたヒーローさん達。何か申し開きはありますか?」

ざわり、と、動揺が広がる。

敵だったのかと驚く者、ただのハツタリだと切つて捨てる者、裏切り者がと敵に憎しみを向ける者、と様々な反応があつて――。

「そのくらいにしておいてやれ」

私の後ろで転がつていた嘘つき敵が氷に閉ざされた。

見れば、轟君が自分に襲い掛かつてきた相手を残らず凍らせてこつちに歩いてきていた。

「敵に説教される奴らが可哀そうだろ」

「それもそうだね。……それに、そろそろ」

「ああ」

大気を歪ませながら飛んでくる大柄な男性ヒーローの姿。

「どいてろ」

威厳たつぷりにそう宣言した彼は、地面に着地する間さえ惜しむように、私に向けて全身から高熱を放出してきた。

轟君が目ざとく飛びのき回避する中、私は棒立ちのまま佇み、その身を焼かれた。

「やったか!?!」

誰かが叫ぶけど、もちろん、この程度でやられるわけがない。

「さすがにちよつと熱かったかな」

焼き鳥くらいの焦げ方をしながら苦笑すると、エンデヴァーはちよつと鬱陶しそうに顔をしかめた。

「い、今ので足止め程度にしかないのか!?!」

怪獣にでもなった気分、私は地面を蹴り、ヒーロー達を蹴散らしにかかった。



襲い来る氷の壁を跳躍して避ける。

何度これを繰り返したか。

人間一人がすっぽり収まるサイズの壁によって立て続けに左半身を狙われたエンデヴァーは、回避の方向を誘導され、気づけば人気のない湖に誘いだされていた。



「素直に乗ってくれて助かったぜ」

そうして彼の前に立ったのは、良く知っている少年——否、男の顔。

「よう、エンデヴァー。真剣勝負だ。嫌とは言わせねえ」

「焦凍」

「ああ。『轟』を名乗るわけにもいかねえし、ヒーロー名も使えねえ。だから、俺はただの焦凍だ。あいつらと一緒にでな」

「……勘当したつもりはないが」

妻の冷ならば「道が分かれてもあなたは私の子よ」とでも言うだろうが、生憎、エンデヴァーはそこまで器用ではない。

それでも、同じ男である息子には十分に伝わったらしい。

苦笑を浮かべた焦凍は、すぐに表情を引き締めて言った。

「勝負だ、No. 1ヒーロー」

「……無論」

直後、互いのプロミネンスバーンが正面からぶつかり合った。

競り勝ったのはエンデヴァー。

残りの熱気をモロに受ける形となった焦凍は——。

「む……！」

「どうしたエンデヴァー、ぼうっとしてる場合か？」

特段、ダメージを受けた様子もなく駆けてくる。

スピードを落とさないままに両手が持ち上がり、膨張した空気が熱を帯びて殺到してくる。

反射的に炎を噴射し、飛び上がる。

『膨冷熱波』の最も単純な対処法は距離を取ること。広がれば広がるだけ勢いも熱量も落ちるのが道理。

だが、追い打ちが来るのは予想できる。

（なりふり構っている暇はないか）

地上にいる焦凍を見下ろし、プロミネンスバーンを放つ。

予想通り、再び同じ技が衝突。

（結果は同じ、か）

牽制として更に必殺技を連射しつつ、彼我の力量差を認識する。

熱、炎を操る技だけを見ればエンデヴァーにやや分がある。やや、

だ。恐ろしい成長速度。同じ年の頃のエンデヴァーならこの時点で既に敗北していただろう。

だが。

負けるわけにはいかない。父親として、ヒーローの先達として。情けないところは見せられない。

「猿真似ばかりか、焦凍！」

糸状に伸ばした炎を伸ばせば、焦凍はそれを右手で払った。

彼の身体は左が熱を、右が冷気を操る。

冷気を纏った右半身なら、エンデヴァーの攻撃をほぼ無力化できる。

「派手な技ばかりが能じゃねえってことだ」

更に右手が振られると、空気中に無数の氷の針が生まれた。

「これは……！」

殺到してくる針から逃れるため、空中で再び熱噴射。

一気に焦凍から距離を取ると、そのまま湖へと飛び込む。

(身体が冷える)

勢いに任せて沈み込み、外から放たれた高熱をやり過ごす。

水面近くの水が何十リットル分も蒸発したのを感じつつ、十分に冷えた身体で飛び出せば、焦凍は両手に剣を手にして待っていた。

右手の氷の剣と、左手の炎の剣。

“個性”を飛び道具にできるエンデヴァー達にとって、わざわざ近接武器を持つのは愚策だが――。

「ふっ……！」

案の定だった。

様子見として拳に乗せた炎――赫灼熱拳を放てば、氷の剣が瞬時に盾へ進化、焦凍を守って消滅する。

焦凍は氷の剣を再生させると同時に炎の剣を投擲。投げられた剣は炎の網へと変わってエンデヴァーを襲ってくる。

無論、炎を操るエンデヴァーには効かないが、

「長期戦は望むところか」

「ああ。俺が満足するまで付き合ってもらおうぜ、エンデヴァー！」

死力を尽くさなければ勝てそうにない、と、No. 1ヒーローは理解した。



「五百二十二」

気づくと、私のいる島の一角はひどい有様になっていた。

地面はあちこちが割れ、へこみ、穴が開いている。

植物なんて残っておらず、代わりに破壊された武器や装備の残骸が散乱。

っていうか、再生するのいいことにばらまきまくった私自身の羽根も「これでもか！」ってくらい見える。

「ちよつと酷すぎるかな」

私は適当な個性を使って地割れや陥没、穴を塞ぎ、羽根や装備の残骸を塵にした。

荒地地というしかなかつたフィールドには草が茂り、花が咲く。

どうだ。こんな素敵な場所にされたら戦う気も失せるんじゃないだろうか。

「馬鹿な、遊んでいやがる……！」

いや、そこで真面目に取られても。

まあ、ある意味示威行為ではあるんだけど。

「時間は……」

一人が空を見上げる。

気づけば、日はだいぶ高く上っている。正午まではあと一時間とあったところ。

私は時計が無くてもわかるので正確に言うと、あと一時間と三分だ。

「急がないといけませんね」

さつきからちよくちよく素に戻ってるので今更必要ない気がしつつも、私は女王様モードを続行。

「急ぐのは私ではなく、あなた方ですが」

「くっ……」

「無駄に焦らなくて済むように、こうして差し上げましょうか」

『夜』を展開。

辺り一帯が闇に包まれ、正真正銘の夜が来る。

空には星が瞬き、太陽の光はここに届かない。

デクくんとの一戦を知らない者もいたのか、ヒーロー達は驚き、歯噛みし、どうしたら勝てるのかと視線をさまわす――。

「これは好都合」

一人の男が私の正面に立った。

「初めてまして女王様。お目にかかれて光栄です」

「どちらさまでしよう?」

一言で言えば「派手な男」だ。

全身を覆うスーツは自由の女神でも模したような衣風のデザインだけど、よく見ると中身は厚みのあるしっかりしたバトルスーツ。トゲトゲした冠はいかにも邪魔つけで、しかも身に着けたマントには星条旗がプリントされている。

これで出身国があそこじゃなかったら文句言つてやりたいところだけど、

「私は『ユナイテッド・ジェネラル』。栄えあるステイツで一番のプロヒーローさ」

「い、一番?」

「自称です」

「なんだ自称か」

ギャラリーと化した他のヒーローが教えてくれた。

いや、でも、この人――。

「フツ。確かに、君達の国で言うビルボードチャートでは未だトップに輝けていない、未熟な身。しかし、実力では劣っているつもりはない」

「アメリカで一番強いヒーローだ、と?」

「それくらいのが概がなければトップになど立てないだろう?」

確かに。

日本と比べて圧倒的に広く、圧倒的に自由な国。

当然、日本とは悪党のスケールも違うはずで、そんな中で一番を取りたいなら生半可な気持ちでは駄目だ。

ばさつとマントを翻した男——ええと、ジェネラルは不敵に笑い、「さて。手合わせ願おうか、女王」

「あなたも、私の死がお望みですか？」

「違う。私は民の代弁者に過ぎない。君は世界を変えようとしているのだろう。ならば、旧世界からの反発をその身で受け止めるべきだ」「死ぬかもしれませんが……」

「構わないさ。手加減する余裕がないほど君を本気にさせられたなら、それだけ私が強かったということだ」

やっぱり。

ふざけた見た目だけど、彼は強い。

圧倒的なまでの自信と、その自信を証明する実力。

そして何より心の強さがある。

「さあ、行くぞ。うっかり殺してしまつたら申し訳ない！」

彼の、ジェネラルの「個性」は——。

「星よ！ 我に力を貸したまえ！」

『星の戦士』

星々にちなんだ力を振るうことができ、星が見えている時は戦闘力が飛躍的に向上する！

『火星』！

「っ」

足元から火柱が立ち上り、私の全身を包んだ。

熱い。

火力で言えばエンデヴァー並み！

炎を振り払って一步前進。ついでに『夜』を消して弱体化を図れば、

『月』！ 更に『太陽』！

「あああっ!？」

疑似的な夜空を自力で作りだし、私に向かって熱光線を放射。

火柱で焦げた状態の私は更に身体を焼かれ、さすがに悲鳴を上げ

る。

「使える力は星単独だけではありませんよ！ 『射手座』！ 『獅子座』

！ 『蠍座』！」  
スコルピオ

空中に生まれた矢が次々と私を突き刺し、創造された獅子が牙を剥いて肩口に噛みつき、針というか槍のように変貌したジエネラルの腕が振るわれる。

「できれば、かのオールマイトと戦ってみたかったところですが、あなたを代わりにさせてもらい——！」

「そっか」

振るわれたジエネラルの腕を私は掴んで止めると、空いている左拳を彼の腹に叩き込んだ。

「なら、『OFA』だけで相手になりましょう」

「え、あの、ちよっ!?!」

「全盛期のオールマイト伝説なら秒間何百発とか余裕ですからね」

ジエネラルは強敵だった。

数々の星、星座の力を借りて想像以上に粘ってきたけど、格闘戦が私にとっても得意分野なのをいいことにぼっこぼこにしたら、最後には「ごめんなさい」してくれた。

ちよつと疲れた。

ふう、と息を吐いて、私は他のヒーロー達に向き直り、

——銃声。

死角から放たれた銃弾を、私は振り返って叩き落として。

銃声に隠れて射出された小さな針状のアンブルを身体に受けた。

この、毒は。

デクくんとの戦いがフラッシュバック。

「油断したな、女王」

ギャラリーの一人が淡々と呟くように言った。

## 21. 勝敗

「ひどいわ。ゲームみたい」

ヒーロー名「フロツピー」——蛙吹梅雨は、人の気配の少なくなつた島を中央に向かつて進みながら、一人眩いた。

最初は遠かつた山が今はだいぶ近づいている。

残っていた化け物を倒しながらの移動だったが、あらかた倒しつゝしたのか、襲ってくるものはとうとういなくなつた。

ここしばらくはヒーローにも敵にも出くわしてズイランいない。

気絶している人間ならたくさんいたが。彼らについては外傷の有無を確認し、可能な応急処置を施してあとは放置した。永遠が発見すれば「個性」で送還してくれるだろうから、梅雨が運ぶより確実に速い。

転送能力は本当に反則だ。

一回ミスしたらスタート地点に逆戻り、倒した敵は復活しない代わりに雑魚が有り余るほどいて、レベル上げなんてシステムはなく、ラスポスが自分から戦いを挑んでくる。これがゲームだったら多くの人が「金返せ」と言っているところだろう。

ぺたぺたと一定のペースで歩きながら、梅雨は誰もいない虚空を見つめて、

「これで世界は本当に良くなるのかしら。ねえ、透ちゃん」

「え、バレちゃった!? どうしてわかつたの!?!」

ないはずの返答があつた。

梅雨は、声のした方向に顔を向けなおして答える。微妙に見てる方向が違つたのだ。

「独り言よ。島に上陸してから五十回は言つたわ」

「なんと!?!」

そんな方法があつたのかと驚愕する友人——葉隠透に、くすりと笑う。

「ける。透ちゃんこそ、無視して攻撃すれば良かったのに」

「えへへ。知り合いが相手だったからつい、ね!」

旧知である梅雨だからこそ成功した戦法だということだ。

「というか、乱戦が続いていた間は馬鹿みたいに独り言を言っている暇もなかっただろう。」

「ねえ、透ちゃん。お話に付き合ってくれないかしら」

「逆に言えば、今なら余裕があるということ。」

「うん、いいよ！ 戦うよりその方がずっといいよね！」

透はあっさり梅雨の提案に乗り——ついさつきまで纏っていた強烈な殺気を消滅させた。



「焦凍。『個性』の無い世界にお前はどんな夢を描く？」

「さあな」

湖畔の風景は戦いの間に様変わりしていた。

湖の水が三分の一以下にまで減少、そこに棲んでいた首長竜型の魔物は討伐され、水の中には魚の一匹も残っていない。

地面のあちこちには二人の『個性』による焦げ跡や陥没がみられた。

暑い。

エンデヴァーは身体に溜まった高熱に喘いでいる。水が減った今、湖に飛び込めば湖底に頭をぶつけかねないし、追撃も怖い。ヒーローコスチュームに搭載していた冷却機構も破壊されてしまったため、半ば以上スーツを破り捨て、上半身は裸になっている。

対する焦凍は未だ黒装束を纏ったまま。

多少の汗を浮かべてはいるものの、涼しい顔のまままで答えてくる。

「強いて言うなら、幼稚園や保育園、小学校の先生が子供に殺されない世界ってどこか」

「……………」

エンデヴァーの長女、焦凍の姉の冬美は小学校の教師をしている。

子供にものを教えるというのは大変な労力を伴う仕事だ。特にこの『個性』社会では猶更。子供が暴発させた『個性』による教師の



死亡事故さえ毎年一、二件のペースで起きている。

冬美が教師になりたいと言いだした時には思わず頭ごなしに「止めろ」と言ってしまった。後悔はしているが、今でもあの判断は間違っていないかったと思う。

「個性」がなくなれば死ぬ教師もいなくなる。

少なくとも、誤って殺されることはなくなるだろう。

「ヒーローの資格を失ったら、どうする」

「そうなってから考える。鍛えた身体は無駄にならねえ。警察とか警備会社とかアスリートとか、いくらでも道はあるだろ」

「若いというのは、羨ましいものだな」

焦凍の姿が眩しく見える。

代ごとに強くなるという「個性」を引き合いに出さずとも、子は親を超えていくものであり、記録・前例は破られていくものだ。

「なあ、エンデヴアー」

今度は焦凍の方から声をかけてきた。

エンデヴアーの身体が休まるのを待っている、というわけでもないだろうが。

「俺はヒーローに憧れていた」

「オールマイイトだろう」

「ああ。だけど、それだけじゃねえ。あんたのことだって凄いなと思っ  
てたさ」

「そう、か」

思いがけない言葉に、何を言っているのかわからなくなる。

時代の終わりに。

ヒーロー自体が終わろうとしているこのタイミングで、そんな言葉を聞くとは思わなかった。

手に冷気を生み出しながら、焦凍は言った。

「凄いやつらが頑張ったから今の時代がある。それはあいつだって認めてるだろ。だけだな。だからこそ、俺達は今もつと先に行きたいんだ」

「なら、その覚悟を見せてみる」

「ああ、言われなくても……っ!!」

放たれた吹雪に自ら突っ込みながら、エンデヴァーは闘志を振り絞った。

戦いを続けるために。

決定的瞬間まで戦いが終わらなくとも、焦凍の言う「凄さ」を少しでも見せつけるために。



「永遠ちゃんは本当に世界を救うつもりなのかしら」  
「もちろん」

透はあっさりと答えた。

「でも、言葉で保証したって安心できないよね!」  
「そうね」

世界が変わろうとしている瀬戸際だ。

永遠のやろうとしているのが本当は世界の崩壊でした、なんてことになったら目もあてられない。疑えるだけ疑うのは当然の話。

しかし、

「確かめるのはみんなが、一人一人、自分の目でやるしかないよ」

透の言葉には突き放すような厳しさがあつた。

「永遠ちゃんの心の中がどうなってるかなんて、私にだってわかんないもん!」

「人の心なんて誰にもわからないわ」

「そういう『個性』を持つてる人以外はね!」

この世界には絶対なんてない。

死んでも生き返る人間さえ存在しているのだから。

「私にだってわかってるわ。ここはみんなを納得させるための場なんだってこと」

「……………」

「儀式をするだけなら黙ってすればいい。殺戮や破壊が目的なら自分の手でやる方が楽しいでしょ」

ルール設定に不公平感はある。

正面から戦うのではなく、小細工、ハツタリ、何でもありの戦場だが、少なくとも「戦うチャンス」だけは与えられている。

ヒーローが、軍が、敵が。

旧世界が束になって阻止しようとして頑張つて、それでも止められなかったのなら、どうしようもなかったのだと、人々は「納得」できる。変わるべくして変わったのだと。

世界に知らしめるための戦いなのだ、梅雨は思う。

「じゃあ、梅雨ちゃんは どうするのか？」

くすりと笑った透が問いかけてくる。

「どうもしないわ」

戦場を見渡して答える。

視界には入らないが、広い島の全域が視認できるわけでもない。

戦っている人間はまだまだいるだろう。

「先生のお手伝いでもしようかしら。あのきらきらしたの、夜になつたらきつと綺麗でしょ。うっかりで化け物に殺される人を少なくともなくちゃ」

梅雨では永遠には敵わない。

今現在殺戮が行われているのなら止めるしかないが、そうではない以上、勝ち目がないのに向かつていくのは馬鹿のすることだ。

「そっか」

「透ちゃんの方から襲ってくるなら戦うしかないけれど」

「まさか。しないよ、そんな時間の無駄」

透の気配が消えると共に声だけが響いた。

「私の役目は永遠ちゃんのお手伝いだから。敵を排除するのが私の役目」

不可視の戦闘技能者は去っていった。

きつと、自分は彼女にさえ勝てなかっただろう。そう感じながら、梅雨は溜め息を一つつくと、円を描くように島の中を歩き始めた。



ジエネラル・ユナイテッドは見た。

銃声が響いた後、銃弾を防いだはずの女王が硬直するのを。ぐらりと倒れこむ彼女の身体に攻撃が殺到するのを。

「チャンスだ。殺れ」

この場にいるヒーロー達はチームというわけではない——別の船で乗り込んで来て、同じ場に居合わせただけの者がほとんどだったが、言われるまでもなく機チャンスである以上、動きだした者は多かった。

次々に撃ち込まれていく攻撃。

成人さえしていない少女相手の行いではない。顔を顰め、凄惨な現場から目を背けるようにして、流れを作った者を見る。

「何をしたんだね」

「毒だ」

特徴のない男だった。

顔は覆面で隠しており、全身をすっぽり包むコートを纏っている。体型が見えないので「男だ」と感じたのも声が聞こえたからでしかない。

もし、服を着替えられてしまえばそれだけで、判別がつかなくなるだろう。

「女王へ唯一、明確に効果のあつた毒物の改良型を打ち込んだ。あの時は奇策で無効化されてしまったが、動かれる前に潰しきってしまった問題は無い」

「毒だと……!? それがヒーローの行いか!?」

ジエネラルにとって戦いは神聖なものだ。

悪辣な敵であればまだしも、一定の誇りや矜持をもって戦う限り、ヒーローであろうと敵ライバルであろうと敬意を払うべきだと思っている。

だが、男は自ら服を脱ぎ捨てながら嘲笑した。

「貴様の蠍座スコルピオとて毒の技だろう、ジエネラル・ユナイテッド。戦いは合理的にするものだ」

「貴様……!?!」

驚愕した。

服の下に男の肌がなかったからだ。何も見えない。まるで、透明人間が服を着て歩いていたような。

「それと、私はヒーローではない。ここに来たのは単に、主の命令だ」

「主だとう？ それは一体——」

「大丈夫だよ、ジェネラル」

「!？」

声が聞こえた。

直後、夥しい数の蝙蝠が、魔獣が少女の身体から現れて、起き上がる少女を守るように立ちはだかった。

追撃は届かない。

立ち上がり、新しいドレスを生成した女王は、既に傷口を再生しきっていた。

ちらりと横目で見れば、覆面だけを残した透明男も驚愕したように立ち尽くしている。

「再生できるというのか……!?! 弱ったところにあれだけの攻撃を打ち込まれて、なお?」

「弱った、という認識がそもそも間違いなのですよ、葉隠栗也<sup>くりや</sup>」  
「っ!?!」

嫣然とした女王の言葉に今度は絶句する透明男——否、葉隠栗也。

葉隠、ということとは女王の側近、葉隠透の関係者か。

彼の主が誰なのかはわからないが、透とは違い、女王を殺そうとしていた、ということなのだろう。

とはいえ。

むしろ、問題なのはそちらではなく、

「今の私には危機察知のための『個性』があります。命が脅かされるような攻撃なら働いて、当たる前にわかります」

有効だったはずの毒が効かなかった理由。

「二度死にかけた毒に対策をしない。そんなことがありますか?」

そもそも、それを作った研究所は私が潰しました。サンプルを入手して自分で試すくらい簡単なことです」

「——」

危険なことをする少女だ。

話によれば、あの時の毒は自己増殖、自己進化を繰り返すもの。微量から量を増やして投与していけば安全、というものでもない。

そもそもの防衛機能が不足していれば「お試し」で死んでいてもおかしくなかっただろうに。

だからこそその、危機察知、か。

つまり、今の女王は、あの少年と対峙した時よりも遥かに強大で、かつ、遥かに「本気」だということ。

——勝てない。

ジエネラルは認識した。

彼女を倒すことはどう頑張っても不可能だと。

原子分解やブラックホールを用いたとしても、当てる前に察知されたのでは避けられてしまう。避けられない規模で攻撃する？ ワープできる相手が避けられない攻撃とは？

結局のところ、女王を倒すには当人に死を望んでもらうよりないのだ。

「っ、は、ははは……っ！」

膝が笑っている。

ジエネラルはくるりと踵を返すと、海岸に向かって歩き出した。

「何をしている、ジエネラル」

「撤退だ」

「何？」

「わからないのか？ 女王がその気なら、今この時点で我々は皆殺しだ。敗者は、勝者の望みくらい聞くものだ」

「腰抜けが」

なんと言われようと構わない。

苦笑を浮かべ、そのまま一步、二歩と進んで、

「腰抜け、ですか」

「なっ……!?!」

振り返れば、覆面を奪い去られた栗也がその姿を現していた。

お世辞にも整っているとは言い難い顔立ち。

身体は過不足なく理想的に鍛えているため、逆に顔の平凡さ、そして瞳に宿る輝きのギラつきが妙に気になる。

「なら、あなたも自分でかかってきたらどうです、葉隠栗也」  
「か」

目を、口を、大きく開いた栗也は鬼のような形相のまま女王に挑みかかった。

全身を凶器に変えた極限の格闘技術。

目にも留まらぬ速さで繰り出された手刀に、女王は、

「遅い」

音速に至ったのではないか、という鋭いパンチで栗也の身体を打ち据え、数メートルもの距離を吹き飛ばした。

地面に激突し、動かなくなる栗也。

「……ああ」

誰かの絶望の声が聞こえた。

「さあ、終わりにしましょうか」

儀式が開始されると予告のあった正午。

その直前、すべての反女王派が駆逐され、旧世界側の敗北がほぼ確定した。

## 2.2. 変革

正午。

島の中央、城の中から光が溢れた。

あらゆるものを浄化するような白い光。

十秒も経たずに収まった後に残ったのは変わらない光景——いや。

島に集まってくる小さな光とは別の光が生まれている。

城から放たれる、より大きめの光は島から世界へと広がっていく。

最初に光を受けたのは、日本に住む一人の少年だった。

自分の元に降ってきた光に思わず目を瞑った彼は、痛みも何も無い

ことを知るとそっと目を開け、そして気づいた。

「個性が、使えなくなってる」

それから、世界中で同じ現象が発生した。

後に集計され、導き出された推計によれば、およそ一秒間に一人の

ペース。

まさに奇跡と呼ぶしかない、変革の始まりであった。



一時間も経つ頃にはテレビやSNSなどを通し、世界も状況を理解していた。

見計らうように各メディアに送られてきた『女王』からの映像には、

彼女からの新しい声明が入っていた。

『儀式が始まりました。既に想像されているかもしれませんが、これ

は我が城に設置されていた「とある装置」によるものです』

世界中の人々の「個性に消えて欲しい」という願いを集め、実行する機能を持った装置。

作成者である女王が停止命令を出すか、破壊されない限りは半永久的に人々の「個性」を消滅させ続ける。

『止めようとする者達との戦いには私達が勝利しました。これからは今まで以上の速度で、世界から個性を消していくことができます。奪



われるのではなく消滅です』

装置によつて消された「個性」は永遠に戻つてこない。

女王を殺したところで完全な解決はありえなくなつた、ということだ。

こうなつてなお、抵抗することに意味があるか。

もちろん、早く対処すればそれだけ多くの「個性」を守ることができる。だが、一秒後に自分の「個性」が無くなつていられるかもしれない状況で立ち上がれるヒーローがどれだけいるだろうか。

『なら装置を破壊しよう。そう考える方は多いと思います。です。で、装置はこの島の地中、海底深くに封印しました。機能自体はそこにあつても何ら問題ありませんので』

装置には当然、防御措置が施されている。

女王の持てる「個性」を総動員して作成されたという装甲、防御殻はそこらの兵器では破壊することは敵わない。ましてそれが島の地底深く、海底レベルの深度に埋まつているのだ。まずは島を根こそぎ吹き飛ばさなくては攻撃を届かせることさえできない。

核にせよ爆弾にせよ、その他の兵器にせよ。

各国が持てる軍事力を総動員すれば数日のうちに破壊できるだろうが——果たして、そこまでして破壊するメリットがあるかどうか。

例えば考えてみればいい。

世界随一の軍事大国アメリカが総力を挙げて装置を攻撃した。その際について、軍事に優れた数か国が同時にアメリカ本土を攻撃したら。あるいは戦争には発展しなくとも、攻撃に参加しなかつたという経済的アドバンテージをもつて軍事強化、経済発展を成し遂げ、国際的な地位を底上げする国があつたら。

関わる人数が多くなればそれだけ多くの思惑が入り乱れる。

国内でのパワーバランス。国内でのパワーバランス。国家元首が装置の破壊に率先して取り組むと宣言すれば、野党からバッシングが飛ぶのが政治というものだ。

他の国にやらせて結果だけを得られれば一番良いのは当然の話で、そうなれば各国、他国の出方を見るための協議、情報戦を行うしかな

い。

結論としては、本気になれば簡単に破壊できる。だが、各種のしがらみのせいで破壊は現実的でない、ということになる。

『これから、世界から個性が消えていきます。最終的には私自身の個性も消えてなくなるでしょう』

少なくともしばらくの間、個性消失が続く。

暗にそういう認識を刷り込んだ上で、女王は告げる。

『そこで、皆さんにお願いがあります。考えてください。これからこの世界がどうなったらいいか、この世界をどうしたいか』

抽象的だが、ことこの事態に至っては無視することのできない問い。

『私は儀式を成功させ、世界から個性を消す仕組みを作りました。では、皆さんが無くなって欲しいと望む個性とはどういうものでしょうか？ 真っ先に消えるべきはどんな個性ですか？ 本当に、全ての個性がこの世から無くなるのが皆さんの望みですか？』

ここに来て何を言うのか、と多くの者が思った。

そこへ女王は続けて告げる。

『私は、無個性同士の子供には個性が宿らないと考えています。ですがこの考えには根拠がありません。本当の意味での無個性同士が子供を儲けた例が少なすぎるからです』

本人も周囲も無個性だと思っていたが、実は何の役にも立たない個性を持っていた——なんていう例は、世界中に数多く存在している。

個性は無いが個性因子だけは保持している、そんな人間がいないという保証も今のところはできていない。

更に言えば、個性因子のない『本当の意味の無個性』同士が子供を作ったとして、その子供に絶対に個性が生まれないという保証さえない。

『装置が機能している限り、新たに産まれた子供の個性も消すことができます。ですが、装置は壊れます。今すぐではなくても、壊そうという者が現れないとは限りません』

だから、考えなければならぬ。

『個性のない社会を望んだ皆さん。皆さんが望んだのは「個性はないが争いの多い社会」でしょうか。それとも「個性がなくなつて平和になつた社会」でしょうか?』

個性が消えた代わりに軍事闘争が激化したのでは意味がない。

『個性のある社会を望んだ皆さん。皆さんが望んだのは「個性によつて生まれる便利さ」でしょうか。それとも「力を振りかざす爽快感」でしょうか?』

それぞれの思いの根本をもう一度問いただされる。

『装置の根本は皆さんの願いを叶えることにあります。個性を消すこと以外の機能はありませんが、消す個性に優先順位をつけることはできません。そして、皆さんが考えたことを皆さん自身が実践することは、装置がなくても可能です』

個性がなくなれば世界が平和になるわけじゃない。

個性がなくなつたから全てが終わつてしまうわけでもない。

『もう一度聞きます。皆さんの願いは、なんですか?』



正午と同時に装置が本格起動した。

戦いはギリギリのタイミングで終わつたので、そこからは楽になるかと思いきや、ぶつちやけその後のの方が忙しくいらだった。

傷ついた仲間の治療に、島内で気絶したままの侵入者達の送還、戦いでボロボロになつた島の修復に、装置の防御を強化して地底に移動させる仕事、更には世界に向けた声明の発信まで、やることは山積みだった。

下手したら即行ミサイルが飛んできてたかもしれないし。

でも幸い、一時間以上が経つた今も主要国の基地が動きだす様子はない。まあ、少なくともしばらくの間——数日か数週間か、数か月かの間は撃つてきても私が撃ち落とすんだだけ。

「みんな、本当にありがとう。お疲れ様」

一緒に戦つてくれた仲間、サポートしてくれた仲間、物資やお金と

いう形でバックアップしてくれた支持者達、みんなを城の一階の広間——装置のクリスタルが置かれていた場所に集めて、お礼を言った。「まだまだ気は抜けないけど、これで一つの区切りがついたと思う。もし、装置が壊されたとしても、世界はきつと変わっていくと思う」本格起動した装置は今まで溜め込んだエネルギーと新しく供給されてくる大量のエネルギーを使ってどんどん「個性を」消している。毎日何千、何万つという規模で「個性」が消えたらさすがにみんな考えざるをえない。

人びとの暮らし方も変わっていかざるをえない。  
本当に「個性」は必要だったのか。

必要ないと思う人が増えれば「個性」消失のスピードは上がる。やっぱり必要だったと全世界の人が思えば、エネルギーを補給できなくなった装置は機能を停止するだろう。

どんな結論が選ばれるとしても、それはこの世界の現状をみんなが認識した上で、みんなが選んだ結論だ。

あるがままの状況をただ受け入れるしかなかったのとは、意味がまるで違ってくる。

「だから、ありがとう。ここからはみんなのやりたいようにしてください」

深く頭を下げると、みんなからの反応はなかった。

え、あれ、しーんとしすぎじゃない？ そんなに変なこと言った？  
それとも、そんなに人望なかったんだろうか。だとしたらショックというか「下剋上じゃあ！」みたいな展開を警戒した方が良かったりする？

心を読めばわかるわけだけど、味方にああいう「個性」は使いたくない。というか正気度<sup>SAN</sup>が削られるから敵相手でもなるべく控えた

い。  
「貴様はどうするのだ？」

「そうです。永遠さん、帰るところはあるんスか？」

顔を上げた途端、尋ねてきたのは甚平姿の中年男と、羽根の一本さえ無くなったグラサン青年だった。

こつち側についたホークスは、なんだかんだと打ち漏らしていた侵入者達を城周辺で撃退する役目を立派に果たしてくれた。

城の上から羽根を飛ばすだけの簡単なお仕事なのでそこまで危険はないかな、と思つてたんだけど、そこは向こうの戦力が思つた以上に高かつたせいか、時折普通に交戦せざるを得ず、結果的に羽根は全部損耗した上に全身ボロボロになっていた。

いのちをだいに（意識）つて言つたのに！　と言つたところ「死んでないんだからいいじゃないですか」と真顔で言われた。うん、ちよつと色々、使命感とか命の使い方とか、その辺の意識が狂い過ぎだと思ふ。つて、私に言われたくないか。

エンデヴァーの方はギリギリまで轟君と戦つていたせいもあつて送り返し損ねたというか、ボロボロ&体力ゼロの彼を冷さんのところに送るのはちよつと酷いんじゃないか、ということここで居て貰つた。

『巻き戻し』は受けたくない&完全には治さないと欲しいと我が儘を言うので、治療系の「個性」で最低限だけ治したうえで食料を渡してエネルギー補給、休憩をしてもらつていた。

さすがに戦うのはまだ無理だろうけど、普通に話をするくらいなら問題ない。

「どうつて、ここで死ぬまで暮らすつもりだけど？」

私は首を傾げて答えた。

だつて、世界を変革した張本人である。

誰だつて狙う。逆の立場だつたら私だつて文句くらい言う。そんな人間が日本に戻つて暮らすのも無理だろう。まあ、転移できるうちはこつそりご飯食べに行つたりとかするつもりだけど、向こうに住まいを移すつもりはない。

ご飯？

この島で自給自足すればいい。何のために島の土地を回復させたと思つているのか。広大な土地があるんだから、畑を作つたり、湖で魚を育てたり、森の果物を取つて食べたりすれば生きていける。

装置の防衛を考えても私がいちばんいいし、「個性」が無くなる前

にここを更に要塞化しておきたい。

冷静に計算すると一秒につき一人計算でも結構年月かかるんだよね。ここからブーストがかかるとしても、年単位で守れる算段は立てておきたい。

「って、それは本当に『死ぬまで』のやつじゃありませんか!？」

「死ぬまでっていうか、殺されるまで、のやつよね……」

お姉ちゃんが悲鳴のように声を上げ、頼子さんが少々げんなりしたように言う。

「そりゃそうじゃないですか」

世界中から「個性」が消えていつている以上、私の『不老不死』だっていつかは消える。

よっぽど私の死が願われていない限り消えるのは後回しになるはずだけど、その予想だって絶対じゃない。あの「個性」が無くなったら、私だって死ぬ。

死ぬる、って言った方が正しいかもしれないけど。

「激しい攻撃を受けて死ぬんなら、それが世界の選択ってやつです。しようがないしようがない」

「いや、しようがなくはないと思いますが……」

なんと、合理主義なビジネスマンのはずの宮下さんから駄目だしとは。

「計算だけで動けるようならヒーロー事務所に就職しませんよ……」  
「確かに」

ぐうの音も出ない正論だった。

「ま、まあ、そういうわけなので、ほんと、みんなは好きにしていんだだよ？ お金なら買い出しするには十分あるし、これから久しぶりにお昼寝できそう——」

「いつミサイルが飛んでくるかわからないところで呑気に昼寝しないでくださいませ」

危険察知が機能してる間は着弾前に起きられるし……。いやまあ、機能しなくなったらもろに食らうわけだけど。

「と、透ちゃんとトガちゃんも何か言っ——」

「……はあ、もう。これだから永遠ちゃんは」

「ほんと、私達がいないとダメダメですよねえ」

顔を見合わせた二人は何故か、助けを求めた私をデイスった挙句、顔を見合わせてにんまりと笑った。

「死ぬまで一緒にいてあげるから安心してね、永遠ちゃん！」

「ご飯は任せてくださいねえ」

「あれ、私の話聞いてた？」

この子達も相当倫理観狂ってるんじゃないだろうか、と、自分を棚に上げて思う私だった。

## 2.3. 変わっていく世界

「お帰りなさいませ、永遠様。透様。皆様」

日本で拠点にしていたマンションに戻ると、管理人の姉妹が出迎えてくれた。

恭しく一礼する姿には何の変わりもない。

世界で大きな変化があったことなど嘘のように二人は変わりなかった。

「ご無沙汰しています。何か問題はありませんでしたか？」

「いいえ、何もございません」

「むしろ、ご当主様はお喜びでございます。まさか、自分の代に、戦国の世のごとき大きな変化が起こるとは。それを葉隠の血族が手助けできるとは、と」

「うわあ」

人の感性はそれだけけど、葉隠家の当主様はやっぱり変わった人らしい。

自分達で世界の変化を主導したりはしないけど、大きなことができる人を手助けしたい。一度決めた主に一生仕える生き方を全力で肯定できるんだから、悪い人じゃないんだと思う。

「こちらのマンションはご自由にお使いください」

「少なくとも今しばらくは、国内での行動に支障があるでしょうから」  
「ありがとうございます」

島で暮らすと宣言した私だけど、必要に応じて使える拠点はとても助かる。

あの島は防衛と生活に適してるけど、世界の変化を逐一知るにはガラパゴス状態が過ぎる。

儀式が実行されてから、あつという間に二週間が過ぎた。

その間、私達はそれぞれに慌ただしく過ごしていた。

もともと女王派じゃないエンデヴァーは当日の夜には家に帰った。



轟君へ「一緒にどうか」と誘ってたけど、それは断られた。

「さすがに帰れねえだろ。あんたを足止めした張本人だ」

エンデヴァーは「そうだな」と答えた後、小さく付け加えるように呟いた。

「……ほとぼりが冷めたら、戻ってこい」

「ああ。それまで、せいぜい身体を鍛えておくさ」

「個性」戦で勝っただけで超えたことになるとは思ってない、と、轟君は言っていた。

プロヒーローとしてのエンデヴァーの功績がなくなるわけではないし、格闘技だけで戦ったら体格の差が大きく出るだろう、と。

「お前は冷に似たからな」

「困りものだな。……大切な人が好きだと言ってくれるから、嫌だとは思ってないが」

「し、焦凍さん」

恥ずかしそうに頬を染めるお姉ちゃんを見て、強面の大男はふっと笑みをこぼした。

「戻ってくる時は是非、二人で挨拶に来い」

私の後援者の人達——いわゆる『女王派』の多くはもとの居場所に帰った。

やりたいことをやって満足した人、これからも支援を続けるために戻る必要があった人がだいたい半々くらい。残った人は血気盛んに戦闘に参加した結果、中継に映ってしまった「帰れない組」と、労力という形で今後の支援を希望してくれた人達。

畑を耕したり物を運んだり、掃除洗濯をしたりするには人手がいるから、残ってくれる人も大歓迎だ。

頼子さん、宮下さん、白雲君、轟君、お姉ちゃん、トガちゃんに透ちゃんといった初期の面々は島に残った。

面が割れすぎていて帰るに帰れない、っていうのが大きいとは思いますが、残ってくれたのはやっぱり嬉しかった。気心の知れたメンバーがいてくれれば、どんなところだって楽しくやれる。

って言っても、頑丈すぎるくらいのお城があつて、それぞれ専用の大きな部屋があつて、当面は買い出しにも余裕で行けるから食べるもの着るもの、娯楽用品にも困らない。悪環境とは言い難いなんちゃつてサバイバルなわけだけど。

この二週間でまず着手したのは防衛機能の強化および整理だった。例えば使い魔の作り直し。

防衛戦の時はインパクト重視で「環境保護？ 知らないよそんなの」とばかりに空と海を蹂躪していたので、そのあたりに配慮するためだ。

島に普通の動物や魚を放すことも考えて、区別がつくように全てわかりやすくデフォルメ型に統一。食べる機能もなくして、生き物というよりはロボットに近い仕様にした。

海の使い魔は船や潜水艦相手を考慮して大型に。近くの魚が怖がるかもだけど、普段はじつとしているようにインプットしたので、そのうち慣れてくれると思う。

陸上の使い魔はぬいぐるみ的なもの。クマや馬なんかの比較的大きいのは荷物運びなんかを手伝ってもらい、猫や犬みたいな小さいのは完全にマスコット要因。

空の使い魔が実は一番多くて、有事には飛行機やミサイルに向かって突っ込んでもらうことになる。定番の蝙蝠からドラゴンまでいろいろ作ったけど、作りすぎて待機してもらおう場所が不足気味。島を拡張して魔物専用の山を別に作ろうか考え中。

お姉ちゃん主導で近代兵器の設置も計画中。

装甲を増設したりして「耐える」方針だとどうしても限界があるので、撃ち落とせる攻撃は撃ち落とそう、という考えだ。

とはいえ、さすがのお姉ちゃんも作れるのは対人火器レベルが限度なので、どこまでできるかは未知数。レーザーとかそっち系はなんとかるけど、武器の方は「とりあえずおっきくすればOKでしょー」とはたぶんいかないだろうし。

物理的な装甲を増やせないなら、と、非物理的なバリアも張った。

一定速度以上で突っ込んでくる物体だけを防ぐように条件付けして、耐久値が底をついたらぱりんと割れる仕様。代わりに割れるまでは半永久的に残り続ける。「個性」因子が消えても作製物は消えないのをいいことにやりたい放題だ。

一つじゃこころもとないので「これでもか！」と何重にも張っておく。

爆弾を満載した船で体当たりでも敢行しようものなら海上で自爆することになる、という寸法だ。

私が「個性」を使ったあれこれにかかりきりになるので、他のみんなには畑を耕したり、花や野菜の種を撒いたり、足りないものを買出しに行ってもらったりした。

トガちゃんは主に『変身』しての買い出しと、料理技能をふるつての食事担当。

透ちゃんは力仕事を手伝ったり、私の話し相手になってもらったり。

ワープできる白雲君は乗り物代わりに使われることになったし、轟君は「訓練になるから」と率先して作業を引き受けていた。

そんな中、微妙にストレスを溜めることになった人達がいて、

「パソコン！」

「インターネット！」

マンシヨンに帰ってきて挨拶を終えるなり、歓声を上げてマシンに飛びついたのは——ファンシーな顔の男性と、見た目女子高生のお姉さん。

そう、宮下さんと頼子さんだ。

「ネットに関してはどうしようもないですもんね……」

「永遠ちゃんに『ちよつと回線維持してて。半日くらい』とか言うわけにもいかないものね」

私自身はちよいちよいと「個性」を使えばネット上の情報もテレビ番組も覗き見られるんだけど、一人だと効率悪いし、何よりみんな

の気分転換にならない。

「城とこのマンシヨンを繋ぐ装置でも置きますか？」

「私達、個性消すために活動してたんじゃなかったっけ？ って感じね。是非お願いします」

「私としても、そうしていただけるとデスクワークが捗るか」と「わかりました」

「やっぱりパソコン触りたいんじゃないですか、と若干引きつつ了解する。」

「といっても、『個性』の産物が残りすぎるのも考え物かも。作った装置に自壊条件を設定しようか。私が死んだら？ 私の『個性』が消えたら？ ああ、『個性』消去の装置に「エネルギー供給が一定期間途絶えたら」自壊する条件を付けて、他の装置も連鎖的に壊れるようにすればいいか。」

「それで、どうですか？」

馬鹿な話をしながらも高速で手を動かしている二人に尋ねる。

「ええ。だいたい永遠ちゃんを確認してくれた通りかしら」

「この二週間で消えた個性の数はおよそ百四十万。一日十万程度のペースですね」

「数字が大きすぎて何がなんだかわかりませんね……」

一秒につき一つの『個性』が消えるとすると、

$60 \times 60 \times 24 \parallel 86, 400$

なので、実際の速度はもうちょっと速いことになる。

「うん、ここまでくると私が手動でやるのとは桁が違う。今まで私が奪った数を二日三日で上回るんだから、本当にわけがわからない。」

「まあ、ここまでやっても、日本の総人口に到達するまで結構な期間がかかるとは思いますが、」

「既に世界は変わり始めていますよ」

宮下さんの言う通り、変化のきざしはもう表れていた。

『個性』を失う人が急増したことで、社会には混乱が生まれた。

サイラン  
敵の数は激減。

代わりに「個性」を用いない、敵とは呼べない犯罪者は増加傾向。ヒーローの多くも「個性」を失ったことで、これまでのような「敵が暴れ、ヒーローが駆けつける」という構図が成り立たなくなり始めた。

基本的にヒーローは「個性」が無くても戦えるけど、移動に「個性」を用いていたヒーローは多い。そうになると、今まで事務所がカバーしていた範囲をカバーしきれなくなってしまう。銃とか持ち出してくる相手に肉弾戦だけで戦えば怪我也増える。

まあ、別の世界にいた私からすれば、犯罪抑止のためのパトロールとか武器の密売を阻止するのとか、もともとは警察の仕事でしょ？  
っていう話だ。

「個性」が振るわれるより破壊・殺傷の規模は格段に小さくなってるので、そこでバランスは取れてると思う。というか、私が世界にばらまいたぬいぐるみ達はまだまだ健在なので、厳しく言えば「人手不足？ 足りないはずないよね？」だ。

あとは単純に「個性」が無くなったことで仕事に不都合をきたす人、精神的に病んでしまう人が出ている。

「どんな場所でも蜘蛛糸を使って大工仕事をするのが俺たちの専売特許だったのに！」

「私の自慢のケンタウロスボディがなくなって、ただの二本足になっちゃった！」

みたいな感じだ。

これに関しては申し訳ないとは言いようがない。私としては「じ、事前に予告は十分しましたよね……？」と弱気モードで言うのが精いっぱい。

こうした人達が被った金銭的、あるいは精神的損害をカバーしようと、とある民間の企業がいち早く立ち上がった。

「無利子での貸し付け、事業計画の相談、カウンセリングの手配、形態変化に伴うリハビリ等々、請け負います」

この企業のバックにいるのは八百萬グループだった。

これによって八百万の名前と知名度、関連企業の株価は一気に上がった。

事前に準備していたんじゃないかと思える、というか準備していたとは思えないタイミングに「あの姉妹と裏で繋がってたんじゃないか」という声はもちろんあったけど、ぶっちゃけ、世界に向けて表明した内容からでも十分、予想できたと思う。

あと、人助けしてる人間を非難するのって物凄いバッシングを受けるので「八百万批判」はあんまり流行っていない。

政治の世界では解散総選挙の実施が決定。

各種企業でも経営陣の退任や大規模な人事異動が起こっている。それに伴って業績の低下が懸念されてるところも多いけど、これも前もって準備をしてなかったところが損をしている感じだ。

英雄はというと、閉鎖が予定されている二年後までの方針として「大幅なカリキュラムの見直し」を発表。

主な対象はやっぱりヒーロー科で、「個性」制御や使用方法に関する授業数を段階的に縮小しつつ、英語とか数学とかの一般的な教科のコマ数を増やす予定。危険物取扱やレスキューに関する授業の増加も検討しているらしい。

普通科はほとんど変化がないものの、経営科もヒーロー事務所の経営を意識した内容から一般企業よりのものに内容を刷新する方向、サポート科に関しては主な開発アイテムを戦闘用のグッズからより広範なものへ変更していくという。

これによって根津校長に賞賛の声が集まる他、イレイザー・ヘッド——相澤先生には島での戦いで多くのヒーローを守り、救ったとして感謝の声が寄せられている。政府はエンデヴァーなども含め、活躍したヒーローに向けて感謝状の贈呈を検討しているらしい。

ヒーロー事務所は規模を縮小したところも多い。

ヒーローやサイドキックが辞めたというよりは、裏方のスタッフが減っているところが多い。ただの事務方さん達にとっては「潰れる前に別のところ行きます」というだけの話らしい。

その一方でプッシュキャッツやラーカースなど、一部のヒーローは

精力的に活動を続けている。

この辺りはチーム制を取ってたのが逆に良かったという面もありそうだけど「別にヒーロー制度そのものがすぐに無くなるわけじゃないし」と、敵も敵じゃない犯罪者もノリノリでしばき倒している。

「結構、混乱してるね……」

「それはそうですね。世界規模での大きな変化ですもの。でも、じきに収まるでしょう」

「そうかな？」

「ええ。人は慣れる生き物ですもの」

そんなお姉ちゃんの言葉は予言だったのか。

日を追うごとに、世界から“個性”が減っていくごとに、人々の“個性”への執着は薄れ、世界は少しずつ“個性”から離れていく。

そんなある日。

私の元に使者がやってきて、とあるお願いを持ち掛けてきた。

「今一度、あなたのA F Oを世界の<sup>オール・フォー・ワン</sup>のために使っただけじゃないでしょうか？」

## 2.4. 永遠の島観光ツアー

「永遠ちゃん、本日のお客様を連れてきましたよ」

「ありがとうございます。……皆さん、ようこそ国籍のない島へ。どうか楽しんでください」

侵入者対策をとっぱらって居住性を良くした城の、新たに設けられた応接間にて、私は十人ほどの方々を出迎えた。

はるばる船に乗ってやってきた彼らは、お城つぽく整えた調度品か、いそいそとお茶の準備を始めたトガちゃんか、それともドレス姿の私か、あるいはその全てに戸惑ったような表情を浮かべた。

こつちとしては歓迎しているんだけど、歓迎されたからこそ「え、マジで？」っていう気分になっているのだ。

既にそこそこの回数を重ねているものの、体験談が広く知られるにはもう少し時間がかかるのかも。

「では、お一人ずつ順番に私の傍まで来てください。ちくつともしませんし、一瞬で終わりますのでご安心ください。待っている間はお茶とお菓子でもどうぞ」

私はこのところ、八百万家ゆかりの企業からの依頼で、個性喪失を希望する人達にA F Oオール・フォー・ワンを行使するお仕事をしている。



発端は、わざわざ飛行機に乗って島へやってきた使者の言葉だった。

「現在、早く個性を喪失したい方向けの旅行プランを企画しております」

「お金を払って個性を失いに来させる、ってことですか？」

「はい、その通りです」

事の始まりになった日本ではいち早く「個性喪失ブーム」が起こりつつある。

当時はまだ起こりかけ、下手したら起こってもいないのに先読みし



て動いてるレベルだったんだけど、結果的にはその後、ブームは本当に起こった。

もともと「個性なんかいらない」と思っている層は少数ながら確実に存在していた。壊理ちゃんほど切迫している人は少ないものの、例えば異形型の「個性」とか、人と違う容姿がコンプレックスになっていたり、生活の妨げになっていく人はどうしてもいるのだ。

いらなくても失う方法がなく、世間の風潮とも逆行するということで、彼らはどうすることもできないでいたんだけど、それが私のAFOと、個性消去装置によって変わった。

個性を消す方法があって、個性のない世界が現実的に想像されるようになったのなら、むしろ順番待ちなんかせずさっさと失いたい、と思いはじめたのだ。

「そこで、形式上は旅行ツアーという形で個性を失う手助けができたらと」

「なるほど」

もちろん仕事である以上、利益が出るように取り計らうことになるが、料金はできるだけ安価になるように設定するという。

ツアーの反響によって額は変わるけど、私達にも謝礼が出る。

お金を払ってまで「個性」を失いたいっていう人達だから、法に縛られないこの島への移動は覚悟して来るし、その安全を会社側が保証することで参加しやすくなる。

「安易に保証して大丈夫ですか？」

私が尋ねると、使者の人は微笑んで答えた。

「八百万の人間は貴女を危険だと考えていません」

「え」

「私は今回、企業のエージェントとして参りましたが、普段は八百万家直属として働いております」

「……全然気づきませんでした」

秘書的な役割の人なので私と顔を合わせる機会が殆どなかった、というのもあると思う。

ちなみに、後から会ったお姉ちゃんは一発でわかった。

「ご当主様と奥様は可能であれば、百様と永遠様の悪評を払拭し、再び迎え入れたいと考えておいでです」

「……そんなこと」

「もちろん、急には無理でしょう。ですが、人々の認識が変化し、政府の体質改善が行われればあるいは。例えば先に百様だけでもお帰りいただき、永遠様も、と希望する声を高めることもできるかと」  
「そこまで上手くいくだろうか。」

実際はいつまで経っても帰れない可能性の方が高いと思う。

でも、お父様とお母様が「帰ってきて欲しい」と思っていてくれるという事実は、私とお姉ちゃんにとって救いになった。

「どうか、自分達は捨てられた、とお考えになることはお止めください」

「ええ、わかっていますわ」

「私達はそんな風に思ったことはありません。家の事情があったことは十分理解しています」

八百万家が私達をバッシングしたことはなかった、って、知ってたし、ね。



AFOによる『個性』 抽出は予防接種より簡単に終わる。

トガちゃんやんが淹れてくれたお茶が冷めるより速いといえればあつけなさが伝わると思う。

「お疲れ様でした」

「……ええ？」

あつけなすぎでほかんとしている皆さんだったけど、目に見えて「個性がなくなっただけ」ことがわかる人達は感激していた。

「ありがとうございます、ありがとうございます！」

「い、いえ。私にとっては大したことじゃありませんから」

泣きながら手を取られて感謝されると逆に困ってしまう。

もつと大仰に、必要ない説明を長々としてからゆつくり略奪するべ

きだろうか。でも無駄なんだよね、そういうの。

「えっと、皆さんにはこれから三日ほど島に滞在していただくことになりませう」

島へ船が来るのは週二回。

行きの船はもう帰っているので泊まってもらうしかない。

海岸で出迎えばその足で帰ってもらうこともできるんだけど、それツアーって言う？　って話になるし、世界中からターゲットされている人間がこのこ向かうのもどうなのってことで、せっかくだから島での生活を体験してもらっている。

スパイ対策は幸い『サーチ』その他の個性で十分できる。『個性』がなければ船一つ、人間何人かのできることは限られるから、過剰に警戒する必要もない。

丸腰の相手と武器を持っている相手、どっちが付き合いやすいかっていう話で、これも『個性』をなくすメリットだと思う。

「城には客室があります。そちらに泊っていただければ食事は三食お出しできます。あとは、ご自分でキャンプをしていただいても構いませんが——」

キャンプしたい、と手を挙げる人が三人ほどいた。

人工の自然ではあるものの、文明から離れた孤島。この位置からの夜景はほぼ誰も見たことがないこと、観光地化されていないので本当に人が少ないことからキャンプ好きや天体観測マニアからひそかに注目され始めているらしい。

「わかりました。では、解散の前に記念品を受け取ってください」

メイド姿のトガちゃんかトレイに乗った半透明な石を差し出す。

形はバラバラ、大きさはネックレスにするなら磨くだけでいいけど、指輪にするならカットが必要といったところ。

「好きなものをおひとつずつどうぞ」

「あの、噂で聞いたんですがこれ、ダイヤの原せ——」

「記念品の透明な石です」

「あ、はい」

これは島を作った時の副産物なので私の懐は全く痛くない。

売れば旅行代金くらいは余裕で帰ってくるだろうけど、時間をかけて島まで来て「個性」を失ってまで手に入れるほどいいものでもない。

このくらいで「来てよかった」と思ってもらえるなら安いものだ。「それじゃあ解散ということ……」

「永遠ちゃんとお話したい方はどうぞこのまま残ってくださいね」

トガちゃんの声に、何人かの人が私とお話を希望してきた。

トガちゃんめ、余計なことを。いや、ツアー内容に含まれているので完全に逆恨みなんだけど。



さらに月日が流れて。

島への観光ツアーは、実際に人達の口コミやレポートによって知名度が上がり、参加者がだんだんと増えていった。

一度来た人からのリピート希望は無個性の人からの参加希望も出たため、記念品は「個性」と交換という条件でオーケーした。

結果、他の国の企業からも似たような依頼が来るようになり、来客が多くなったので城とは別にホテルを作った。こっちも洋館風の建物になっていたので好評。女王派の人達を雇うこともできるようになったので、やって良かった気がする。

気づいたらなんか結構な収入にもなっていた。

そして、日本はもちろん世界中で「個性を失うこと」がどんどん当たり前になっていく。

一般人が島に訪れるようになったことが外部からの攻撃を間接的に防ぐ役目をしてくれたのかもしれない。少なくとも目に見える攻撃はないまま時間が過ぎた。もしもここまでお父様お母様の思惑通りなのだとしたら尊敬を通り越してちよつと怖いけど。

「個性」を失った人が増え、個性喪失がおかしなことじゃなくなればなくなるほど、装置に注がれるエネルギーも増える。一日の「個性喪失者数」は日に日に増え、最後の日の予想はより身近な日付へと変

更されていった。

“個性”犯罪は着実に減少。

新規のヒーロー事務所立ち上げ件数が激減、廃業する事務所の件数を差し引いた「実質的増加数」が史上初めてマイナスを記録すると共に、警察は元ヒーローを対象とした特別採用を実施、犯罪者取り締まりによる殉職者・負傷者が減少したこともあつて人員を大幅に増加させた。

政治の世界も総選挙の実施に伴って大幅な体質改善が行われた。いわゆるやり手や大物と呼ばれる人々がゴシップ（主に私達が公開したやつだ）のせいで立場を失ったことで、内閣の平均年齢は大幅に若くなった。

新しく就任した若い（政治家基準）総理大臣は世界の「新しい常識」に対応した方針を多数打ち出すことで人々からの支持を集め、試行錯誤の中、なんとか国を運営していき——ようやく軌道に乗り始めた頃、とある発表を行った。

簡単に言うと、敵との戦いにおいて多大な貢献をした者に褒賞と共に恩赦を与える、というもの。

エンデヴァーや相澤先生といった活躍著しいヒーローに大きな褒賞が与えられ、これまで世界を守ってきた感謝が捧げられると共に、恩赦の対象としては私やトガちゃん、透ちゃん、お姉ちゃん、ミルコやホークスなどの名前が挙げられた。

「まさか、国がそこまでするとは思いませんでしたわ」

「国も支持率の回復に必死なんスよ」

と、当の私達としても、思ったよりずっと早い展開に単純には喜べなかったものの、この発表に対する世間の反応は思ったよりも好意的だった。

敵が減る↓敵やヒーローが壊す建物の修繕費がいらなくなる↓政府が拠出する関連費用が激減する↓財政が圧迫されることはない、というのが大きかったかもしれない。

私が死刑執行の場で暴れ、怪我人を多く出したことも。

お姉ちゃん達が私をサポートしたことも。

ホークスが権力者の私兵としてヒーローの権限を行使していたことも。

犯した罪がなくなるわけではないが、今更、罰を与えることはない、と確約してもらえたことになる。

「良かったですわね、永遠。……報われましたわ」

「……うん。ありがとう、お姉ちゃん」

反乱から三年。

成人式に出席できないまま二十歳を過ぎていた私達は、大人組がおススメしてくれたお酒で静かに祝杯を挙げた。頼子さんは肉体系年齢的にまだ二十歳前だったけど、まあ、法律上の年齢が若返るわけじゃないし、十分に我慢してくれたってことで一緒に飲んだ。

私達は迎えに来た船に乗って日本に戻り、エンデヴァー達と一緒に式典に参加した。

「オール・フォー・ワンを倒し、世界を救ってくれてありがとう。……そして、未来に誕生するはずだった数多くの敵を罪を犯す前に止めてくれてありがとう」

「こちらこそ、このような場を設けていただき、本当に感謝しています」

式典の場で、総理は一言も謝らなかった。

立場上「ごめん」と言うことはできなかったんだと思う。もし公的に言ってしまうえば「犯罪者に屈した」と各所からバッシングを受けてしまう。

私達に恩赦が下ったと言っても、それは制度的なことであって、過去の事実や人の気持ちまで変えられるわけじゃないのだ。

でも、式典が終わった後、私的な場で、彼は自分の半分くらいの年齢の私に頭を下げってくれた。

「本当にすまなかった。君達が怒ったのも無理はない。政府も公安も、本当に愚かなことをしたと思っている」

「頭を上げてください。どんな事情があったとしても、物を壊して、人を傷つけた時点で、私達は悪いことをしたんですから」

再生してた期間も含めたら私の方が二倍か三倍くらい年上、という

のは言っちゃいけない。

ともあれ、こうして私達は日本に帰ることを許された。

さつきも言った通り「人から許されるかどうか」は別の問題だとはいえ、街で買物していても通報されない、というのはとても嬉しい。

例えば変装してラーメン食べに行つて、バレてしまったとしても「悪いことは何もしてませんけど?」と言える。これは強い。

「みんなは、これからどうする?」

「わたくしは大学に行こうと思っております。経営や帝王学を学ぼうかと」

「俺はどこかの事務所に入るつもりでいる。まだヒーローが消えたわけじゃない。身体の使い方を学ぶのに一番いいのはあいつらのところだ」

「私ももう一回大学に行こうかしら。『嘘発見』がなくなっても経験はなくなるしないし。心理学を学びなおして犯罪心理学者でも目指すわ」  
「所長から今までのお給料までいただいてしまったので起業でもしましょうか。そうですね、人材派遣業とか?」

みんなそれぞれの道を歩きだそうとしている。

「永遠。あなたはどうしますの?」

「私? 私は——」

そんな中。

私達が全員いなくなった隙を見計らったかのように、島へ爆撃機や潜水艦、爆弾を満載した貨物船が殺到した。

「私は島に戻るよ。私はここにいない方がいいだろうから」

## 25. 反抗

島に戻ると、そこには凄惨な光景が広がっていた。散乱する爆撃機、戦闘機の残骸。

海上には大破したまま辛うじて浮かぶ船の姿。

海の中にもたくさん沈んでいるだろう。

陸地には脱出したり、怪我を負った兵士達の姿。

建物や畑、森に被害は出ていない。

これでもかと張り巡らせたバリアや、たつぷり用意した使い魔達のお陰だ。

式典に出るにあたって観光客の受け入れを停止していたし、スタッフも一度島から離れさせていたので、島は本当に無人の状態だった。なので人的被害もこつち側には出ていない。

「……まったくもう」

私は溜め息を吐いた。

「人がいたらどうするつもりだったんだろ」

「女王！」

近くにいた兵士が私達の帰還に気付いて声を上げる。

外国語訛りのある日本語。

銃が構えられ、躊躇わずに発射される。

他の仲間を庇うように前に出た私は「個性」を起動。

『ベクトル操作』反射モード」

「なっ……!?!」

銃弾が運動エネルギーをそのまま、ベクトルだけを反転して飛ぶ。

弾は驚愕で動けない兵士の脇をかすめ、通り過ぎた。

「正反射ではなく、反射角を少しずらしました。言っている意味がわかりますね？」

「っ、おおおおおっ!!」

兵士が銃を連射。

当然、全部反射されて地面や遠くに飛んでいくだけ。

かち、かち、と、弾がなくなっとなおトリガーを引く彼の姿は、化



け物に襲われて絶体絶命、といった有様だった。

「もう止めませんか」

敵ていきに優しくしてあげる義理もない。

女王モードで冷然と告げると、返答の代わりに拳銃が放り捨てられ、サブマシンガンらしきものが取り出される。

防具も着けていない人間に撃つたらほぼ間違いなく蜂の巣だ。

「殺しに来るってことは」

私の傍に立ったままトガちゃんが眩き、

「——殺される覚悟ができてるってことだよな？」

接敵した透ちやんが背後から首筋に手刀を食らわせ、体勢が崩れたところで兵士のベルトからナイフを引き抜く。両手首を浅く切り裂き、銃を捨てさせると、彼女は兵士の首にナイフを突きつけた。

「降参しなよ。こつちがその気なら、最初に撃つた時点で終わりなんだよ？」

「っ」

唇を噛んだ兵士は観念したように瞳を揺らめかせ——口内にぐつと力を籠める。

唇の端から零れたのは涎ではなく、赤い鮮血だった。

『吸血鬼』を持っている私にとっては栄養源だけど、もちろん、啜る気はない。

私はしゃがみ、彼にそつと触れると記憶を引き出す。それから、その記憶を元に家族の元へ転送。傷は治さない。すぐに対処すれば死ぬほどの怪我じゃないし、自ら死を選んだから余計なお世話だ。

家族が彼の仕事をどこまで知っているか、知らなかったとして知っ  
てどう思うかは、わからない。

島に降り立った他の兵士のうち、動ける者は陸上の使い魔に襲われ——私達が対処するまでもなく全員倒れた。

死なない程度に痛めつけられた兵士達は城に集められ、私は彼らと対面した。



襲ってきたのは幾つかの民間傭兵会社の合同チームだった。

“個性”消滅に反対する一派からの資金提供を受けての攻撃で、政府や軍との繋がりはない——というのが建前。

「実際は直近で退役した正規軍人に元プロヒーロー、更には敵としてサイランの逮捕歴がある人間まで混じってる。クライアントになった組織には政府重鎮も所属、か」

ぐるぐる巻きに縛り上げられた襲撃者の生き残り、総勢三十五名は騒然となった。

尋問で吐かせたんじゃないやなくて “個性” で直接読み取ったわけだから驚くのも当然だ。

「バレたら世論が凄いことになりますねえ」

「大問題だね！」

トガちゃんと透ちゃんが一見、楽しげな口調で言う。

いや、トガちゃんの方は半分くらい本当に楽しそうだけど。日本人が含まれていなかった分、他人事なので怒りよりは呆れが強い。だから適当にからかうこともできてしまう。

ちなみに、この島に戻ってきたのは私とこの二人だけだ。

日本に帰って色々する予定のみんなは後々のことを考えると参加しない方が良い。それに、バリア等々を考えれば被害が少ないのはわかってたから、そんなに危険はなかったのだ。

まあ、問題は命の危険以外のところにあつたわけだけど。

「どうしよっか」

「もう殺しちやえばいいんじゃないですか？」

「そういうわけにはいかないよ。それで『やっぱり女王は危険だ』とか言われても嫌だし」

仕方ないから一計を案じることにした。

「透ちゃん、準備はいい？」

「ばっちりだよ！」

透ちゃんにビデオカメラを操作してもらい、録画スタート。

「本日は島にお客様がやってきたのでご紹介したいと思います」

日付や時刻、島の状況などを合わせて喋る。

爆撃や船による突撃、潜水艦による奇襲などを受けたこと。島にはあらかじめバリアを張ってあったので、多くが自爆に終わったこと。攻撃部隊は百名を軽く超える人数がいたらしい。

バリアに直接突っ込んだりやった船の乗組員とか、海の使い魔に暴れられた潜水艦の乗組員とかは基本、生存が絶望的だった。船が壊れるまで生き残った上、酸素ボンベ等を使って島まで泳ぎ着くとか、相当運がないと無理だ。

「皆さんはどうして攻撃してきたんですか？」

「我々は傭兵だ。個性保護派の依頼を受けて精鋭部隊を派遣——っ!？」

質問へ正直に答えさせる “個性” で根掘り葉掘り答えてもらう。

彼らは苦渋の表情を浮かべながら所属先の名前や規模、把握している限りの構成員、クライアントの詳細などを喋った。

「トガちゃん、あとは任せた」

「はいはい」

メモリに保存した動画をパソコンにコピー。やりすぎかな、っていう情報は編集によって削除してから複数のUSBに落とし込む。

メッセージカードと一緒に封筒に入れて封をしたら、各国の主要なテレビ局に直接USBを送り付ける。

いくら彼らの会社が力を持っていて、バックに大物がいると言っても、このスピードで行動されたら止めようがないはず。日本とか、影響力の及ばない国も含んでるし。

「はい。これで早ければ数時間後にはあなた達の所業が世界に公開されます」

「貴様は自分が何をしているのかわかっているのか!？」

「何をしてるって……殺しに来ておいて、自分達が不利益を被るのは嫌だ?？」

「我々はあくまで仕事でやっているだけだ! お前達を殺したがっているのはクライアントだ!」

「でも、そういう仕事を選んだのは自分達ですよねえ?」

嫌なら作戦に参加しなければいい、という話。

他に行くところがなかった、半ば強制されていて断れば殺されるところだった、っていう場合はあるかもだけど。

「私達は積極的な殺しを望みません」

攻撃で出た人死には全部、自動防衛機能に勝手に引つかかったのが原因。

攻撃しなければ攻撃されない、って認識しているのに突っ込んできて、全滅してもいない状況で「非道」とか言われても困る。

「なので皆さんを解放しますね」

「ま、待て！ そんなことをされたら我々は——」

まあ、傭兵会社としてもバックの組織としても裏切り者を生かしておく理由はないよね。

「生かしておいてあげるのに文句言うんだ？」

嘲るように言う透ちゃん。

いやこれ、ほんとに悪役だ。いや、もともと悪役なんだけど。

もちろん、ここから本気で送り返す気はない。どうしても帰りたいなら別だけど。

「島に滞在するというのがなら歓迎します。武器は没収しますし、行動に多少の制限はつけますが、過度な報復や迫害を行う気はありません」

戻るか島に住むか。

二択を突きつけた結果、九割以上が島に残ることを選んだ。



使い魔の記憶から再現した攻撃の映像も追加で送り付けたところ、各メディアは嬉々として今回の件を報道してくれた。

個性保護派の過激さを強調して訴えるところ。

攻撃によって人死が出たことから私達を非道だとなじるところ。

攻撃をテロであると断定し、陰謀論を唱えるところ。

メディアによって伝え方は様々。

でも、それでいい。それぞれの考えがあるのは当たり前のこと。色々な意見を見て、それぞれが自分の考えを持つてくれればそれでいい。

ただ、観光ツアーの参加者は激減した。

私達のが信用できなくなった、というよりは、危険が目に見えるようになったことで敬遠された感じ。

仕方ないので一か月ほどの休止期間を置いたうえで移動用のゲートを八百万家が所有する施設の一つに設置、島に直接転移できるようにして再開。

参加者の人数は少し回復したものの——島への攻撃は更に続いた。

一回目の攻撃の後で私はバリアや使い魔の数を更に増やした。

何回分も防備は残ってたんだけど、本格的に“個性”喪失が怖くなってきた。別に戦えなくなるのはいいけど、みんなを守れなくなるのは嫌だ。

これまでも増して防御を固めた結果、爆弾やらドローンによる自爆特攻やら作業員による潜入やら、もろもろの攻撃にも島はびくともしなかった。

高速で接近する乗り物や兵器はバリアが食い止める。

バリアを抜けてきた敵とは海や空の使い魔が戦ってくれる。

人やロボットが上陸してきた場合は陸の使い魔が撃退する。

警報システムや警備ロボットなども配備したので、被害はほぼゼロに近い。

観光ツアーの参加者が怪我をするようなこともなく、ツアーの人気は徐々に戻っていった。

そんな中——。

「いい気なものだ」

城の屋上で昼寝でもしようかと廊下を歩いていると、一人の女性と遭った。

「あ、しーちゃん」

「シャロンだ！ 私をその名で呼ぶなど言っている！」

私がしーちゃんと呼ぶ彼女は一回目の攻撃で生き残った一人だ。

金髪の美人さんで、そんな人が兵士として参加していたことに私はイラつとせずにはいられなかった。少しでも仲良くしようと愛称で呼んでいるのはそんな理由もある。

同性には甘い？

しようがない。こればかりは性分だ。別にやましい目的があるわけではないので許してほしい。

しーちゃんもノリ突っ込みをしてくれる程度には馴染んでくれている。といつても、相変わらずこうやってピリピリしてるわけなんだけど。

「いつまでこんなことを続けるつもりだ？」

「世界から『個性』がなくなるまでだよ」

暇なのか、しーちゃんは私を追いかけながら尋ねてくる。

まあ実際、元兵士の方々に観光業の手伝いをしろ、というのも酷なので、彼らは食客のような立場になっている。当人達の気が向けば力仕事なんかを手伝ってもらったりはするけど、ただ島にいるだけでも特に文句は言わないようにしていた。

「耐えきれると思うのか？」

「向こうの方が先に音を上げると思ってるよ」

「敵が何人いるかもわからないのに、か？」

島のスタッフは多くの人に戻ってきてくれた。

新しく志願してくれる人もいるし、被害も出してはいないけど、昼夜関係なく爆音がしたり、夜間のうちに侵入者がいました！とか言われるのは怖いに決まってる。もう慣れちゃってる人もいるけど、ストレスを感じている人は確実にいるはず。

なのに、攻撃してくる敵を殺さず生かしているんだから、私は甘いんだろう。

でも。

「悪意って長続きしなないと思うんだ」

「そんなもの、憎悪の強さにもよるだろう？」

「それはもちろんそうだけど、例えば復讐鬼みたいな人達だって、相手に苦しんで欲しいだけで、自分が死にたいわけじゃないと思うんだ」

自分がのほほんと幸せに暮らしながら憎い相手が地獄の苦しみを味わってくれるなら、それが一番いい、と多くの人が言うと思う。

「だったら、周りの人が『平和が一番』って言ってる中で、いつまでもテロだの戦争だの言ってるられないと思わない?」

「平和ボケした意見だな」

「兵器とかそういうのを全ての国が放棄して平和にできたらいいのに、って本気で思ってるよ、私は」

もちろん、実際にそうできないのもわかってる。

戦う力がなくなれば争いがなくなる、なんて簡単には言えない。暴力を振るわなくても、例えば人を騙したり、意味のない悪意をぶつける人は確実にいる。

それでも。

楽しくて戦ってる人なんて一部のやばい人だけだって私は思ってる。

「しーちゃんも一緒にお昼寝しようよ」

「寝ている間にお前を殺すかもしれないぞ」

「できるならどうぞ」

「ちっ」

しーちゃん達には『島の住人を害せない』『自衛以外の戦闘ができない』『縛りをかけている。破ろうとした場合は全身に激痛が走る仕組みだ。』

ナイフを持って私に近づいただけで立っていられないような状態になるので、私を殺すのはほぼ不可能。

舌打ちしたしーちゃんは黙って私についてくる。

本当にお昼寝したいわけじゃないと思うけど、まだ気持ちが収まらないんだと思う。

「なあ、お前」

「ん?」

「世界から『個性』が消えたら、お前は長生きできないぞ」

「だろうね。それが?」

しーちゃんは数秒黙った後で「わかっているならいい」と言った。

「せいぜい余生を楽しく過ごせばいい」

「うん、そうする」

私はお昼寝をして、しーちゃんは隣で日光浴をした。

式典、そして第一回目のテロから五年後、私は『不老不死』や『オール・フォー・ワンAFO』を除く、ほぼすべての“個性”を失った。



## 26. 終わりの始まり

「皆さん、今までありがとうございました」

私は城のホールで、今まで手伝ってくれた人達に頭を下げた。

観光業のスタッフ、物資の納入に協力してくれた人、島の保全に努めてくれた人。

しーちゃんを含む、攻撃作戦に失敗して行くところがなくなり、島で引き受けた人達。

全員が集まって私の話を聞いてくれている。

観光ツアーは打ち切った。

始めてから結構経ったので、純粹に個性を失いに来る人はほとんどいなくなってる。

度重なる攻撃のせいで遊びに来る人も減ってるので、表向きの理由は業績悪化。

「皆さんのお陰で今までやってることができました。これでお別れになるのは名残惜しいですが、どうかこれからもお元気で」

でも、本当の理由は違う。

私の力が大幅に弱まったから。

あれこれ便利な個性が消えてしまったので、もうワープも使い魔の作成も、個性の装置化もできない。

まだ『不老不死』があるので殺されても死ぬことはないけど、ここから先は島を守りきれぬ保証がない。

今すぐどうこうはならないけど、今は大丈夫だからこそ、逃げてもらわないといけない。

「忘れ物はないようにしてくださいね。お土産もお忘れなく。武器とか以外から、欲しいものは遠慮なく持って行ってください」

あまり長々話すのはやめて、さっと終わらせる。

質疑応答はこうなる前にさんざんやったので、みんな静かだ。

静かなほうありがたいので、小さく泣き声が聞こえるのとか本当に勘弁して欲しい。

「はいはい！ それじゃ解散！」

「気をつけて帰ってくださいねえ。明日にはゲート埋めちゃいますからね」

透ちゃんとトガちゃんが指示を出してくれるので、私は早めに退場する。

ホールを出た後は自分の部屋でご飯を食べた。

城は石造りなせいか、ドアを閉めると遮音性が高い。ご飯に集中したのもあって、周りの音は何も聞こえなかった。

「永遠ちゃん」

トガちゃんが用意してくれた軽食から、面倒臭がりな人の強い味方、カップ麺や冷凍食品まで、結構な量の食べ物がなくなった頃、透ちゃんとトガちゃんが戻ってきた。

「終わった？」

「うん、終わったよ」

「これで二人……三人だけですよ、永遠ちゃん」

「なんで最初二人って言ったの、トガちゃん？」

「間違えただけじゃないですかあ」

短く聞いた私に簡単に答えると、さっそく漫才を始める二人。いつも通りだ。

私はくすつと笑って、食べかけの菓子パンを口に放り込んだ。

「あー！ やけ食いは良くないよ永遠ちゃん!？」

「やけ食いじゃないし。エネルギー補給して残機増やしてただけだし」

「トガちゃんはそんなに燃費悪くないのに」

「永遠ちゃんには私を殺す分も補充してもらわないといけませんから」

「そうそう」

最近はめつきり自傷——じゃない、他傷の頻度も減ってるんだけど、そういうことにしておく。

「で、前にも言いましたけど、これからどうします永遠ちゃん？」

「前にも言ったけど、このままここに住むよ」

スタッフをみんな逃がした以上、島を放棄するタイミングが来る。

……と、いうことを「攻撃してきてる人達」も認識するはずなので、私はこの島から動けない。私の存在が島からいなくなった場合、私を探して他の場所が被害に遭うからだ。

「二人は日本に行ってもいいんだよ？」

しーちゃん達、行くところがなかった人達は政府とか八百万家の協力で別の名前と経歴を得てひっそり暮らすことになっている。

透ちちゃんなら葉隠家を頼ってもいいし、トガちちゃん一人くらいお姉ちゃんでも轟君でもエンデヴァーでもラブラブでも、誰かが匿ってくれると思う。

二人に関しては私の側近とはいえ、ガチで殺しに行く理由も少ない。単に私を守ってただけで「個性」をどうこうしたわけじゃないし、島への攻撃って爆弾とかミサイルとかが主流だから人間が阻止できるレベル超えちゃってるし。

と、トガちちゃんが目以外の部分だけで笑顔を作って、

「押し倒しますよ永遠ちゃん」

「あ、それいいね。私もー！」

「いや、透ちちゃんは子供いるじゃん。澄香すみかちゃんのことを思いだしてよ」

「うん、まあ澄香は可愛いけど。父親はどうでもいいしー！」  
ひどい。

澄香ちちゃんというのは名前の通り、透ちちゃんの娘だ。

島を作ったのがほぼ高校卒業時で、それから五年十三年+α。いい加減子供を作ってもいい歳だっことで透ちちゃんは子供を儲けた。

お相手は従兄弟の葉隠栗矢。

任務に失敗し、葉隠家に軟禁されていた彼を半ば強引にレイプ——  
もとい、行為に及んで、正統な葉隠の血を持つ子供を作った。

ぶっちゃけ相手は誰でも良かったらしい。

父親に関しては事が済んだらもう興味ない感じだし、透ちちゃんの恋愛の機会を奪っちゃったのはなんか申し訳ないような、透ちちゃんの場合

合はこれが素なんじやないかって気もするような。

澄香ちゃんは葉隠本家で育てられている。

今までは時々様子を見に行つてたけど、これからはあんまり行けないかもしれない。

「まあ、三人でのんびりしようよ。どうせ生身じゃ戦艦とかには勝てないんだし」

「うわ適當。でも賛成！」

「備蓄はいっぱいありますし、バリアもすぐには破られないでしょうし。本格的にすることがなくなって来ましたねえ」

そうして、私達の隠居生活が始まった。



あれからお姉ちゃん達とはあんまり連絡を取らないようにしてる。バレない程度に会つたりメッセージを送つたりはしてたけど、その程度。それだつて“個性”がごっそり消えてからは殆どしなくなつた。

もちろん、みんな心配してくれてる。

協力するつて言つてくれてるのに私が拒んだ、つていうのが正直なところ。

『最後まで手伝わせてくださいまし。あなたは、義理でも大切な妹なんですのよ』

『うん、ありがとうお姉ちゃん。でも、これは私がやらないと。お姉ちゃん達は自分のやり方で世界を変えて欲しい』

これ以上、巻き込むわけにはいかない。

敵てきにとつて私はなんとしてでも殺したい相手。殺してどうにかならなくても、とりあえず痛い目に遭わせて葬くわりたい相手だ。

ギリギリまで相手になつてあげないといけない。

幸い、バリアをはじめとする防御設備はまだまだ残っていた。

ただ、死ぬほど作つたつもりだったのに枯渴を心配しないといけないあたり、科学の産物はほんとに怖い。その気になつたらぽーんと軽

く何千、何万の人を殺せるっていうんだから馬鹿じゃないのかと思う。発射ボタン押す前に、撃たれる側の気持ちになって考えてみて欲しい。

愚痴っぽくなった。

物資に関してはほんとにこれでもかと用意した。食料なんかも時間を止めた部屋に小分けにして放り込んだので、余裕で年単位で暮らせるレベル。

防衛機能はだいたいオートでなんとかできるようにしてあるので、後はただ待つだけ。

相手が諦めるのを。

予算が尽きるのを。

平和を望む気持ちが勝ってくれるのを。

待つて。

待つて。

待ち続けて。

更に数年が過ぎたある日、最後のバリアが割れた。



「限界です」

トガちゃんが言った。

物資の管理を主導してくれていた彼女が言うんだから間違いない。

「そっか。早かったね。……ううん、遅かったのかな」

「どうだろうね。どっちでもないんじゃない？」

三人だけでの生活にも慣れてしまった。

辛かったかといえ、そんなことはなかった。むしろ楽しかったと思う。ご飯とお昼寝と、お喋り。やりたいことだけをしていければいい生活。

攻撃と戦闘の音が聞こえてこなければ、むしろずっと続けていたかったかもしれない。

世界は既に、全人口の八割以上が「無個性」になっている。

日に日に消失スピードが上がり続けた結果だ。ここまで来たらもう、全ての「個性」が消えるのは予定調和になってるはず。

近いうちに「個性」の無い社会が出来上がる。そう信じる人が多くなれば多くなるだけ、その日はどんどん近づいてくる。

後は時間との勝負だ。

「耐えきれると思う？」

バリアが無くなってもまだ、使い魔の数は尽きていない。

飛べる使い魔、泳げる使い魔がいる限り、ある程度の攻撃は防げる。

島自体と城も物理的な防壁だ。

地中深くに埋まった装置を破壊するにはまず、地上にあるものを根こそぎ吹き飛ばさなければならぬ。それには十分な火力が必要。

更に、城の中や地下にもバリアを張ってあったりする。

襲撃者達にはまだ、島外周のバリアが切れたことはバレてない。バレたら「ひやつほう！」とばかりに襲ってくるだろう。そんな彼らをうんざりさせられる程度には耐久力が残ってるけど、

「ちよつと足りないかもね」

「私もそう思います」

私の予想と、二人の推測は一致していた。

「じゃあ、ますます逃げられないじゃない」

「……そうですね」

頷くトガちゃん。

私とトガちゃんの姿は出会った当時からほぼ変わってない。透ちゃんもまだ『透明』なままなので、私達三人は時の流れを実感しにくい世界にいるんだけど、声色や顔つきまで昔のままとは言い難い。歳を重ねた分、冷静になるし慎重になるし、残酷にもなる。

顔を上げたトガちゃんは当たり前のことを言うように言った。

「世界なんてどうでもいいから逃げましょう、永遠ちゃん」

「駄目だよ」

私は首を振った。

「今更、責任を捨てられない。ちよつとの差で結果が変わるなら努力しなくちゃ」

「透ちゃんからもなんとか言ってく下さい」

「私はどっちでもいいよ。最後まで永遠ちゃんと一緒にいるだけだから」

「この変態」

「トガちゃんにだけは言われたくないんだけど!？」

「いまいちシリアスに徹しきれない私達である。」

「……しようがないですね」

「はあ、とため息をついたトガちゃんは苦笑して言った。」

「じゃあ、私達三人で死にましよう」

そして、最後の戦いが始まった。



島への爆撃が成功した。

これまで何度も何度も、何度も何度も何度も攻撃を繰り返してきた『旧世界派』は待ち望んだ報せに歓喜した。

島の中へと落ちた爆弾は新たなバリアに阻まれ、威力の十分の一も発揮できなかったが——敵の防備も無限ではない、という確証を得たことで勢力の勢いは増した。

クライアントからの資金提供にも弾みがつき、旧世界の破滅を間近に、彼らにとつての聖戦がクライマックスを迎えた。

空の魔物を、海の魔物を殺しつくし。

島内のバリアを破壊しながら陸の魔物を焼き殺す。

攻撃は連日続けられた。

国際社会からのバッシングは強く、彼らは世界の敵とみなされている。

女王の住む『島』は通念的に「国家に準ずる」ものとして扱われており、よって島への攻撃は戦争行為に位置付けられているのだが、そんなことは関係のない話。

変化に順応した『弱い』者達は「個性」社会が戻ってくれば手のひらを返す。

やってはいけない、というルールは「破ったもの勝ち」というところがある。

特に国際社会のルールに関しては「国を罰することのできる存在」が存在しないため、取れる選択肢が限られる。経済制裁はテロリストには効果が薄いため、武力介入という「戦争の拡大」によってしか止めることができない。

悪い奴を懲らしめるんだからいくらでも戦えばいい、というのはその通りなのだが、今度は島の立地が問題になる。海の上に浮かんでいするため、最初から使い捨てるくらいの気持ちでないと戦力を動かせない上、動かした分だけ本国の守りが手薄になるのだ。

よって、狂信的な思想に則って動く悪人達がここまで生き残り続けていた。

——もう少し。

莫大な資金をつぎ込み、見えない防壁を切り崩す。

そして遂に、爆弾が尖塔の一つを破壊した時、彼らは戦いの終わりを見た。

今まで以上の攻撃が開始。

航空機に艦船まで総動員した攻撃部隊が出動し——空を飛ぶドレス姿の美少女によって全てが壊滅させられた。

女王は何の武器も使っていなかった。

腕を振るった風圧だけで航空機を吹き飛ばし、拳で分厚い装甲を貫き、折り紙でもするように翼をへし折った。黒い触手のような腕もそれを手伝い、機銃程度の攻撃は展開された『鎧』によって全て防がれた。

ワン・フォー・オール  
O F Aの健在。

これまで『耐える』『魔物に迎撃させる』という手段しか基本的に取ってこなかった女王が最強最大の個性を未だに所持していたという事実は予測の外にあった。

まだ持っているとは誰も思っていなかったから結果的に消えずに残ってしまった、とでもいうのか。

悪夢のような部隊の全滅。



彼らは方針を転換し、女王という「一人の人間」に近代兵器を差し向けた。

機銃程度ならともかく爆弾の投下やミサイルの発射、戦闘機による体当たりまで行えば、ワープ能力のなくなった女王では対処できない。

予想の通り、多大な犠牲を払いつつも、女王を島の上空まで押しやることに成功し、防戦で手一杯になった彼女を爆発によって焼き尽くした。

ただの焼死体——もはや炭以下の存在になって落下した女王は、落下しながら再生し、崩れた城の天井の残骸へと着地、慌てて城の中へと戻っていった。

勝利だった。

そしてそれから二週間後、女王の城は完全に破壊され、単なる瓦礫の山と化した。

あれから女王が城から出てくることは、一度としてなかった。

## 27. 始まりの終わり

『旧世界派』が城を爆撃したのは、戦いの規模を落とすことを嫌ったからだ。

歩兵部隊を投入しての突入作戦となれば何が待っているかわからない。罾が満載のダンジョンに初見で挑戦するようなもの。何よりラスボスである女王と正面からぶつからなければならなくなる。

時間をかけたくない彼らとしては城や装置ごと何もかもを吹き飛ばしてしまう方が簡単で確実な方法だった。

結果として、女王は城に引きこもったまま姿を現さなかった。

島と外界との行き来が停止していることは調査済み。

もちろん、O F Aのように隠しているだけで、実はとっておきの通路が残っていた可能性はある。その場合、引きこもったのではなく別の場所に避難したことになるだろう。

しかし、それでも『逃げた』という事実が残る。

逃亡した時点で相手は敗北を認めているのだ。

ただし、残念ながら、城を破壊しても装置は健在だった。

装置が島にあることは生み出される輝きによって確認できている。もし、この輝きさえ欺瞞だというのならお手上げに近いが、一般市民からの信用を重んじる女王の性格からそれは無いと判断していた。

よって、行うべきことは変わらない。

城の瓦礫を吹き飛ばそうと更なる爆撃を敢行して——そこで、彼らは思わぬ事態に直面した。

城が内部から爆発した。

大量の火薬を用いたような大爆発。

殆どの瓦礫が木端微塵に吹き飛び、残ったのは小さな破片と土の地面だけだった。

当然、女王や側近二名の姿もなし。凶らずも安全が確認できたために歩兵を派遣して搜索したところ、僅かに燃え残った人骨を三種類発見した。

妙ではある。

『不老不死』が健在なら、あの女王がこう簡単に死ぬだろうか？

あの再生は『不老不死』ではなく『超再生』であったのなら納得がいく。三人死んでいる以上、本物であればトガヒミコも死んでいるはずで、つまり『不老不死』は既に消去済みだったのだろう。

これが偽装だったら？

関係ない。

装置の輝きは未だ失われていない。先行すべきは装置の発掘と破壊であり、女王の搜索はその後だ。何より、たとえ偽物だったとしても「女王の敗北」を印象づけるのに遺体は使える。

彼らは先の戦闘の映像、爆撃によって破壊された城の様子、そして『誰かの遺骨』を世界公開し、人々に自分達の勝利をアピールした。

刻一刻と決定的な変革が近づいている、そんな日のことだった。



女王とテロリストの戦いを、普通に暮らす人々はどこか他人事として捉えていた。

多くの人にとってはもう「世界は変わっている」という認識であり、街も人も「個性」がないことを前提とした生活を始めている。

科学の発展と共に流行してきた「個性」が無くなることは当初こそ、生活様式そのものが昔のように戻ってしまうのではと心配されていたものの、もちろん、便利な家電や公共設備がごっそり無くなってしまふ、なんていうことは起こらなかった。

むしろ、多様な異形型「個性」への対応などを考えなくて良くなる分、各種デザインは洗練され、コストは削減されたくらいだ。

日を追うごとに敵も滅り、今では敵出現がニュースになると「珍しいな」と驚かれるくらいになっている。

銃やナイフによる犯罪は横行しているものの、その程度の攻撃なら発見さえ早ければ十分に生き残れる。

突然、曲がり角から敵が現れて一瞬で黒焦げ、即死などという可能性が存在した個性全盛時代に比べれば暮らしは格段に良くなった。

だから、女王が今なお戦っていると言われても半ばどうでも良かった。

『女王は負けない』と思われていたせいもある。

圧倒的な力で敵を薙ぎ払っていた彼女がテロリスト如きに負けるはずない。たとえ負けたとしても「個性」の消滅は止まらなないと、彼らは無邪気に信じていた。

だから、

『女王は敗北した』

テロリストが大手動画サイトに投稿した衝撃的な動画は瞬く間に世界を駆け巡った。

多くの人が目を疑った。

必死の苦闘。

たった一人でボロボロになりながら、否、完膚なきまでに殺されてなお諦めずに城へ逃げ込む姿。

二十歳にも満たない容姿の少女を殺すために投下される爆弾の数々。

跡形もなくなった城の姿と、焼けた骨の破片。

それらは、人々の認識を変えるのに十分だった。

——絶望。

人々が抱いたのは落胆と諦めが入り混じった現状認識ではなかった。

「ひどい」

「ここまでするとかありえないだろ」

テロリストに対する怒りや抗議の声が一気に巻き起こった。

「女王が死ぬわけない」

「そうだ。骨だけじゃ本人かどうかわからない」

女王の生存を望む声が多数上がった。

「壊されなくてくれ」

「世界が変わるまで持ちこたえてくれ」

最後の瞬間まで装置がもつことを、多くの人が真剣に願った。女王は決して正義ではない。

彼女とて人が乗った航空機を破壊し、爆散させ、船舶さえも行動不能や沈没に追いやっていく。

それでも。

ギリギリまで、敵も含めた人的犠牲を抑え、度重なる攻撃にひたすら耐え、支援者たちさえも安全な場所に逃がして矢面に立ち続けた彼女は、人々が応援するに十分な「理由」を備えていた。

無数の願いが、想いが、力となって空に舞い上がった。

そして、そんなある日。

とある発表が更に世界を揺るがせた。



アメリカにて、かつての名ヒーロー、ジェネラル・ユナイテッドが。日本にて八百万家の次期当主・八百万百が。

フランスにて「シーちゃん」を名乗る女性が。

南米の小さな村にて、頭をブドウの形でお揃いにした一家が。

他にも、オール・フォー・ワンから女王に助けられたという者達が世界のあちこちで。

『「個性」を消す装置ならここにあり』

ほぼ同時に、動画にて同じ発表を行った。

背後にきらきら輝く結晶のようなものを映して、だ。

もちろん、本物であるという証拠はない。

それでもこの発表は、テロリスト達の島への攻撃が不当なものであるという機運を一気に高めた。

これを受け、大国アメリカが「世界的なテロリスト掃討のため」と銘打ち、島への部隊派遣を決定。他国へと呼びかけを行った結果、幾つもの国がこれに賛同した。

「がんばれ、女王」

「テロリストなんかには負けるな」

もともと少数派であった『旧世界派』は本格的に世界から敵視され——装置を発見できていない状況での撤退さえも検討せざるを得な

くなつた。

勝つたのは、果たしてどちらだったのか。



『国連は連日続いていた個性消失報告が先週の日曜に途絶えてから一週間が経つたことを受け、本日正午「完全な無個性社会が遂に到来したとみられる」と発表しました。繰り返します。国連は——』

テレビの中でニュースキャスターが淡々と『本日目の目玉ニュース』を読み上げている。

私は画面にじーっと視線を向けたまま、ニュースの内容をあらためて噛みしめて深い溜め息をついた。

「……本当、良かったよ」

「永遠ちゃん。それ、いつまで言うつもり？」

艶やかな黒髪の大和撫子的な美人さんが私の斜め後ろに立ったまま、呆れた様子で言ってくる。

私が座ってるソファ、スペースは空いてるんだから座ればいいのに、様式美は大事だからってなかなか了承してくれない。

「いいじゃない。あと一週間くらいは言わせて欲しい」

「気持ちわかりますけど、正直、聞き飽きましたよねえ」

と、こちらは三つ編みに野暮つたい眼鏡の美少女。

眼鏡の奥にある瞳は切れ長だった昔の面影を残しつつ、よりクールな印象に。髪も曼珠沙華ヘアをやめたうえ、色が地味なものに変わったので、ぱつと見で同一人物だとわかる人は少ない。

昔からよく知ってる人にとっては「この程度じゃ直感でわかる」って話になるんだけど。

「うーん。しょうがないなあ」

リモコンの電源ボタンを押すと、画面が消える。

黒くなった液晶に映つたのは十五歳くらいの女の子の顔。これから美人になりそうな雰囲気はあるものの、今の段階ではよくいる女子高生（女子中学生）っていう感じ。

前の顔や前の前の顔とは似ているような似ていないような、昔から以下略って感じ。

「まだ慣れないよね、自分の顔」

「ですねぇ」

「ほんとほんと」

三人で頷きあっていると、万一にも音が漏れないように分厚くなっている部屋の扉が開いて、大人の女の魅力を漂わせた巨乳美女が入ってきた。

「楽しそうですけれど、何のお話ですか?」

「新しい顔の話だよ」

「パンでできているわけではないのですから、関係者以外に吹聴しないでくださいましね」

苦笑したお姉ちゃんに私は「うん」と頷いた。大丈夫、その辺はわかまえている。

「不自由はありませんこと?」

「大丈夫。……ってというか、そんなに毎回聞かなくても」

「いいではありませんか」

大人になったせいかな、お姉ちゃんは前より世話焼きになった。

本人曰く「ややこしい世界で生きていると人恋しくなるんですよ」とのこと。

「ってというか、ご当主様本人が世話係ってどうなの?」

「永遠ちゃんのお世話くらい私達でできるんですから」

「そういうわけにはいきませんわ。当主として『ここ』の管理は必須ですし、あなた達の存在を教えられる人間なんてそうはいません」

お姉ちゃんの顔には「半分くらい方便」だっけって書いてあったけど、私達だって本心ではお姉ちゃんが来てくれて嬉しいし、来てほしいと思ってる。

でも、体面とか色々考えたら止めた方がいいかな、っていうのも事実なわけで。

「個性」消去装置を守り切れるか守り切れないかの瀬戸際、私達が

取ったのは「死んだふり作戦」だった。

OFAの残っていた私がある程度敵を食い止めたら「こりや敵わない」というフリをして撤退。自爆装置をセットしてから（文字通り物理的に）埋めてあったゲートの一つを掘り返して——というか、超パワーで無理やり穴を開けて使えるようにして、城を去った。

残してきた骨は以前『万物創造』で作っておいた精巧なダミーだ。私達がギリギリまで防衛戦を諦めなかったという事実を世界に流して装置を加速させるためだ。

ついでに敵戦力も削ぐことができたし、一時の避難先として例のマンションへ移動したところ、管理人姉妹が「人情」という最強の手札で買収されていてお姉ちゃんに連絡が行った。お姉ちゃんはお姉ちゃんで偽結晶を世界各地で公開するという対抗措置を計画してくれていて、更に敵が私達の遺体（偽）を公開するとか「やらかし」てくれたので、結果的にはだいぶ余裕が出た。

アメリカとかち合うのが嫌だったのか、奴ら早々に発掘諦めて退散していったし。

で、私達は結局、八百万の屋敷に匿われることになった。

透ちゃんは『透明』が消失されて素顔になり、隠密行動ができなくなったものの、ぶつちやけ彼女の素顔は誰も見たことがなかったので逆に変装がいらない。

私とトガちゃんに関してはいつもの手。『不老不死』が残っているうちに一回自殺し、「必要に応じて進化・再構築する」機能を利用した。お陰で声紋や指紋、網膜まで変わってる。今、偽造戸籍も用意してもらっているの、ほとぼりが冷めたらシャバに出られるかもしれない。

「本当に良かったですわ。あなた方が無事で」

「私達だって死にたくないもん。逃げられそうなら逃げるよ」

目的を達成しないで逃げるのが嫌だったただけだ。

それだって、虐殺やら何やらができるならもっと楽だったわけで、あんなにギリギリになったのは自業自得なんだけど。



助けてくれたしーちゃん達にも感謝しないといけない。

「外に出られたらどうするか、決まりまして?」

「定食屋さんでもやろうかなって」

「お蕎麦屋さんだよ!」

「カフェじゃありませんでした?」

「……つまり、まだ決まっていはいんですのね」

お姉ちゃんが溜め息をついた。

うん、出られたら三人で何かしよう、っていうところまでは決まってるんだけど、その先がまだ未定。

お店を開くっていうアイデアは自分達で稼ぐため。

八百万家から定期的な資金提供をしてくれる、っていう申し出もあったんだけど、ぶつちやけそんなの怪しすぎるわけで。だったらカモフラージュのためにも何かしておいた方がいい。

トガちゃんが料理得意だし、私も味見は得意だからちようどいい。具体的に何にするかは見ての通り意見が割れてて決まらないんだけど。

「まあ、時間はあるしゆっくり決めるよ」

少なくとも数年は待たないといけないだろうし。

「……『不老不死』は残ったままですものね」

お姉ちゃんが呟いた通り、私の『不老不死』は失われていない。

っていうかA F OとO F Aも残ってたりする。

A F OとO F Aが最後の方まで残ってたのはたぶんキャパシティの問題。どっちも普通の「個性」の何倍も重いうえ、O F AはA F Oと一緒にやないと消えたがらない。なので最後の局面で振るうことができた。

でも今なお残ってるのは謎。『奇跡を起こす』個性の力に抵抗できるほどキャパシティがやばいのか、それとも『不老不死』が無駄に抵抗してるのか、それとも人々が消すことを望んでいないのか。

もし最後の理由だとしたら、私は何か大事があった際の調停装置として期待されているんだろう。

さすがにそうそう何かあるとかないと思うんだけど。

世界大戦が起こるとか、古の吸血鬼が復活するとか、宇宙人が攻めてくるとかないとも限らない。なにせ、突然異能者が生まれるような世界だ。

そうだったら、もう一度力を振るうこともあるかもしれない。

そうなった時、人々が私の力を要らないと判断するかどうか。今度こそ全部の「個性」が消えたとして、しつこく私を恨んでる人がいないかどうか。

それは蓋を開けてみなければわからない。

というか、本当に「個性」が消滅しきったかどうかともわからない。中国で光る赤子が生まれてから世界人口の八割が「個性」を持つまでにたつた五世代。ナノマシンの何かが人為的にばら撒かれてもおかしくない。

悪意のある誰かが暗躍していて、ここぞとばかりに襲ってくるとか、嫌すぎるけど一応考えておかないと。

「いつまでもあるとも限らないけどね。あるうちは使わせてもらおうかな」

「育たないっていうのも不便なんですけどね」

「しようがないよ。怪しまれるようになったら外国にでも行こう！」

私達のやり取りをみてお姉ちゃんがぐすりと笑った。

「永遠達は楽しそうでいいですわね」

「そうだね。楽しいよ」

なにせ、生きてるんだ。

大勢の人から「死ぬ」って言われたあの時とは全然違う。

生まれてすぐ母親から殺された時とも違う。

守ってくれる人がいて、みんなが「頑張れ」って言ってくれた。

終わってみると、結局私は、自分が生きていていい理由を確保するためだけに戦っていたのかもしれない。

反省はしてる。

でも、後悔はしていない。

生きられる限りは生きていたい。

死なない私だからこそ精神的に殺されるのは——存在を望まれな

いのは、辛いんだ。

「そうそう。永遠達が帰ってきたところで焦凍さんと結婚式を挙げようと思うのですが——」

「まだ挙げてなかったんだ！ おめでとう！ でも、お祝いする資金がないなあ」

「ふふっ。大丈夫ですわ。永遠達の資産はちゃんと預かってありますから」

「トガちゃんと私で買ってくればいいね！」

「別に二人で行く必要はないでしょう。……いえ、バレないためであって他意はないんですが」

「なにおう!？」

私は、もう少しだけ生きていく。

少しだけ生きやすくなったはずの、この世界で。